

ホセ・オルテガ・イ・ガセー初期二手稿の意義分析

高 瀬 学

目 次

- 一 はじめに
- 二 一九〇二・一二・一論文の梗概紹介
- 三 一九〇四・一・六 Miguel de Unamuno 宛て carta の内容
- 四 一九〇二・一二・一論文並びに一九〇四・一・六書簡のもつ意味の検討

一 はじめに

我々に *La rebelión de las masas* の著で知られている⁽¹⁾、スペインの思想家 José Ortega y Gasset は一二巻にもなる大きな思索の記録を残している⁽²⁾。

私は前著ニッコロ・マキアヴェッリ思想の原画分析以来、いわゆる個の一般理論形成とその挫折並びに再編の可能性を探るために彼オルテガに関心を向けて今日に至っている⁽³⁾。

ホセ・オルテガ・イ・ガセー初期二手稿の意義分析（高 瀬）

今回、この機会にこれまで書き留めておいた覚書を整理し、でき得る限り年代を追って彼の思想体系形成の軌跡を追ってゆきたいと考え、手始めに極く初期の二作をとりあげ、その意味するところを陳述したいと考えるものである。

周知のように、オルテガの思想的基幹、いわばそのトルソともいべきものが確立されるに至ったのは一九一四年の公刊にかかる *Meditaciones del Quijote* ⁽⁴⁾ であつた。彼の体系はこの書に示されたところを方法⁽⁵⁾として、*conciencia de la circunstancia* を基軸にすえて展開されたと思得るからである。

だが、全集第一巻の *Índice* ⁽⁶⁾ にも掲げられてゐる *Glosas* ⁽⁷⁾ 以下 *Fiesta de Aranjuez en honor de Azorín* ⁽⁸⁾ に至るまで三五の論説と一九編より成る *Vieja y nueva Política* ⁽⁹⁾ があるし、これに加えて一九〇四・一、六 *Miguel de Unamuno* に宛てた *carta* に始まる一四の書簡に窺われる著作活動が先行しているのである。

だから、この *circunstancia* という概念とこれとの“yo”の関連についての解釈もこういった一九〇二〜一九一三にわたつた彼の思索の軌跡を考慮せよになさるべきではないとさへ言い得るであらう。

ところで、奇しくも齡三〇にしてキホーテの省察を世に問うた *José Ortega y Gasset* は而立にしてフイレンツェ共和国第二官房書記官長となつて、イタリアの歴史ドラマに登場し *Il Principe* の外主著を次々に草したニコロ・マキアヴェッリと何か暗合めいたものをもっているように感ぜられてならない。

というのは、彼ニコロの場合も光の部分が実は影であり、先行していたものが却つて光だったのであるが、オルテガにもこれと同じことが見られると考えられるからである。既に主著に到る道にあつて、その形成プログラムはでき上つていたといえよう。

これから、順次これら“先行”期著作をとりあげ、その意味するところを探ることになるが、オルテガにとっての先行期はスペイン政府奨学金を得てドイツを留学先に選り抜く(10)一九〇五年、とりわけ五・一六 Francisco Navarro Ledesma 宛ての第二書簡で前後の二期に分けられるべきだと思われるので当面はこの先行期前期のうちで、彼の思想体系礎石ともいうべき一九〇二・一二・一 Vida nueva 誌に掲載された論稿 De la critica personal と一九〇四・一・六 Miguel de Unamuno にあてた carta をとりあげ、とくに一九〇二年論文に至る文献的空白期並びに沈黙の一九〇三年がオルテガ思想展開の上で何を語ることになるのか、その意味の解析を試みたいと思うのである。

二 一九〇二・一二・一 論文の梗概紹介

Vida nueva 誌に掲載された百三十二文節より成る、この論稿はホセ・オルテガ・イ・ガセーが真理を真面目に追求(1)め、形而上学的な確かさを得んものと努めている或る長友と前日交わした会話で始められる(2)。(3)

この時のテーマともいうべきものは批評であった。彼はいきなり何がしの作品批評を読んだかとオルテガに尋ねたのである(4)。(5)その批評はスペイン古典演劇を退屈なもの、はなからきめていたものであった。そこにこの友の批判の矢が向けられ、オルテガがはじめ deliciosa と答えたのが、また彼の不快感をかきたてたのである(6)。(7)

ところで、この人は批評について既に固定観念をもっていた。それは不偏性であった(8)。(9)この una carne indudable para él に於いて deliciosa とか aburrimiento といった感情的な、またあまりにも個人的で、相対性を帯びた感慨と

でもいふべき言葉を吐くこと自体我慢のならないものであった。そこで彼は直ちに批評の不偏性はこうしたと反問をしたのである。⁽¹⁰⁾

だが、ここからオルテガの省察が展開されることになるのである。確かに不偏性は実存把握に際して、その客観化を目指している点においてまさしく対象の論理化であり、その限りでは正しさをもっている。批評はまこと不偏的なものでなければならぬ。⁽¹¹⁾客観的批評こそ、こういった営為にあづかるものとして心がけねばならぬ。事物とか行為を前にして落着きはらい、冷淡でさえある不偏性こそ批評が具えて然るべきものである。⁽¹²⁾

だが、客観性が自分の眼前にある対象、生起した事象たる行為のみに限られるならば、それらについて語られる批評は残念乍ら小児病的萎縮症状を呈するといわねばならぬであらう。なぜなら、事物や行為には必ずその creator が存するからである。⁽¹³⁾事物や行為の存在すること自体が既にその創始者との共在関数的な関わり合いの中におかれているのであって、かかる創始者から切り離された、孤立した状況では在り得ぬことを忘れてはならぬのである。⁽¹⁴⁾だから、かかる主体と客体との相関性をふまえて、出来る限り未知の領域を残さぬように論理化してゆくことによって果敢な挑戦を行ない、全面的な客観性に少しでも接近すべきである。そのためには些細なものでも大事にして、その具体化と取り組まねばならぬのであって、それまでは不偏性といった極限価値観念が既知のものとなったかの如き口吻は避けねばならぬのである。⁽¹⁵⁾素粒子といった極微の世界が宇宙誕生を明らかにする手懸りを与えるのであって、具体化よりも抽象化に傾き、これによってかかる共在の場を捨象してしまう不偏性志向こそまさしく偏見そのものであることを知るべきなのである。⁽¹⁶⁾

こうして、オルテガは主体と客体の共在、ここでの未知領域具体化への挑戦、まさにこういふ *Lucha* ⁽¹⁸⁾に本質・

本体的、基体的なものを捉え、そのより粗策化した現象である批評論争を紹介しつつ、その断面によって自己の見解に対する証言を引き出そうとするのである。

例えば Victor Hugo と Ponsard の間で行われて、彼らの弟子たちの時代にまで、もちこした論争は結局のところ(19)前者が抒情詩、後者が古代詩風復活に帰着するものでしかないが、それはまた嘗ってイリオンをめぐる争ったトロイ人とアカイア人との戦いの現代版ともいふべきものであった。(21)

既にそこには戦い合ひがあり、戦う当事者の共在が作動しているのである。人間の行為そのものが、作品自体が、その作者との関わり合ひにおいて在るのであって、それこそまさに未知なるものを既知たらしめてゆく闘いの記録であるといえよう。そこには *author* の事物との共在関係にあって展開されてゆく生の軌跡そのものが存するわけである。(22)

だから、批評が真に客観的であるためには生そのものが、かかる共在にあっての未知の既知化への闘いといったメカニズムによったものであることを認識し、作品を成立させ、これと共在関係にある主体を捨象した、いわゆる客観主義批評はまさしく対象化さるべき生の共在構図を恣意的に不偏性を名とし、この軍旗のもとで不条理的に歪めた偏見なのであり、生のメカニズム模写を近似值的に行なうという批評の責務に応えたものとはいひ難いものであり、批評の自殺に他ならないのである。それは生展開をふまえた、生ける批評(23)ではない。

批評の対象が、かかる共在の場にあるの *lucha* に他ならぬ生である以上、批評家は闘わねばならぬし、批評がこう(24)いった闘いであってこそ生きたものとなるのである。今はこういった批評こそ必要なのだといえよう。

ところで、批評を生に即した、生けるものとしてゆくの、これまで欠落していたものは何かに目を向けねばなる(25)

まい。こういった不偏性の名において、批評を生なきものと化さしめているプロセス自体が明白に物語って呉れると見得るであろう。既に触れたように不偏性を a priori な価値と看做し、これこそ正義保障の前提であるとする態度がそれなのである。それはボルツァーノ級数に答えを見つけると同じ誤りを犯し、いわば andar sobre las manos といった恰好だからである。

不偏性、正義はいつて見れば無限に接近し、またそうせねばならぬ極限值でしかないのに既知の定値を考え、ために共在の場にあることの把握を却って犠牲に供する観念なのである。

主体を主体たらしめる主体内の二項的共在構図を主体そのものを切り捨てる恣意的暴力によって歪め、主体内に目を向けさせないようにし、これによって脱個性化を齎らす結果となるのである。これこそ批評を生きたものとなし得ぬ元凶だといえよう。客体と *pareja* をなしそれとの共在にある主体而も内なるものを具えた主体に、こういった先入主を脱却して目を向けることで、その具体的論理化作業を進めてゆくべきであって、これがまさに緊要急迫なことなのである。

スペインでは、この脱個性化といった未知領域残置が、とりわけ外国の先蹤の物真似でしかない客観的批評の摂受によって増幅されている現状の基因をなし、いわば自己内回路の自己閉鎖窮れりといった観を深くさせるところに問題が存しているといえるのである。

こうして、友の主張するところが実は la crítica impersonal⁽³⁰⁾ に他ならず、而もフランスの模倣でしかない所以をテースと「サルセー」をとりあげることによって説き明かさんとするのである。オルテガはかくて先ずテースの客観批評⁽³²⁾について言及の筆をとる。

テースが *critica impersonal* を客観批評の旗幟の下で追い求めた⁽³³⁾のは Brunière の言葉を引けば十分であろう。

Brunière はテースこそ批評判断の客観的基礎を定立することにのみ、その生涯を捧げた者と語っている⁽³⁴⁾。テース

のねらいは審美学の尺度、美の規範的音叉の構築におかれていた。つまり諸価値の階程又は音階表の作製だったのである⁽³⁵⁾。

テースはこうして *lo puro* を現象がもっている具体相を捨象し、没個性化することによって求めていった。これこそまさに *impersonal* たりんとすることであった⁽³⁶⁾。

このためにテースにとっての審美的価値の極点をなしていた⁽³⁷⁾。

善美は非現実的な哲学的価値しかもたぬ結果となるのである。テースは、こういった音叉階程に拠って善・美の価値

判断を下すことになるが、この事自体 *patena* をなした構造性を有する生の表現なるべき個性的な芸術にまるで柳の

小籠から水が洩れてゆくようにテース論理の所産をいかぐって逃げさせるのである⁽³⁸⁾。結局、テースの批評は Barbey

d'Aureville が語る如く一切の批評の *muerie* を意味するものであり、また *Sainte-Beuve* がテースの英文学史は文学

による英国史と呼ぶべきであると述べている通り、生きた批評ではなくなっているのである⁽³⁹⁾。

所詮「客観」批評なるものは脱個性批評なのであり、生命をもった客観化さるべき対象を標本化し、その生を奪っ

てしまったものであると言うべきであって、その実例がテースに見られるのである⁽⁴⁰⁾。

ところで、これと並んでも一つの非人格的脱個性批評がある。これはサルセーつまり *el burgués, buen padre de*

familia のものである⁽⁴¹⁾。

これも批評における主体能作の及ぼす影響を嘆かわしいものと思ひ込み、群衆という、どこかうら悲しい、没個性

化されたものにその客観性を求めるものである。大多数が肯定するものを肯定し、少数者の否定するところを否定す

るのが、そこでの基準をなすものなのではないよう⁽⁴²⁾。

それはポーのいうような群衆という陰気な物悲しい人と自らを化し、⁽⁴⁸⁾個人的な決定、人格的な影響力を大衆のそれと引き換える手続⁽⁴⁹⁾を執ることによって個トボスの内なるものを空洞化するのと同義なのである。つまりところこのような多数決原理は個喪失であり、個内回路の自己封鎖以外の何物でもないであろう。

こうして、それぞれの自己放棄いわば自己よりの逃走の総計ともいうべき脱人格の群衆が生れるに至るのである。それはアメーバ宛らの原生動物同然に不随意であり、悟性を持ち合わせたものではない。⁽⁵²⁾

だから、モンテスキューは多数決原則をやんわりと小突きまわすのであり、⁽⁵³⁾それもまた尤もなことであるといえよう。八人の決定が多数のゆえを以て、二人の決定を排して採択されるが、果してこれではいかば疑問視されるからである。二人よりも八人の方がもっと没個性化の可能性を含み、特に根回しなどによる合意の強制が行われる場合は尚更であって、ここでの人は単なる員数にもはや成り下ってしまっており、また多くなればなるほど脱人間化プロセスが進むだけに有害となる虞れも大きくなるだけに、⁽⁵⁴⁾こういったアメーバ化されたものの意見によるのは考えさせられることである。多数決原理の採用はかかる危険性を賭けたものと言えよう。⁽⁵⁵⁾

だから、多数決は非常に大きな誤りを犯すものであると断じて差支えなからう。⁽⁵⁶⁾

こういった点で輓近群衆が注目されるに至り、群衆心理学の発達には見るべきものがあるが、だが個々のものが群衆化することは没個性化、主体自身の己れの生よりの「*Je*」を伴うものであるので、群衆化すること自体望ましいものとは言えず、⁽⁵⁸⁾群衆よりの個存在の復権こそ必要なものとせねばならぬので、かかる大衆化に順応しているとも見得る、この種心理学の成立そのものが問題視されるべきであると同時に今のところその観察成果も既にフランス・ベールコンが劇場のイドラとして取り上げたところから出ることのない、古くさいものでもあるのがその現状である。⁽⁵⁹⁾

ニーチェはかかる劇場のイドラを扱って、これこそ人が自分自身を家に置き放しにして、自ら語り選ぶ権利を放棄して、所与に酔い自らの趣味、独立性を喪失したままで劇場に赴くの謂であり、従って四壁に閉ぢこめられて、自分に嘘をつき、個人ではなく *ego* に転身しその忠実な僕として自己喪失のまさに弱き者になり果てるところに生れると、その成立機序をいみじくも喝破するのである。⁽⁶¹⁾

だが、このような多数決に凭れ掛かった非人称批判、脱個性的な批評いわば世評ともいふべきものは自分自身を家に放置するどころか置くべきものを既にもたぬとさえ言えるのであって、かくすることによって自己は空洞化の状況にあるわけである。

というのは、かかる非人称批評は代弁している筈の群衆と何らかの関わり合いをもたぬものだからである。群衆・大衆はそれ自体 *lo nosterneo* であって、実体性を欠落した根無し草に他ならず、非人称的たることによって今日存しているのが明日もまた同じであると認められる個人のもつ、自分についての同一性の記憶を有することはない。⁽⁶³⁾ つまり、批評の内容を構成する判断主体そのものが、空洞化され不可思議なことに消えてしまっているので不偏を名目としながら、こういった大衆世論によりかかった非人格的批評は実のところ大衆の意見ではなく、匿名化された *o nosterneo* なのである。⁽⁶⁵⁾ それは群衆のでも、批評家の意見でもないものであって、個人的な決定を正しく人格的なものたらしめる個回路の、多数を名とした条件的放棄と異なるところのないものだといえよう。

客観的であることはこういった自己内回路の封鎖を行なって、所与として作動展開している構造性を切り刻み、自己への裏切りを果させることではなく、まさに、かかる構造性そのものに対して誠実さを尽すことであって、その論理的表象化を図ることではなければならない。然るに実際は客観性、不偏性の旗幟を掲げながら、テーヌ或はサルセー流

の実体を欠いた批評を生んでいるのが実情なのである。

こうして、常識、通念が登場するのであるが、これらはいずれも自己が条件的に多数の一部となることによって、潜勢化され、収束されて点や線と化したものであって、未知のものに挑戦する敢為、勇気を棄て、既知のものの中に甘んずる小成(68)的な退嬰性によったものだといえよう。

だが、主張する個たる、まさしく *auto* を欠落した、行為者の示されぬ通念はこれまで縷述したようなメカニズムを紹介して、“個性をもち具体的に肉と骨をもった人”を“*genie*”に変えてしまふのである。(69)人は人たる前に *genie* であろうとし、*genie* として存立する根拠を求めるに至るのである。(70)ここに現代社会の大衆化状況がもたらした変化相が見られるのであり、現代社会の混乱と騷擾またこれを起因とするのだといえよう。事実、この自己内回路を閉鎖し脱個人化した *la genie* は自らに価値を賦与してくれると思われるものを溺れる手の藁同様につかまんとする。(72)能作的ではなく、まさに海に殺到する鼠の大群宛らに被動的にあてなく縋り付くのである。(73)そこに自己より逃走を企てた者の末路の姿がみられ、*la genie* にとっての蜘蛛の糸にも比すべきものは結局のところ英雄になるのである。沙漠に求められるマナと同じく人にして人に非ざる *la genie* はまた人にして人に非ざる“超人”を渴望するに至るのである。

だが、その超人はカーライルが語る自己の存在に誠実な、人たるの道の延長線に現われてくるニーチエ的な *Zarathustra* ではなく(74)、貨幣に化体され、いわば自己の外殻に付着した牡蛎同様の、“人”からの逃避の果てにその強迫を代替してくれる成り上り者であり、擬似的超人であり、英雄なのである。(75)いわば資本という怪物が、“金”(76)“権”(77)の仮面をかぶって英雄の座に上るのである。本来人が自らのために創出した、それ自体まさしく名目的なものにすぎぬ

貨幣に人が跪拝するに至るわけである。かくて物神を祀る、眼には見えぬ巨大な廟が建てられ、その抽象ゆえに実際上は古代エジプトのアメン祭司団宛らに、現代の資本家群に化体された、これら金権神官たちが人々の絶対帰依と盲目的従属とを強制し、⁽⁷⁸⁾ *la gente* はこれに嬉嬉として平伏し、これを仰奉るのである。

ところで、世論という匿名的な批評を媒介として、意図的な贋のプロパガンダによって独裁に傾斜させようとするマニピレーションにどう対処せねばならぬであらうか。⁽⁷⁹⁾

ここで、オルテガは彼の事物認識論的な見解展開を行なうことになるのである。⁽⁸⁰⁾

一体、かかる匿名的な批評展開もその不偏性への、かなえられぬ希求の中に化体されているように、一つのバランス観をもたざるを得ぬことを媒介にして構造性をポテンシャルな形で作動させてはいるのである。だが、その意識以前又はジグムント・フロイトのいう無意識⁽⁸¹⁾での、その作動をそのまま意識の上で図式化し、翻訳するのではなく、意識が却って、これを収束させ、萎縮させるという逆行的な手続をとることになるのであって、そこに個人実存の中の潜在意識と意識の乖離並びに葛藤の因を胚胎させるのである。つまりテーヌのいわゆる客観的批評もかかる世評なるものも何れも所詮は意識による個實在の畸型・暴力時な切り捨てに他ならぬのである。望遠鏡を介して見られる月の世界に遊び過ぎて、観ている自分を忘失してしまっているといえよう。自ら掲げた不偏性という旗幟とは裏腹に、その偏った構図の構成自体に既に問題をもっていることになる。だから、こういった構図の歪みを修正していくためには遠視という自らの水晶体異常を補助手段を用いて矯正することでなければならぬのである。⁽⁸²⁾より積極的な表現を用いるなら、自己の周囲に眼を注ぐよりは事物そのものと直接ぶつかってゆく⁽⁸³⁾態度が必要であるといえよう。遠景もあれば、また近景も存するといった遠近手法によって構図そのものに、まさに偏頗がないようにせねばならぬので

あって、そのためには構図の中に個存在の内なる記録を是非共付け加えねばならぬのである。

未だよく知られていない領域である個の内に向つての探險、探索の旅に、サンタ・マリア号にのつて赴き、個回路
 措定によって始めて批評は所与の全体構図に限りなく近づき得るのであり、力をそれだけにもつことになるのである。
 である。人格的たることによつて強力となり、事物の理解といった闘いの場にあつて試合巧者になれるのである。か
 くてカーライルがいみじくも喝破した如く、その *ego* に誠実な、真の英雄として客観的な所与の論理的近似値をで
 きるだけ誤差を小さくして構成することが可能となり、またそれだけに生きた批評を行うことができ、その表現はか
 かる近似値を化体したものととしてそれだけに信じてよいものとなるといえよう。奇妙なことにソクラテスの汝自ら
 を知れといった古典的命題の現代的な意義がこれなのであつて、それは取りも直さず、主体内部への測深のすずめで
 あり、構造式化の課題を自らのものとする謂いであるといえよう。二千三百年も前のこの課題が果されるに至つてい
 ないのがまさしく現代の問題をおこなすのであり、今こそこの早くから気づかれていた構造式化について、その定着
 への努力に欠けていたところを補い、これと取り組む必要のある旨を *la parabola* の形をとつて指摘するのである。
 ところで、オルテガは、こういった構造式の論理的定着化を阻むことになる収束性志向を生を極めて褪色した正義
 又は正当性にみつけることになった。構造式の構成には二つの要件が必要である。第一は構造の二肢構造であり、第
 二はその関連づけである。これは伝統的にアリストテレスの二つに一つのアポリアとして表白されているところと深
 い関わり合いをもつものであり、表見的には一応主・客構造として現象しているものでもある。だが、この現象にと
 どまることなく、更に主体内へ平行移動させ、主体内の構造式として措定せねばならぬのであつて、個内トボスとか
 かる二肢関連式のトボス内での定位とが窮極の二要件として要請されるのである。だが、こういった要件を純粹な形

では未だ論理化・客観化するまでに至っていないために、ここに見られるような伝統にあっての空白が生じてくるのであって、一つの関連というモメントが独り歩きし、これが“fuerza”の方に眼を向けさせ、そこでいわゆる正当性とか正義とかに関わることとなるのである。真の正義は個トポスの内的な構造化によって、人の生で所与的に作動している全体構図に限りなく近づくことに求められねばならぬのに、外での収束を果し構造式を収斂してしまう特殊化メカニズムにこれまでの歴史的所与としての正義はその価値を負うのである。そして、これが一つの関連づけという構造式構成の一モメントと分ち難く関わるだけに厄介なのである。

こうして、かかる仮現的所与たる正義と英雄とを、かかる地平にたつて結びつけたオルテガはモーゼの十戒授与に、こういったものの一断面を見つけ、かかる機序が叙上のモメントに凭れ掛り乍ら、古来より、引き続き教訓として働いている姿を明らかにするのである。モーゼは自分自身を自ら知らうとせぬ、既にソクラテス命題に背反して、⁽⁹³⁾外に眼を向け、荒野に法をと叫ぶヘブライ *Hebrius* ⁽⁹⁶⁾に掟を与えた強き人として“英雄”⁽⁹⁷⁾であった。

民衆は歴史が語るように、⁽⁹⁸⁾意思の病人であつて、自分自身の内を見、自らの力で、ここに自らの存在理由を求めず、自分自身を信じないものである。だから、生きる根拠として必要なクレドを、自分の生の中で探りあてることとはしないで、外部からマナの如く与えられるのを一向待つのである。⁽⁹⁹⁾真の英雄は自らを知る“力”を有する者であり、民衆の一人一人もそれぞれ個内をもつので、これに目を開きさえすれば英雄となる可能性をもっているのである。だが、このように他に頼って、自らが何者たるかを知らうとせぬ、⁽¹⁰⁰⁾自らの生に怠慢であることによっての生への義務懈怠を犯し、構造式構成という、かかる闘いを抛棄してしまっていることから、賈の英雄たるデマゴグを簇生輩出させ、これによってまた民衆の分派が生じてくるのであって、ここに今の政治現象の一つをなすデモクラシー⁽¹⁰¹⁾

の愚民化の因も存するのである。正義、英雄といった言葉には、だから深淺二つの意義があることになる。では、表層的なものをもっと深いものと化するにはどうすればよいのか、オルテガはこれを個トポス内構造式構成の関数とみるのである。そして、特にこの構成にあたつての問題の所在を構造式の現像化がこれまで不十分であり、いわばピンボケのままに放置されていたところにみつけるのである。こうして、かかる個トポス内構造式の現像定着化のために、差し当って構造式の二肢構成こそ肝要であると考え、分離手法による二肢の措定作業に着目するのである。だが、その例示として、この小論の終りに個実存の中の、知・情・意の全体的把握を強調し、このため、現状にあっては Miguel de Unamuno が指摘しているような生の感情、*pasión* に目を向け、これに悟性と *par* な位相を相關的に賦与し、従来行われてきた悟性だけへの収束、感情切り捨てよりの復権を悟性よりの分離を行なつて達成する必要がある⁽¹⁰³⁾との見解を付して論稿を擲筆するのである。

ところで、以上紹介したところを要約するならば、テーヌの客観批評、世評といった不偏性を名とした二類型の批評は、その底面に不偏といったバランス、また仮令抛棄されているとはいへ自己実存とその他者への推転に窺知される如く自・他又は主・客といった二肢共在構造性をふまえたものであることは確かである。だが、そのいずれにあつても主体存在は抛棄され、その退縮的収束によるナルシズムの一種に陥⁽¹⁰⁴⁾つてしまひ、かかる構図を遠視的に非人格の極のみに収斂し、構図歪曲を生ぜしめるに至っているのである。このため、生の褪色、主体内空洞化に随伴する、かかる自己放棄を介して、思考そのものを非生産的ならしめるのであり、その延長に Erich Fromm のいう西欧近世の危機的狀況が望見されることになるのである。

さて、その克服の道はかかる非人格的批評から全体構図の復権をはかるものでなければならぬ。つまり、これま

で、投げやりのままに放置されていた個内の構造化を是非とも課題として、明確にとりあげることであろう。それはまさしく人格的批評の確立なのであり、まさに、これまでアトムとされ、人知の立ち入りを頑く拒んできた極微の実在としての原子、更には原子核の中に物理学が構造を見出すに至った、所謂量子力学の手法を人間実存の分析に用いることに他ならぬとみるのであり、これこそ、この論稿の主意といってよいであらう。

三 一九〇四・一・六 Miguel de Unamuno 宛て carta の内容

今のところ、ホセ・オルテガ・イ・ガセーが交信した書翰集成は関係者の保護を考慮し全体的なものが公表されぬこともあって不十分な状況である。現に私が、この一連の研究を進めるにあたって典拠している生誕百年記念の全集にしても、書翰については黙して語らずである。このため、記録として入手できているところに基く限り、El Arqueologo Epistolario もふれていないので、この一九〇二・一二・一の小論に続く一九〇三年は空白期を成しているのである。⁽¹⁾

ところが、この沈黙は一九〇四・一・六ミゲル・デ・ウナムーノ宛て書翰で突如破られることになるのである。⁽²⁾ こういった意味で、この書簡はまた、この一年間がいかに過されたかを間接的に投影してくれている材料と考えられるものであり、一九〇二年以前に続く第二の空白期の意義を示唆しているといえよう。次にその大要を紹介することにした。⁽³⁾

オルテガは先ずミゲル・デ・ウナムーノから貰った書翰に対して当然出すべき返事を綴れる心境になかった旨を述

べ、心の整理がつかず、ために落着くのを待ったので、今日まで遅れたことについて寛恕を乞うているのである。⁽⁴⁾

というのは、一九〇二年までのプログラム構築を経て、小論 *De la crítica personal* で個内構造式定立を自らの課題とし、特に個内回路の開鑿とその論理定着化を二肢構成によって図ろうと企てたオルテガは、これまで多くの俊秀が果そうとして果せなかった個構造の必然的構成、とりわけ分離共在的に措定さるべき二肢をいかにつくり上げてゆくのかといった前人未踏の問題との格闘に文字通り投げ込まれることになったからである。つまり、オルテガはイマヌエル・カントのいう純粹理性の二律背反を実践理性に代る、もっと包括的な存在論的次元で解こうとしていたのであって、どうしてもカントを超えてゆく志向をもたざるを得なかったためといえよう。⁽⁶⁾

このように、構造式の定着、その現象化はまさしく、これに懸っているとオルテガは考えたが、それは異質であつて而も互いに関わり合いをもった二肢構成という、カントも背反として、それ以上の立ち入りを敢えてしなかった禁断の木の実を採取するに等しい作業を自らに課するものであった。そこにオルテガにとって一九〇三年以後の闘いがあり、一九〇四年一月においてもまだ猶お沸騰している文字のスープ、あるものが上になったり下になったりする *pele-mêle* の状況を脱することはできなかった理由が存するのである。⁽⁸⁾

それは自分の実存基底にある、まさに客観化さるべき自己の生作動の「原子」模型構成作業に他ならぬことを一九〇二年論稿を承けて、しっかりとふまえ、これを二肢変数共在構造式として意識化し、また意識次元で定着させるべき旨を自らに言い聞かせながら、この課題と取り組んでいることについての「詩と真実」の自己告白をなすものなのである。⁽⁹⁾

そして、現況としては、かかる構造式の内に定位さるべき作動肢としての二項をどう構成し得るかは全くの五里霧

中におかれており、逆説的にいうならば、自分をとらえて放さぬものはまだ定かではないといった消極的な確信のみしかないのである。何が、かかる共在二項として構成されるかについて、事が事だけに差し当って今のところ、若干のもの以外に客観的に化体された明白な言葉を見つけるまでには至っていない。⁽¹²⁾ 一面ではデータに基いた知的分析が必要であるが、また他面においては所与の作動に端的に迫って、論理化を更に進めるための素材提供の役割を果す直観にもよらざるを得ぬのであって、この二つをまさに両立共在させてゆかねばならぬのである。またそれだけに極めて困難な仕事であり、なかなか *Ilo ideal* から脱却できぬと語るのである。⁽¹⁴⁾

オルテガが自己の課題としたところはこれまで長い間多くの人々によって綴られてきた不十分な答えを探索し直すといった *ortopedisia* がたることを彼に求める“*コーシー*”的なものでもあった。⁽¹⁵⁾ それは未知の地への船出を意味していたものであった。未知であり限り、既知のデータのみに頼れぬが、さりとてこれまで得られたところを無視できぬというアプローチ方法での両立を含んだ作業だったのであり、それは出来上ったものへ安住を許さず、⁽¹⁷⁾ 絶えず気に入った出来栄えのものが生れるまで、たゞきわる陶工以上の態度を要請するものであった。聊かの偏りもなく、⁽¹⁸⁾ 所与への近似図式の構成に努めねばならぬ苛酷さを帶有した課題だったのであって、だからこそオルテガに未曾有の苦闘を強いることになったのである。

だが、ここでオルテガにとってカルネアードスの舟板にも比すべきものが現われた。それはツルゲーネフの“煙”の中の言葉であった。ヨーロッパ大陸の周縁に位置し、後進的である点でスペインと軌を一にするロシアに生を享けたツルゲーネフはここで少しでも知識を得ようとするならば始めから、いわばアルファベットを学ぶべきこと、つまり自分に何があるのかをルネ・デカルト的に問わねばならぬと語っていたのである。それはまさしく自己の内なるも

のへの着目と対応した発想であった。思想撰取に際して自国のもてるものをまさに構造的にとらえ直し、これによって自国の中に未加工のダイヤモンド原石を発見し、これが研磨のため、生産性をもった他国の思维類型を用い、そこで作動している自・他の構造性をつかみ出すことであり、その論理的図式化を果すための勧めを意味するものだったのである。

自己の中で作動している *lo instintivo, lo espontáneo* ⁽²⁰⁾ は現象的被規定的にはスラヴ、ゲルマン、ラテンといった *el alma colectiva* ⁽²¹⁾ の形をとり、いわば原石の並列状況を呈するが、原石のままでは不十分であるので、これに磨きをかけることこそ肝要であり、ここに後発国のものに共通な課題を抽出したのである。とりわけ重要なのは研磨であり、これこそが原石のよさを引き出し得るものであることはダイヤモンドがカット如何に懸っているのと同断である。

だから、様々の先入主をすて去って、先ず原石の発見を図るのが必要不可欠なのは言うまでもないが、それだけでは不十分であって発見といった偶有事のみに賭けるのは粗野な *barbarismo* に似て、ないよりは少しはましといった程度のものにすぎぬといえよう。まさに研磨こそが肝要なのである。この研磨はかかる「原石」への手続の一つとして、まさしく関係性をふまえることに他ならず、これを思想図式形成の次元に置き換えてみると他の思维図式而も己れよりも硬いものを研磨財として用いることであって、思想撰取手続を場的に自・他交渉の構造性においてとらえることを意味するのである。⁽²⁴⁾

自らのみを、かかる関係の場を切り捨てることによって主張するのは独りよがりであり、孤立し、非構造性に陥る虞があるのである。このため、自己の中なる原石の発見で、その未加工なままでの提示といった、既述した *barbarismo* ⁽²⁵⁾ *brutal* を生ぜしめるに至るのである。

こういった自・他の構造性の中への自らの原石の箴合と構造定着、そこにオルテガはこれまでの原石発見と扱ふところのない短絡的な構造収束に欠けたものを見つけるのである。ただ発見といったものに賭け、自己内必然ではなく、いわば自己内部を偶然的輸贏に委ねるマナ期待によって、創造を抛棄するところから自己疎外の結果が招来されとみるのである。

だから、主体復権への道は、自己の内で作動している *lo instintivo*, *lo espontáneo* を二肢共在構造式化し、平行移動によって論理的に個内次元で定着構築する以外には迂路はないと確信しているといえよう。そして、ここでオルテガはかかる構造式のスペイン土着伝統的な作動現象形態として、その *nisicismo* に眼を向け、ここからその消極・積極二つの意味を救出することになるのである。

さて、スペインが地中海的な海の牧民性に立脚したポセイダンの *vagabundo* として、例えば *novela picaresca*, *Don Juan* などにその断面を覗かせている通り、多分に *muerte* つまりは存在の *nada* の面に傾斜した性格をみせ、⁽²⁸⁾ 表見的にとらえる限りにおいて、⁽²⁹⁾ ゲルマン的な発想に比し、その底で共通に作動している構造性との昵みのなさが増幅されるに至っているのは注目に値することといわねばならぬであらう。

だから、ナポレオンといった独裁者もピレネーの彼方フランスではゲルマン伝統にあって作動する親構造性によって、ある程度自己の底にあるものに、もっと忠実であり、カーライルのいう「英雄」に近くなるのに対して、スペインでは、仮令意識以前のものとはいえ、かかる構造性を極めて消極的にしか作動させぬ収束収斂性を有つために、真の英雄とは可成り距りのある野心家が独裁者たる座を占めるといった差異が生ずるに至るのである。⁽³⁰⁾ つまり、スペインでは構造性の前にいわば二重の不透明膜が、⁽³¹⁾ 苦さながらに立ちふさがっているわけである。そこにスペイン土着

伝統の一つであった *misticismo* に関しての、従来までのとりあげ方に極めて非生産性なものが付きまっていた理由も存するのである。これがオルテガ自身、*Miguel de Unamuno* らによって提示されたスペイン古典的な *misticismo* に、何んともなく違和感を抱き、その偏った、囚われた見方に昵めぬものを覚えた根拠だったものなのである。だが、一九〇二・一二・一の論稿で、ピレネーの東にみられるヨーロッパ思考図式の底にあって作動し続けている個内二肢変数共在構造式をその不透明膜を剥すことによって、とり出し得たが、これを尺度に仕立てることに基きながら、スペイン伝統の一つである *misticismo* を蔽いかくしている皮膜を更に除去し、広くヨーロッパ全般のものと組み合わせ⁽³⁴⁾、その構造的な理解を果すと、その *nada* 性は却って大きな生産性を帯びるに至ると考えるのである。というのも、有に非有を措定することはそれ自体そこには共在二肢構成がみられるのであり、かかる式構築には、十分に示唆的なものが含まれていると見ることが出来るからである。

つまり *Nicht-Seiendes* が *Sein* の概念に対して消極的な意味合いしかもたなかったのも、元来否定を生きることがなく本質的にオントロギッシュであったゲルマン人の思考図式への対応によるところが大きいのである。⁽³⁵⁾ だが、否定の状況での生を生きざるを得ず、歴史的に放浪者であったスペイン人にとって *Nicht-Seiendes* は *Sein* の一変数にすぎぬとみられるからである。有と非有とは截然たる相容れることを許さぬ対極的二概念又は範疇ではなくて、有と純粹の非有との間にある中間領域が考えられ、これこそ、過渡的な段階で顕在化してくる、純粹の有でも、また純粹の非有でもなく有るといえばあり、ないといえば非有ともいえる両立共在的なものとみらるべきなのである。⁽³⁷⁾

Sein への拘着、そこに見られる構造肢収束はまたかかる中間地帯の軽視が齎したものであったといえよう。だが、こういった着想自体、これまでの伝統への挑戦と看做されるのであるから、こういった考えそのものをもっと深

く掘り下げ、十分な検討を加えねばなるまいと思うのである。いわば、その測深によって、客観的な論理化が達成されるまでは絶対に口外しないで緘口を守ることこそ必要であろう。⁽³⁸⁾ 下手に口を開けば、とんでもない謬見として、地動説が嘗って立たせられたと同じ羽目に陥って、異端糾問の場におかれ、ために多くの精力を不毛の論争と弁護に費やさねばならぬことになる。これは着想そのものの仕上げにあてられるべき時間を奪うことになりかねぬので、まさに自殺に等しい行為というべきであろう。ただ、Miguel de Unamuno は自分の親しい師友として、率直に腹の中を打ち明られる人であり、また私信であるので、今何をめぐって、自分が往きつ戻りつを繰り返しているのかを示し、かかる二股両立を可能にするものの具体的構成が目下のところ、自分の問題であることを明かすのである。⁽³⁹⁾

確かに、こういって出し惜しみをしているとか、論戦を避けて卑怯であるとかの批判をうけることになろう。勿体

振らないで、直に見解を示し、また論戦の中で鎬を削って所論の琢磨に努めるべきだとの尤もな意見もあろう。併し、正直いって事が事だけに、未熟でしかないものを、加工の未だ行き届かぬ未整理のままでの発表は疑問であり、また論理的な心象化である *ideas* に関するだけに、為さるべき事ではないように思われるのである。⁽⁴¹⁾ また、これまでの

の視座変革を明白に可能にする所説を恰もカットの十分でない原石のままに、これまでのものの見方に執着する人々に提示すること自体、見知らぬ闖入者に対して、ただ騒ぎたてる鷲鳥どものコーラスによって、かき消される白鳥の歌を唱うことに他ならぬであろう。この点で多分に悲観論的なのである。⁽⁴³⁾ というのも、これにかえて加えて、今のス

ペインで、こういった発想について同調者を見つけるのは極めて至難事と考えるからなのである。せいぜい、消極的な個、一人称への着目だけしかなく、未だ *nada* の酔いから、すっかり醒めきっていない現状で、⁽⁴⁴⁾ かかる個内構造式を自信のないままで語ること自体ガリレオ・ガリレイの受難に似たものを招くことになろう。だが、ガリレオ・ガリ

レイが事の創始者に付き纏う、かかる悲劇を味わされたのは多分に彼の教会に対する無警戒のなせるところでもあった。⁽⁴⁶⁾だから、前者の轍をオルテガは踏むまいと決意したのである。彼は自分の所説によって覆される人々の執拗な反撃を熟知し、計算していたといつてよいであろう。ガリレオ・ガリレイでさえ検邪聖省審問の犠牲となった。⁽⁴⁷⁾若い彼は尚更であり、しかも未だ兩立共在の二項として指定さるべきものが何であるかは臆気に霧の中で探り当て得たとはいつても、その接合に関する具体的な連環が皆目見当もつかぬ段階での公表はまさしく愚行の極といふべきものである。⁽⁴⁸⁾

今のところは、一日九時間から一〇時間かけての読書に専念し、一向手懸りを求めて、これまで書かれた答案を一念に検討して、洩れたものの検索と積極的に取り組まねばならぬのである。⁽⁵⁰⁾だから、未熟のまま公表し、自分から求めて鷺鳥の合唱に加わることは自分自身の多数への埋没による没個性化を意味するのであって、無益どころか、有害甚しきものとみるのである。

こうして、私信であるので、オルテガは極く内密に、今何と取り組んでいるかを打ち明け、*Miguel de Unamuno* ⁽⁵¹⁾の教示を乞うのである。

ところで、以上その梗概や内容についてふれることになった二つの著作は一九〇二年一月までと一九〇三年の二つの文献空白期がそれぞれオルテガの思想体系構成のプログラム作製において、いかなる意味をもつかを照射していると断じてよいであろう。つまり、一九〇二年一月一日の小論から逆推理して、オルテガは思考の生産性を個内構造式指定の関数と考え、この論理的定着を共在二肢構成の象面から行なうてゆくことを自己の課題とした事が導出されよう。そして、この文字表現による表白がこの小論でもあった。こうして、構造収束に終らせぬ、もっと一般的な

二肢構成と取り組み、一九〇三年の苦闘を経て、肯定特殊化的存在論志向をもつピレネーの東のヨーロッパ的思考と否定特殊化的存在論傾斜によるスペイン思考の存在論全般での結合構想を抱くことになったのだと一九〇四年一月六日の carta から推測されるのである。この結果、negación のもと、新しい意味の検討を第一の作業課題として掲げて、スペインにその端緒のある misticismo をとりあげ、一九〇四年三月、七月の述作を通じて、スペイン misticismo のヨーロッパ全体的な misticismo への組み込みについての可能性を探るに至るのである。⁽⁵³⁾

四 一九〇二・一二・一論文並びに一九〇四・一・六書簡のもつ意味の検討

一八八三年五月九日に生れたオルテガは⁽¹⁾やがて九八年の危機を経験することになった。

既述したように、海外にあった植民地を喪失した祖国に思いを致すオルテガにとつての大きな問題はスペイン帝国の栄光をとり戻すため西欧先進国の文化摂取に努めた結果が⁽²⁾どうして生産的ではなかったかであった。

ところで、文化摂取の問題は単に東洋と西洋といった明白に異った伝統にたつた領域間で行われるのみではなく、ヨーロッパと総称される地域にあつても、例えばデンマーク⁽³⁾またはスペインにみられるように後発国と先進国間に存したのである。

では、何が摂取にあつて自国の思想図式に生産性を賦与し、約束するのであろうか。九八年の危機にあつてオルテガの関心を惹いたものはこれであつたと考えられる。

こうして、彼はかかる摂取を軸にしての文化類型の比較に注目し、差し当ってかかる摂取後発国としてプロイセ

ン、デンマーク、自らの国スペインの三つをとりあげ、その思想図式の彼此対照を行ない、検討を加えたと推定されるのである。

イギリス、フランスに対して後発的であったプロイセン、その中でもとりわけ後進性の目立つ東プロイセンの地に生れ、一生の殆んどを此の地で過し乍ら、批判哲学を形成し、その後のドイツ哲学の目ざましい発展を促がす契機を与えたイマヌエル・カントにあっての先進国思想受容にみられる自主的な態度⁽⁴⁾、また同時代のローマン主義とヘーゲル主義に対抗して、それらに共通なアイディアリズムを突破することによって、これまた己れを持することとなったゼーレン・キェルケゴール⁽⁵⁾、或る意味で、このキェルケゴールの弟子としてこの「師」の姿勢を踏襲したといつてよいミゲル・デ・ウナムーノ⁽⁶⁾をとりあげながら、一体何が思考の生産性を保障する条件であったかを吟味することになったのである。この点で一八九八年ウナムーノとの交友は極めて重要な意味をもつものであったといえよう。

ところで、オルテガはまた例えばスペインにあっての Reconquista が一四九二年のグラナダ併合によって得た勝利を、カトリックに化体されたヨーロッパ思想図式の、イスラム、ユダヤといった他の思想類型に対する優位の結果に帰し、そこから、ヨーロッパ思考図式に他のものにまさったところが存するといった確信を引き出していたと推測し得るのである。そして、当然な事乍ら、ヨーロッパ思考図式に一体何が、かかる豊饒な生産性を与えるのかといった問いへの答えを模索するまでに立ち到っていたといえるのである。ここにオルテガは先ず目を向けることになったのである。

さて、ヨーロッパ思想にその枠組みを提供しているのは古典古代と称されるギリシャ・ローマであることには問題はないであろう。ここから彼の探索の旅もまた始まったと考えてよいであろう。

では、ギリシャ・ローマでの人々の行動規定条件であつた経済的生産力の実態はいかなるものであつたであろうか。

ここで、ギリシャ黎明期にあつて当時の生産状況と人々の相互関係について若干の知見を提供してくれているヘシオドスの叙事詩労働と日々の語るところから入ってゆくことにしよう。

彼ヘシオドスが生活を送ることになつたボエオティアのヘリオンの山に近いアスクラの地を彼自身呪われた村とよび、そこに多分にペシミズムの色合いを漂わせている。

ところで、この叙述からも窺われる通り、その風土のもつ生産力はオリエントに比すると、まことに微々たるものであつた。⁽¹³⁾だが、仮令些々たるものにせよ、彼をして羊飼う詩人⁽¹⁴⁾としての身すぎ世すぎを可能にはして呉れるものであり、また猫額大の狭いものではあり而も額に汗して耕作に勤しむ必要はあつてもともかくもクレーロスを与え、妻と牛、耕作助手たる未婚の奴婢を曲りなりにも雇い入れ、養う力をもつた労働主体⁽¹⁵⁾たらしめるには十分なものであつたのである。

そこには和辻哲郎博士がその著「風土」で指摘されている如く、乾燥・湿潤の弁証法的綜合たるウィーゼのもつ兩極包摂的な風土規定⁽¹⁶⁾の作動がみられるともいえよう。

だから、ヘシオドスのいう呪われし地の生活はかかる兩極包摂的な風土規定の所産だつたと考えてよいであらう。ヘシオドスが自然は或る時は継母、或る時は生母と謳う所以⁽¹⁶⁾のものは、ここにあつたわけなのである。自然は人にとって苦しい闘いを強いるものであり、ために詩人はいやでもペシミスティック⁽¹⁸⁾にならざるを得なかつた。とりわけ冬の厳しさ⁽¹⁹⁾はまさに継母の意地悪さそのものと映じたであらう。

自然はもとと人にとって本体的に他者なのであり、また異邦人として何らかの形で、自らの上に働きかけてくる人に対して毀傷の作用を及ぼすものといえよう。そこにまた西洋想念の底で能作し続けている原罪觀念形成のハイマートも存するのである。ヘシオドヌのいう継母なる表現はまさにここをついた、びったりしたもののなのである。

だが、全体的にとらえる限り、自然が及ぼすかかる毀傷性はひとりギリシャに特有なものではない。自然の前には何人たりとも特権をもつことは許されぬことである。例えば大河地方にしても、自然はこの地の住民に大きな生産力を与える代償として洪水という好ましからざる贈物をおくっているのである。こういった二重の意味でまさしくエジプトはナイルの賜といった言葉を理解せねばならぬであらう。

ところで、ここで留意すべきは、この自然の及ぼす人への毀傷性が常に生産力規定と関数的な関わり合いを有している点なのである。

自然は人への毀傷にかかる生産力規定と関数性をみせつつ、まさしく構造的に実現していると見得るのであって、かくの如き毀傷を含む、こういった関数的構造性こそ特に注目すべき事だと考えねばならぬであらう。

というのは、毀傷性がその見返りとして人に贈る生産力の大小、といっても人にとっての相対的な大小によって毀傷の癥痕化に差が出てくるからである。つまり、癥痕の深さはこういった生産力規定との関数関係によって規定されると考えられるのである。

大河地方において、上流から運ばれてくる沃土はその高い生産性をこれら地域の住民に提供してくれるわけである。このために、洪水による自然の人への毀傷は、このような代償としての老大な生産力賦与に支えられて、あっという間に代謝され、その結果治癒してしまい、その癥痕を深く留めることはない。だから、この癥痕を基軸にして人

に主体性を形成自覚させる毀傷癍痕もまた極めて薄い皮膚状のものでしかないことになるのであり痛みを感じぬ瘡蓋に化し易いものといつてよいのであろう。これが、かかる大河地方の自然観・世界観に主客合一的な特色を帯びさせ、例えばインドにみるように色即是空・空即是色といった考え方を支配的ならしめるのだといえよう。

ではヨーロッパ、否、その祖型ともいべきギリシャにあつてはどうだったであらうか。

ヘシオドスの叙事詩にペシミスティックな声調を与えた、呪われたものであつたギリシャの自然は毀傷に見合った生産力で報いぬものであつた。だから、呪われた、時に継母、時に生母と直面と仮面の如く常に変つた相貌を呈するものだったのである。このため、その自然はエスキモーに見られる水の風土、ホットtentトを圍繞するアフリカの風土がいずれも昨日もかくあり、今日はまたといった継続連続的な常数であるとは異なつていたといえるのである。こういった、明日もかくあるとは思われぬ変貌する特殊な風土条件はそこに生活する人々にとつて恣意的な、明日あるを期し難い呪われしものと映ずる他なかつたのであつて、ヘシオドスの言に徴しても明らかなのである。⁽²¹⁾

ここに、ギリシャ的な自然とその生産力的な規定とが、その毀傷付与とその癍痕化といった一連の機序を媒介にして、此地に特殊な帰趨をもたらすに至る基因の一つが存するといつてよいのである。つまり、ここギリシャでは癍痕化、その治癒また新たな癍痕の発生といったものが連続して行われ、ためにその癍痕は痛まぬ厚い瘡蓋ではなく、痛む潰瘍といつて状況を呈するわけである。

エスキモーにあつて、風土の示す連続性は毀傷による癍痕も瘡蓋更には膀胱化へと進み何ら痛みを、毀傷を受けた人に感ぜしめぬものとなるが、与えられる毀傷もその代償とのアンバランスによつて、より深く、また変化極らないギリシャの自然とその人への生産力的な規定は毀傷癍痕にエスキモーにみられるような瘡蓋より、その膀胱化への歩

みを許さぬものであったと言わねばなるまい。それはオルテガがよく挙示している痛みを伴なう臼歯と同じであり、瘢痕は辛うじて瘡蓋とはなってもまた毀傷をうけ、相変らずその下には痛みを感じさせる潰瘍を残すものであったわけである。このために、とても胼胝化し、傷を受けたものにもはや痛みを与えぬものとはならぬのである。ここにエスキモーとギリシャの自然がそれぞれ人に及ぼす機序の差が胚胎する。というのは、かかる痛みによって、主体構成の基軸を形成する毀傷瘢痕が意識されてくるからである。それは、こういった痛みを伴なうことによって、痛みを感じるものは何かといった問いをあらためて提起させるものとなるからである。こうして、かかる毀傷瘢痕は痛みを感じさせることによって、そこに最小の関係を定立せしめ、自らの痛みを意識する、他者なる自然とは別ものである己れをいやでも自然から分立措定せしめるに至るのであって、和辻博士のいう己れ自身の活動の場たる客体に対する主体枠を、こういった一連の機序が定立定着することになるのである。

ギリシャ的自然によって人に及ぼされてくる、こういった毀傷、その瘢痕形成とその瘡蓋化といった一連の機序、そこに見るものと見られるものの並置共在構造式が仮令部分的特殊化された現象形態にせよ顕在化され、またその定位の場たる主体枠そのものも措定されるに至った所以が存するといつてよいのである。

ところで、これまで縷述してきたように自然の生産力規定は全般的に見るならば、いかなる環境にあっても同じように作動していると考えられるものである。従って、自然が人間に毀傷を与え、その限りにおいて瘢痕をとどめ瘡蓋を残すのは同断と言わねばならぬ。だが、この自然が人に及ぼす毀傷とその瘢痕化に見られる一連の機序は自然の生産力規定との関数であり、この特殊な投与変数値によって、かかる瘢痕が胼胝化したり、瘡蓋のまま潰瘍を残すこともあるのであって、またこれが、客体よりの主体分出措定度を決定することになるのである。

中井久夫氏が、まこと正鵠を得て指摘しておられる如く、採集と農耕といった経済活動態様によって、主体分立度に大きな差のでてくるのもこのためだったと考え得るのである。

では、同じく農業に立脚しながらもオリエントとギリシャとで、かかる主体分立度にどうして差異が生ずるのであるのか。この点について検討を加えてみよう。

さて、既に述べたように、所与で作動している構造式の直接的な論理化は永久に達成できぬに等しい極限值である。だが、これはこの図式を被規定項で“ある”として具体的に充足してゆくプロセスで言い得ることであって、かかる充実の可能性にたつての構造式のモデルを論理的に構成し、これによって被規定項充足完了を予想した理想状態式に限りなく接近できる“図式模型”の定立は可能なのである。併し、今までのところ、かかる論理模型の構成は、その構成手続の誤りによって未完のままに放置されているのである。だから、かかる自然の生産力規定による人への被規定性を可及的に小ならしめる一連の手続をプログラムの始め得る所与作動構造の論理的翻訳ともいふべき、叙上のような図式模型の意識化されたモデル構成がまだ確定されていない現状にあってはまたこの図式構造への試論的な近似的表出がなされ、これによって、二肢共在関連式の様々なスペクトラムが生まれることとなるのである。それにかかる図式論理模型の直接構成には程遠い、その間接的投影に他ならぬものである。換言すれば本来主体という個トポス内に構成指定さるべき構図構成が十分に達成されぬために、自然の毀傷、瘢痕化これらによる主体枠、更にかくして指定されるに至る客・主関係の主体枠内への平行移動による既に指摘した図式模型構成といった一連の論理化機序が、差し当っての終着点ともいふべき図式模型をその構成手続不備のために図式化し得なかったために未完のままに置かれ、未完のため突破できなかった皮膜とぶつかって反転を余儀なくされた結果、かかる反転ヴェクトル

の上に定位されることになったものである。

こうして、個内構造式はかかる胎生過程の中断によって、二つに一つのアポリアに振り回されて、周縁化空洞化し主体枠そのものに帰一してしまうのである。かくて主体枠は他者との主・客関係といった粗笨な主体外の場に移され、共同体内の個へレディウム⁽²³⁾として作動するに至るのであって、こういった転化過程により、これまで述べてきた生産力規定はこの個へレディウムにおける個枠の残影その曳影性にかかわるものとなり、更にも一つのバイパス的な機序を働かせることになるのである。

というのは、大河地方例えばチグリス・ユーフラテスの両河地方をみるとその沃土による高い生産性は一面において毀傷癥痕の肝胎化を促がし、主体分立度を小ならしめるのである。これは共同体内での個へレディウムの並立共在態様にも影響を与えて、その並立性を媒介とした構造的な作動力を弱くするのである。このために例えばハムラビ法典⁽²⁴⁾に見られる通り共同体成員の中で特定者たる王、更にはその上に君臨するマルドウーク神に生存継続のための闘いを展開するに際しての土地の果実収受を独占的に許すに至るのである。

つまり、内なる構造を空洞化せしめられて単なる枠と化した主体はまたここで共同体間の相対的な配置関係によって代替されて意識化表現化されるにあたってオリエントでは特定者のへレディウムがその配置を軸として他のへレディウムを吸収し、へレディウム並立状況にあつて垣間見られた関係構造的な収束してしまうのである。⁽²⁵⁾だから、それだけに個の枠は意識の闕には上らず、癥痕の無痛化と相俟って、かかる個としての枠組を有するのは独り国王のみといった現われ方、意識のされ方をするのである。ここにオリエント的な国王専制に対応するこのスペクトラムの特色を見るのである。

だが、これに反してギリシャ的な生産力規定は特定者へレディウムの他のものに対する卓越を許さなかった。この共同体内の配置にあつての並立性許容が、これを軸にして他者との構造性、他者に対しての個の内なる場をとどめ、いけば反転を行なつた原点に近いところにスペクトラムを位置させたといつてよいだろう。

ところで、太田秀通氏が指摘されているようにギリシャ世界に先立つ東地中海のミケーネ文化圏において共同体成員に対する共同体的規制が弱く国王による全国土領有の実体も、また観念もなく官僚制的貢納を特質としたオリエント専制国家的な上半身と共同体的土地所有形態という古典古代に通ずる下半身をもつたスフィンクスに擬せられる姿に既にその萌芽があつた。これに続くギリシャ世界はその風土が具えていた生産力規定によって土地保有者に経済・軍事両面においての相互依存性を強めさせ、彼らをいやでも共在的実存に立脚させてゆくのである。

こうして、血縁的社会から地縁的なものに移行するに際しても、オリエントと同様水平的並列象面を垂直軸による上下支配の特殊な断尾面と観念はしながらも、水平面が既に点化した形で垂直面に収束されているオリエントとは異なつてもはや垂直面にそっくりとは吸収されず、ほぼ同等のクレーロスがヘレディウムの内実を形づくり少くとも共在せざる得ぬようになつたために、オリエントでは未だ意識の水面に浮上してはこなかった新しい問題を課するに至るのである。水平並立をいかにして垂直支配と結びつけるかがそれであつて、もはや自生的自然的な処理だけでは取り扱えぬ、テクネを案出せざるを得ぬものと直面せざるを得なかつたのである。かかる技術のギリシャ的な表現の一つがアテナイにまつわるテセウス伝説であると考えられよう。

ところで、古代の人々の経済単位は家であり、彼らの営むものは家の経済であつた。いくら流通経済が発達しても彼ら古代人の関心の中心はあくまでも家政論すなわちオイコノミアが象徴している通り家にあつた。これは仮令大き

な所領をもった貴族にしてもまた同断であり、畢竟するところ拡大されたオイコスに他ならず、経済の単位はどこまでも家にあり経済の運営もまたオイコノミアでしかなかったのである。⁽²⁷⁾このため水平的並存の形にあって、大体において似通った中・小クレーロスが並置され、経済的な再生産過程を通じてこれらに関連づけてゆくことになる紐帯は自生的には欠落するのである。つまり、経済的な交換を必然化することになる経済的強制機序による関連づけはみられぬといつてよいわけである。かくて、是が非でもこういつた並置におかれている主体を技術的に関連づけねばならなくなるのであって、これこそオリエントにはない、ギリシャ・ローマに特有な課題なのである。こうして、共同体内での個的ヘレディウムをクレーロスとして占取して者たちが水平面での並置的共在を不可避なものとして認めざるを得ぬことによってまさに土地占取保持を人口増大と平行しながら確保してゆく必要に迫られて、どうしても平等の原則にたつた誓約団としての市民共同体を結成せざるを得なくなるのである。⁽²⁸⁾

田舎に土地をもち、生産的な労働は原則として奴隷に委ねたこれらのクレーロス所有者は市民共同体成員たる市民としてクレーロスの保有者に転じ、戦士を兼ね平常は武技を練り、己れの共同体防衛に任ずるのであって、かかる戦士的市民共同体がとりもなおさずギリシャのポリス、ローマのキヴィタスであったのだといえよう。経済的強制にやつた市場を媒介とした並置関連づけをみせるヨーロッパ近代のスキス模型には未だ至らない、まさしくホモ・ポリティクスたる古典古代人は経済的孤立人として自己の家政にのみ関心を向け、ただかかる共同防衛の必然性により、これを公約数化する必然^々を技術的に創出したのである。これがこういつた武装市民の共同体であつたわけである。だから、その水平面での関連は共同防衛に訴えざるを得なかつたことと関わるのであり、またその限りのものであつた。このため重装歩兵市民を必要としなくなるとこれに代る傭兵制の導入によってポリスは解体の運命を辿る

ことになったのである。だが、とにかく、共同防衛という目的に基づいた集落内への居住は差し当り、ここで水平関連をつくり出す紐帯の役割を果すのである。そしてこの紐帯の具体的な表出が、紐帯そのものの限定的必然性に対応してテセウスやリュクルゴスといった伝説的な人物に化体して行われざるを得なかったのだといえよう。いわば、テセウスとかリュクルゴスは近代での市場という語にあたるもののギリシャ的表現であったのである。

ところで、太田秀通氏はテセウス伝説の原型をミケーネ時代まで溯らせ、その末期にいたとされるテセウスという名のアテネ王に帰している。そして、これにホメロスの頃から民主政期アテネに至るまでの約四百年間に、また様々の伝説が付加されて至った合成物がテセウス伝説に他ならぬものであると説かれている。つまり、ミケーネ社会からポリス時代まで連続して存在したギリシャ世界唯一の国家であったアテネがドーリア人の攻撃、異種族の流入といった激動の嵐を経た歴史展開をふまえては、この伝説の合理的な解釈はできぬと言われているわけなのである。⁽³²⁾

ところで、こういった歴史の歩みに従うならば、先ずスフィンクスに模し得るピュロス王国に類似したものがアテネ周辺のアッティカ一帯に形成され、少なくともミケーネ時代末期までその基本構造は不変であったことが確認されよう。⁽³⁴⁾

太田氏はここで仮説的な要素を含むと但書で断りながらも既にこの王国は非オリエンツ的な生産力規定の下にあり、その基盤を形造っている直接生産者の共同体は古典古代的な範疇にまでふみ込んでいるとはいってもクレーロス所有の一般化によるポリスというその後の発展段階には未だ入るには至っていない、いわば、より古い中間期的ミケーネ共同体に立脚したミケーネ期のアテネ王国であったとされるのである。⁽³⁶⁾このダーモスを直接生産者とした村落共同体に立脚していたミケーネ時代のアテネ王国は前二千年紀後半になるとホメロスの叙事詩によって代表される時代

を迎え、⁽³⁷⁾これまでの線文字B文書の示す社会構造とは異なってくるのである。⁽³⁸⁾つまり、これがいわゆる暗黒時代の始まりなのである。それはまたヒッタイト帝国の崩壊によってその鉄器独占が失われて鉄器の西漸などの影響が見られた時代でもあった。⁽³⁹⁾かかる青銅器から鉄器へとといった技術変革はギリシャ地域にこれまで言及を重ねてきたように地中海沿岸地域の呪われた生産力規定の枠内にとどまったものとはいえず、農業生産力の発展をもたらした⁽⁴⁰⁾、これによるクレーロス所有の一般化、これに伴う部族的結合作を媒介とした新しいクレーロス所有者を単位とした村落共同体の形成を促進するに至った。⁽⁴¹⁾これはホメロス叙事詩が語るように、ドミナントな形態としてのクレーロス所有前面化と平行したものであったのである。即ち、範疇的にみるならば、かかる共同体は仮令公有地と私有地の比率がミケーネ最盛期のアテネ王国について言及するところがあつたピュロス文書の示すところといまだに同程度、⁽⁴²⁾同質のものといえ、既に国王の共同体成員に対する支配を許す楨杆ともいうべき公有地が相対的に縮小してゆく道を辿り、更に一歩進んで痕跡化したともいえる貢納制の存立に視えるようにクレーロス所有を前景におし出したものだったのである。だから、ホメロスがその軍船表で示すように王はもはや常時全軍を指揮する超越者、絶対者ではなく同等者中の第一人者たる性格を帯び次第に共同体内の支配者層である貴族の中に埋没してゆく階程にあつたことと対応しているといえよう。

こうして小共同体の長を指導者とした群小の部族的結合が、いわば箱の外れたままの形で残り、これが暗黒時代における移動と定住、これに伴う新しい生産条件獲得過程の中で私的所有の原則を、より発展させてゆくとともに、その共同体内部で成員の共同体的な自生規律よりの独立性が高められ、水平的並立・共存性を強めた新しい形の共同体作出を促がすに至るのである。⁽⁴⁴⁾つまり従来のダーモス共同体はかかるクレーロス所有をドミナントな土地所有形態

と化することによって公有地分与から完全に脱却し、私有地のみによる自立的農民経営を一般化するに至ったコーメ
ー共同体に⁽⁴⁵⁾変質することになるのである。

これこそ、王を貴族といった、共同体のものと並立的支配層の中に埋没させ、オリエントのものに比して遙かに無力且つ名目的たらしめるに至った基因をなすものである。これまでに見られた王の、王による垂直的な整序に代
って、これとは異なつて、水平的な並立を再生産しつつ且つ整序を果すといった、もはや自生をこえた新しい、ま
さに技術的な処理を要する課題を彼ら支配層は解かざるを得なくなつてくるのである。そして、この整序の紐帯はア
テネポリスにあつては聚住と三身分の設定を柱とした、テセウスの名による改革⁽⁴⁶⁾によって作出されるに至るのであ
る。関連づけとしてそれ自体作動しつつ、基底的には見るものと見られるものとの構造化を達成すべき技術的なも
のであるがゆえにホモ・エコノミクスではない古典古代人と照応してテセウスに仮託されながらも「伝説」である
ことを必要としたのであると言えるであらう。自生的なものに代る技術つまり自生の技術的翻訳を要することによ
て人格的であると同時に伝説として非人格化されたペガサスに擬せらるべきものでなければならなかったのである。
ところで、これまで縷述してきたところはいかなる意味をもつのであらうか。

先ず、ギリシャでの生産力規定は毀傷による瘡蓋を痛みを伴うもの、いわば体に刺さつた荆棘のとげにも比すべ
きものとせざるを得なかつた。⁽⁴⁷⁾これが折れ軸として、これを基体として主体とその内なるものを形成させた。そして
これによって、歴史的自然的所与として作動している構造式はこの主体内で二肢共在と関連づけによる論理式として
構成されねばならなくなるのである。⁽⁴⁸⁾だが、既に示唆したようにこのためには関連づけに当ってn次元空間に対応す
る発想が必要であつたので、これが構成は未完のままに放置され、ここから自と他・主体と客体といった論理的にみ

るとより高次の次元への移行がバイパスとして内なるものよりの反転ヴェクトルの上で行われることになるのであって、ギリシヤではその生産力規定によってアウトルケイアをめざすオイコス⁽⁴⁹⁾を単位としその水平面でのヘレディウム並立の状況「スペクトラム」を呈するのである。

それは個の外と内の並置を通じて、個の内なるトポスで構成されるべき構造式の残影を反映しているものであり、自と他の異邦人性を措定するものであった。個は内をもつことによって本来他との並置にはないものと観念されたのである。だからこそテセウス伝説による技術的紐帯の構成が真の構造式の代替物として必要となったと考えられよう。

それはかかる並置の中に投げ込まれた個と個の内なるものを接合する、もっと根源的な共通項の作出、まさに個の内⁽⁵⁰⁾に定位さるべき構造式を論理的に構成する手続によって始めて個と個とが関連づけられるに至るといった基底において論理化を求めているものに応えるものであり、技術とはこの構造式の論理化に直結するものたるべきであり、その萌芽的な端緒がこのテセウス伝説だったといえるのである。表見的にアンナチュラルであり、非必然と映ずるものを技術によってナチュラルなもの、必然的なものにできるだけ近接させ得るのであり、だからこそ習慣は第二の天性といえるのである。こういった、ギリシヤ的条件、ギリシヤ的限定にあつてのかかるテクネの使用、そこにテセウス伝説が「テセウス」と「伝説」の組み合わせである意味が有するといえよう。

ギリシヤ実存はこういったテクネによる関連づけを必然たらしめた並立性の場におかれたものであった。これは「自」に対しての「他」の定立によってそこに二肢的な構造性を、また「他」に対しての「自」定位によって個内トポスをそれぞれ措定させ、個内トポスでの構造性といった隠された真の構造式構成への回路を残すものとなった。だから、ヨーロッパの思考図式はこういった真の個内トポス構造式に他の類型にまして近似した実現形に他ならぬもの

であり、まさしくこういった構成が所与模型の比較的忠実な模写なるがゆえに“現実”的であり、であるからこそ生産性を帯有するのである。

既に述べたように、自然所与として個内で能作し続けている構造式の論理化は今のところ未だに達成されるには至っていないが、こういった形態をとることによって、ギリシャ的思考図式はヨーロッパの祖型として、かかる未完状況にあって、理想状態構成式に最も近いスペクトラムだと言い得るのである。

ところで、こういった理想状態式は自然所与として能作しているものに極めて近接した論理化であるから、その点でまさにそのレアルな論理表出であるわけである。従って、この理想状態式にスペクトラム的にみて、また極めて近いというのは思惟が二肢共在構造性をより明白に実現していることとなるので、思惟類型がこういった共在性を実現していればいる程現実性を帯有するわけであり、理想状態構造式の論理措定がいまだに全面的に理想状態として未定のままにおかれている現下の状況にあって、二肢性によって、これに最も近い構造性を曲りなりにも具現しているギリシャ図式の伝統にたつて、より仕上げられたヨーロッパ思考図式が他に優つて生産性を示す根拠もここにみられるのである。思考図式の生産性はこういった理想状態式に可及的に近接したその現実性を媒介にして未完乍ら思惟の中に顕在化された構造性との関数なのである。かかる命題こそオルテガのヨーロッパ主義⁽⁵¹⁾の支柱であり、こういった二項変数共在の構造の具現においてヨーロッパ思考図式は他の思惟類型を制するのであり、構造性をよりレアルに形成することによってヨーロッパの未完状態を超克する素材もまた極限値にもっとも近いものとしてのヨーロッパにしか求められぬとみるのである。

彼はギリシャ的思惟図式に端を発した、かかるヨーロッパ的構造性の勝利をスペイン・レコンキスタの中で反芻す

るとともに、カント、キェルケゴール、ミゲル・デ・ウナムーノ三者の比較検討を通じてピレネーの東と西における構造的構成の差異を抽出するのである。つまり、前二者にあつては“有”を基軸にして個の内なるものの積極的な意識化と有・非有による二肢がより顕在化し、これによって個内トボス二肢構造の構成をより容易にプログラム化することが可能となり、それゆえ思惟に豊かな生産性を帯有させ得たのに反して、スペインでは、レコンキスタに象徴される放浪性は一義的には現実の“今”の否定であり、非有に立脚させることになり、こういったスペイン伝統が個の内なるものとその中に定位さるべき二肢を非有と有といった範疇構成によって極めて望見し難いものとなし、この二肢構成の消極化がまた思惟を非生産的なものたらしめたのだとみることになるのである。換言するとピレネーの東ではかかる二肢構造式への接近が有・非有によって可能であつたのに対してスペインでは先ず非有から出発して非有・有・非有といった二肢構造式の前に立ち塞がる二重の皮膜による二重屈折のため、かかる二肢構造式の展望が、より曖昧模糊たらざるを得ず、こういった現実をクロロホルムに酔つた眼で追わざるを得なかつたのだとみるのである。

かくて、オルテガはヨーロッパ思惟図式のもつ生産性の秘密をかかるギリシャ思惟伝統の延長線にある、個内構造的性指定に探り当てると同時にスペインに九八年の危機を齎らすに至つたヨーロッパ思想摂取に際しての非生産性また、この個内構造式の未定着によって惹起される、一種の皮膜からの反転機序が、それぞれの地の土着伝統を残存せしめつつ、これとの結合によって伝統の中に既に有している構造構能力にたよつて様々のスペクトラムを形成するに至るといふ一種のタウトロギーを生ぜしめるのであるが、その時能作するスペイン土着伝統が既に見たように思惟構造をばんやりとした姿でしか透視し得ぬ弱いものであつたためと考えるのである。

ところで、こういったスペインの外国特にピレネーの東よりの思想摂取を非生産的ならしめ、その限りで遂に亀は

どこまでも亀だとの嘆を抱かした、この鳥綱にも似た呪縛よりの脱却と解放は一体可能なのだろうか。また可能とすればどうすればよいのであろうか、これがここでオルテガが自問したところであった。オルテガは既にかかる土着伝統との非論理的な癒着を生ぜしめた一連の機序をこれまでの外来思想の摂受と関連せしめると同時に、またこういった結果がまさに皮膜よりの反転に生ずることも明白にとらえていた。だから、呪縛よりの脱却は個内構造式の論理的定着をこの皮膜を破ることによって、現在の未完状況から救出し、非論理化のままに放置されている課題と果敢に取り組むことによって始めて可能であり、またこれより他にはないとみるのである。

例えば、イマヌエル・カントの構想力にみるように、「構想」によって明らかに構造型構成が意図されているが、結局のところ「力」とみることで、構造型は図式化されず、収束されてしまっているのであり、こゝにこそかかる構造型化の未完が見事に告白されているといえよう。これが、こういった呪縛解放の出發をなすものである。

このカントも果せなかったこと、つまりは構造型への志向が反転するに至った皮膜の原点に立ち返って、反転せしめられたヴェクトルをまた反転し、皮膜を破り、個内構造式の模型を構成する作業と取り組むしか択ばるべき道はないのである。個内構造式の原子模型形成に似た構築がこれである⁽⁵⁴⁾。言い換えるならば、ヨーロッパ全般における個内構造式構成の未完状況に果敢に挑戦することによってこの壁を打ち壊し、構造型をもっと明確に掴むことによって増幅された思考の生産性を自分のものにするからこそ、まさしく後発国に与えられた課題であるとみることになるのである。

こういった意味で、今のヨーロッパを超えること、そこに亀が兎に変身し得る道が開かれるのであり、またこういった構造型を仮令未完にせよ理想状態式に極めて近い形で示しているのがヨーロッパ特にピレネーの東のものである

以上超えらるべきはまさしくこのヨーロッパ、特にカントのそれであると考えるのである。

オルテガがヨーロッパ主義を標榜し、*Revista Occidente* 誌を創刊して⁽⁵⁵⁾、これに拠った活動を続けた所以もまたここにあるのであって、逆説的にいうならばヨーロッパの物真似をしているに過ぎないスペインが西欧思想のもつ十分さを超克するためにヨーロッパに目を向け、ヨーロッパを通して、ヨーロッパの上を目指したといつてよいものである。

だから、後発国の思想課題をまさに正鵠を得た形でとらえ、個内構造式の模型化による定着と真摯に取り組んだ彼のよき先蹤たるカントの仕上げをかかる意味合いで意図したのであり、その底では「新」カント派的志向を有していたと見得るのである。このため、留学先をドイツに択んだのもあった。

こうして、個内構造式模型を従来までの構造的に従い、これを追いつけずとも「力」として収束してしまったカントにとつての躓きの石をいかに取り除いて、立ち入りを拒んでいた皮膜内に入り込み、構造式をいかにして構成し定着させるかが彼オルテガにとつての課題をなすのであり、ここで大きく作用することになり、示唆を与えたのが、一九世紀九〇年代における物理学、とりわけ量子力学の展開であり、中でもその初期段階としての原子模型の提示であったといつてよいのである。

周知のように、太陽系の太陽にあたる原子核、太陽の周囲をまわる惑星並みの電子といった原子の太陽系になぞらえた原子模型を明確に決定したのは Rutherford⁽⁵⁶⁾ であり、一九一一年のことであった⁽⁵⁷⁾。併し、その前駆的なものとしての原子模型形成への試みは一九一〇年代に既に始まっていたのである⁽⁵⁸⁾。

イギリスの T. Melvill によつて一八世紀の半ばに瓦斯から出るスペクトル線が発見され、この線スペクトル、特

定の輝線スペクトルがこれまた特定の元素の存在に対応するとした Bunsen-Kirchhoff の現象論的法則⁽⁶⁰⁾、一八八四年 Balmer によるスペクトル線分布の法則性⁽⁶¹⁾などの発見は元素の存在を意味する点で原子模型形成への道を拓く⁽⁶²⁾になった。

一八九七年 J. J. Thompson は Hertz が一八八三年に行ない、陰極線は電氣的粒子によるものではなくエーテル現象であるとの結論を承けて陰極線を静電場でまげる Hertz と同一の実験を実施して陰極線が負電気を帯びた物質粒子の通った道を示す⁽⁶³⁾のだといった知見を得ることになった。彼はこの帯電粒子説の若干の帰結を験すため追実験を重ね、その結果陰極の附近の非常に強い電場の中で瓦斯の分子が解離し、便宜上 corpuscles とよぶ普通の化学の原子ではない基本的な原子に分裂すること、そしてこの corpuscles が荷電をもち陰極から電場に投げ出されたものが陰極線であるとの説明を加えるに至るのである。⁽⁶⁴⁾これは明らかに化学的原子が多数の基本的原子の集合より成るものとみる立場⁽⁶⁵⁾に拠るものであって、その限りで原子構造論の提示に他ならなかったのである。これを武谷三男氏はその著で無核原子模型⁽⁶⁷⁾とよんでいるのである。

一九世紀ヨーロッパの九〇年代はかくて、これまで分割不可能と考えられて、人智の立ち入りを頑くなに拒み続けて来た原子の内にかかる構造化を見出すに至った物理学を登場させたのであった。

これはまた社会科学と称される分野に多くの示唆を与えるものであった。社会を個存在として、それ以上リミット・オフな原子として、これをいわば極点化して成立するものとみる社会原子説に批判の矢を向けることを許す⁽⁶⁸⁾ものであったからである。この原子自体がその中に構造をもったものとみななければならなくなったと言えよう。

かくて、原子構造模型の形成と所与として個の内で作動している構造模型の構成とその定着化とはその志向におい

て、かかる量子力学の歩み並びにその方法とパラレルなものであることが確認され、だからこそ同じ科学たることが主張され得ると考えられるに至ったのである。

だが、自然所与の論理化という点においては自然科学も社会科学も同じ科学としてその間何ら径庭の存せぬのは確かである。併し、原子の中の構造と個の中で作動しているものを論理化するに当って前者はあくまでも見られるものとして終始するのに対して、後者は見られるものである前に先ず見ているものなのであって、まさしく René Descartes⁽⁶⁹⁾ のいう個にとっての *essere* である “*sum*” の前に、個にとっての *cogitare* を行なう、見る “*cogito*” が先行するのであって、このところの分析整理はどうしても避けては通れぬものとならざるを得なくなるのである。特にドイツ新カント派にあっては自然科学と文化科学の問題がとりあげられていただけに尚更のことだと言わねばなるまい。

オルテガは個構造式模型構成という、まさに己れにとっての唯一の出路と観念するに至った、かかる課題解決の作業に入るに当って、それがまた原子模型形成手法の応用でもあるだけに、自分なりに納得のゆく、また一応は他よりの批判にも耐え得る答えをつくっておく必要を感じていたといえよう。

ところで、こういった自然科学と人間科学をめぐる論議は見方によっては人間科学に自然科学の成果利用を阻む蹟きの石ともなるものであって、論議の現況では今のところ明確な結論が出されるには至っていないものである。⁽⁷⁰⁾ だから、あくまでもかかる未完状況においての仮説的なものでしかないことに差し当り注意する必要があるであろう。

では、オルテガはこの点に関していかなる見解をもつことになったと推測されるであろうか。そこで先ずそれまでの科学論の地平に目を注ぐこととしよう。

科学認識の領域においても一九世紀の終りは既にアトム的な機械論に対しての批判を生ぜしめていた。

一九世紀の五〇年代以降ドイツでは自然科学が非常に発達し、その成果も大きかったことによって自然科学的方法を学問指向のモデルとする考え方を生み、人間の社会や歴史もこれによって説明しようとする思潮が各方面で起るに至った。⁽⁷¹⁾これは自然科学の哲学に対する乗っとりとも称すべきものであり、⁽⁷²⁾Max Weber が自然主義と目するもの⁽⁷³⁾がこれであった。

これに対して見られる自然と見る人間を対象とせねばならぬところに当然考えられてくる差異を抛りどころとして、科学たらんとする点で自然科学の權威を認め、方法的にはこれと交錯重合しながらも独自の領域をもつ哲学の復権の必要が感ぜられ始めてきたのである。⁽⁷⁴⁾

既にヘルムホルツの感覚に関する認識論的考察は一八五〇年代より、またアルベルト・ランゲがその唯物論の歴史で唯物論の功績とまたその限界について、自然科学の權威を認めつつ、その限界に関して闡明な所論展開を行なったカントに抛りつつ明らかにしたのは、一八六五年のことであった。⁽⁷⁵⁾こうして、ヘルムホルツの着想を延長して自然科学者の立場からその限界をとりあげ唯物論論争を惹き起すに至ったのがデユ・ボワ・レイモンであった。⁽⁷⁶⁾そこには唯物論乃至は自然科学的な方法が立ち入れぬ精神の領域確立への希求が存していたと言えよう。また精神の自然的収束に対する抵抗が籠められていたとも解することができるのであって、いわば自然科学は驕る勿れといった鋒火でもあったと考えられるものである。

これは、ランゲにもみられる通り、当然の事乍ら、その抛りどころを与えたカントに帰れを意味するものであり、そういった思想上の運動として、いわゆる新カント派による科学論展開の端緒をなすものとなるのである。

ここでは、オルテガがこういった問題と取り組んだと推測される時機を勘案し、西南ドイツ学派に属するハインリ

ッヒ・リッケルトの科学論をとりあげることにしたい。⁽⁷⁷⁾

リッケルトはカントの純粹理性批判にみられる重心が先驗的感性論と分析論にあるのではなくて、却って弁証論に存する⁽⁷⁸⁾と考え、世界を一者と他者、合理的なものと非合理的なものの綜合とみる他立の原理の支配下においた世界觀の体系樹立をはかったところにカントの眞骨頂があるとの見方から出發するのである。⁽⁷⁹⁾

こういったカント解釈に基いて導出することになった論理の發端における一者と他者の同時定立⁽⁸⁰⁾がリッケルト体系を貫く基本觀念をなすのである。それは或る意味での構造的發想であつたともいい得るであらう。⁽⁸¹⁾

リッケルトは、この前提にたつて、彼の体系を構築していったのである。

凡そ我々の思惟する處のものは必ず何ものか、つまり *Etwas* でなければならぬが論理的に規定される限り、同時定立を根拠にしてゆくと自己同一なものとして思惟せられなければならない。*Etwas* はだから自同の形式をもつのである。

ところで、この形式の内に立つ内容は具体的な特殊な内容であることはできない。その時我々は單に *Etwas* 一般をもつのではなく却つて特定の對象をもつからである。従つて *Etwas* の内容は特定なる内容即ち内容の内容ではなくかかる非論理的なるもの、名づけ難きものを受け入れるべき論理的な場合であり、内容一般でなければならず、*Etwas* は *das Form-Inhalte-Geŕge* として、既にこの論理的最小限たる發端において論理的なものと非論理的なものの二肢綜合なのであつて本来複合的であり、単数ではなくて複数なのである。⁽⁸²⁾

ところで、このように純論理的な最小限が形式と内容、一者と他者の綜合であることは宇宙も亦哲學の對象として一者と他者、形式と内容の綜合であることを教えるであらう。⁽⁸³⁾ だから、論理的な對象は必ず *Etwas* でなければなら

ぬが、この純論理的な理解はその形式と内容への分析によって可能であった。⁽⁸⁴⁾ 形式なき内容も、内容なき形式も我々の理解の埒外にあるから、対象的には一者と他者が、主観的には定立と他立が同時に成立するところに始めて我々の論理的理解は可能になるう。

リッケルトは Evas のこういった純論理的分析に教えられて、そこからかかる他立の原理、他立論をとるのであってヘーゲルが弁証法によって解決したところを分析論理の立場よりとりあげているといえるであらう。⁽⁸⁵⁾

リッケルトはこのような純論理的な Evas に形式と内容、その綜合の契機たる主観に対して当為の意味をもった相伴性である⁽⁸⁶⁾とを分析し、二肢構成を行なうことになったのである。

だが、これは何ら具体的な認識ではない。⁽⁸⁸⁾ 人は命題の文法的な分析を媒介として超文法的な論理の構造に達し、⁽⁸⁷⁾ 思惟の論理は認識の論理に移行するに至るのである。

ところで、完全に展開された命題は主語と述語と繫辞の三つの要素から成るが、⁽⁸⁹⁾ 命題の論理を示す文法的な構造は超文法的な論理の構造について何を教えるのであらうか。⁽⁹⁰⁾

ここで月は球体である、月は現実的であるという二つの命題についてみてゆくことにしよう。⁽⁹¹⁾

さて、これら二つの命題は文法的に見ると等しい構造を呈しているが、⁽⁹²⁾ 超文法的にみると月について球体であるとして有意味なものたらしめるには月が現実的であることが既に保証されていなければならぬのである。だから、月が球体であるという命題は現実の月は球体であるという意味であって決して単純な主語と述語構造をもつのではなくて一つの主語と二つの述語とより成っているのである。⁽⁹³⁾ 月の一次的述語は現実的ということであり、球体ということは二次的述語なのである。⁽⁹⁴⁾ 従って文法的構造は二つの場合を含み得ることになるう。そして、論理的に唯一の述語しか

存在しない場合には述語そのものが他の如何なる述語によっても述語されず即ち主語となることはないのである。⁽⁹⁵⁾ リッケルトはこれを一次的述語又は原始述語とよぶのである。⁽⁹⁶⁾

今若しも月に代えるに *Elvas* を以てし、何ものかは現実的であるという命題を構成してみると、あらゆる対象的認識の必ず前提すべき論理的なる意味・最小限を見出し得たといえるであろう。⁽⁹⁷⁾

この主語・述語より成る認識形式にあって述語の側面にあるのが認識形式であり、思维形式は先ず主語にあり、この主語において遊離せられる自同の形式が思维形式に他ならず、主語の形式としてリッケルトが提起する自同に對しての否定、自同律に對しての矛盾律は決して対象論理的な意味はもたぬのである。⁽⁹⁹⁾

だが、思维形式は主語の面のみならず、例えば「ある」の如く、述語についても考えられるが、「ある」は未だ現実的、妥当的といった差別を知らず、現実的であるとも妥当的であるともなるのであって、この限りにおいて原始述語への萌芽ともいふべきものである。⁽¹⁰⁰⁾ これが分化することによって我々は壮大な範疇の体系を得ることとなつて、ここで思维形式は認識形式になるのである。⁽¹⁰¹⁾

ところで、かかる形式と内容の相関にあって現われたものは所与の全体を受け入れるにはふさわしくないであろう。⁽¹⁰²⁾ そのような与えられたものを受け取る自我と非我といった無媒介直接的なものの次元に移った時、その我は個我たることはできぬ。それはあらゆる内容を包摂する内容意識一般でなければならぬからである。⁽¹⁰³⁾ 具体的個別的な自我は形式と内容の相関において個別性をもっているのである。⁽¹⁰⁴⁾ そのあらゆる個性を悉く客観化し終った究極にあって見出されるものこそ、これなのである。⁽¹⁰⁵⁾ このようにして自我において純粹形式が、非我において内容一般が見出されることとなるのである。⁽¹⁰⁶⁾ 形式・内容の相関として現われたところのものは今や自我と非我、主観と客観の相関として

立ち現われることとなるわけである。個に与えられている世界の内容是非我、形式は自我といった相関から成るのである。そして、ここに判断としての認識が構成されてくることとなるのである。⁽¹⁰⁸⁾ 内容は直観的に与えられ、見得るものであるのに対して、形式は本来主観に備っているものとして見得べからざるものである。見得べからざるものについて模写を語ること自体無意味なことであろう。対象はその認識と同一の形式さもつことになるのであって、内容が形式によって形成され、認識が模写ではなく、所与の雑多に綜合的統一を齎らし、直観に形式を与え、妥当する規則による内容の形成である点においてまさしく構成なのである。⁽¹¹⁰⁾

では、こういった構成としての認識の範るべき対象はいかなるものであろうか。

答えはここでも二つの側面から与えられることになる。人は単なる事実を承認或は拒否するのではなく、価値に関わるものをその価値ゆえに承認し、或はその価値に背くがゆえに拒否するのであって、判断たる認識は価値判断つまりは *Beurteil* なのである。⁽¹¹¹⁾

価値の有無は感情的なものを通じて教えられ、価値判断としての認識もまた感情的なものを価値決定の標準としてもつのである。それは形式と内容相属の確実性の感情であって、かかる感情を通じて我々は一定の形式・内容の関係を肯定すべきか、否定すべきかを教えられるのである。

それは「べき」であり、当為なのである。従って又かかる当為に対する自我も単なる因果の必然に縛された不自由な自我ではなくて当為の声をきく、自由な我であり良心的な我なのである。⁽¹¹³⁾ かくて、認識の対象は現実認識においても単なる現実存在ではなく当為なのであり、また意味なのであって意味が存在の前にあらねばならぬのである。⁽¹¹⁴⁾

既に示唆してきたように、リッケルトは所与の主体への現象と主体でのその現象といった二つのアプローチの次元

を設定用意していた。だから、ここでもまた認識作用の分析から、いわゆる先験的心理学の途によって当為としての対象概念に達することとなったが、⁽¹¹⁵⁾ 内在的な対象は超越的なものではないので未だ認識の客観性を保証するまでには至らぬものである。⁽¹¹⁶⁾

このため、リッケルトは永遠に妥当する、時間的な心理作用を超越した命題の意味にここで目を向けることになるのである。⁽¹¹⁷⁾ 真理は人の認めるかどうかに関わらずに真理なのである。⁽¹¹⁸⁾ かかる命題の意味は単語の意義ではない。単語の意義は未だ真偽の別を知らぬのに反して、命題の意味は真偽の別に関わるものなのである。三角形、内角、二直角などの単語は未だ真でも偽でもなく、三角形の内角は二直角であるという命題に至って真理が現われてくるのである。⁽¹¹⁹⁾ では、命題を単なる単語の寄せ集めから区別するものは何んであるか。それは恐らくは形式の他にはないであろう。⁽¹²⁰⁾ 形式が命題を成立せしめ、真偽の別をうむものである。かくて、命題の意味は妥当する形式と単語的な内容とから成るといえるであろう。⁽¹²¹⁾ 認識の対象は常に超越的に妥当する理論的価値形式における内容であることになるわけである。

我々はかくして先験心理学的な対象概念と先験論理的なものとの二つを得ることになったのである。⁽¹²³⁾

ところで、これら二つの概念は一体どのように関わるのであろうか。これに対してリッケルトは検討を加え、⁽¹²⁴⁾ 前者は後者より、超越性を、逆に後者は前者から当為性をそれぞれ受け入れることによって互いに相補うとみることにするのである。⁽¹²⁵⁾

だが、ここで一つの問題が生じてくるのである。

というのは、認識は判断であり、対象は超越的当為として、それぞれ措定されるに至ったのであるが、判断作用は

個別的主観においてのみ見出されるために、意識一般対象のもつこの超越性が脅かされるに至るからなのである。⁽¹²⁶⁾この危険を避けるために、リッケルトは判断意識一般の概念を構築することとなったのである。⁽¹²⁷⁾

では、いかに可能なのであろうか。

我々は概念に二つの種類を区別せねばならぬであらう。その一つは事実を示すものであり、も一つは事実の有する意味或は効果を示す概念 *Sinn- oder Leistungsbegriff* なのである。判断作用を単に心理的事実として記述するものが前者であり、超越的な真理の把握に対していかなる意味をもち、いかなる効果をもたらすかを明らかにするのは後者なのである。⁽¹²⁸⁾事実問題ならぬ権利問題に関わる先験心理学はかかる意味概念の構成に本来関わるものでなくてはならぬのである。それは超越的に妥当する意味自体の構造を伝えんとするものではなくて、かかる超越の意味が主観に宿されて内在の意味となった場合つまり超越の意味が判断作用に含まれ、作用即ち意味となった場合に、かかる作用意味としての内在の意味を超越の意味との関係で解釈せんとするものである。事実の説明ではなく意味の解釈なのである。⁽¹²⁹⁾

判断意識一般はこういった意味解釈に基く意味概念として、個々の心理的主観ではなくて、超越の意味を宿す限りにおけるその内在の意味として成立するのであって、すべての個別的主観に通ずる主観の理論的理想に他ならぬのである。⁽¹³⁰⁾だから、内在の意味として一般性をもつのは至極当然なのであって、そこに判断意識一般が可能になってくる根拠が有するわけである。⁽¹³¹⁾

こうして、リッケルトは判断意識一般の構造を肯定判断意識一般を例にとり、⁽¹³²⁾論理上自己に先行すべき問いを有さぬところに見出すに至り、問うことなくして答える意識一般とみるのである。⁽¹³³⁾それは与えられた現実を単に与えら

れたものとしての肯定する現実認識の主観なのである。⁽¹³⁴⁾

リッケルトはこのようにして、対象或は準拠が依然超越的に妥当する形式と内容の相属性としての当為であり、その必然的主観的コレラートはその超越的に妥当するところのものを肯定しつつ、己がものとする判断意識一般の意味と考え、かくて超越的当為とその是認の意味とが与えられた現実的存在の論理的前提として概念上内在的存在に先行するとして現実認識を位置づけ、⁽¹³⁵⁾この現実認識の範疇論として自然科学と文化科学に関する、いわゆる科学論を展開するに至るのである。

リッケルトは未だ学的な態度をとるまでに至らぬ以前の、つまり先科学的な立場にあって、いわば自らにおいて成立する現実界の構成的な形式として超個人的な肯定的意識に関わるものと学的な認識の上場において始めて現われる単に現実的な認識の認識形式でしかない、肯定意識一般に関わる現実界を構成する現実形式と個別的な現実主観の存在を予想する方法論的認識形式とをその概念構成において区別し、⁽¹³⁶⁾これによって歴史的認識の可能性を救出せんとするのである。⁽¹³⁸⁾

カントは自然を一般的法則に規定される限りにおける事物の存在と定義したが、現実の世界が直ちにかかる一般的法則に従う自然界であるとなると、個別的であって而も因果的な歴史の世界は容れられぬことになるであらう。⁽¹³⁹⁾ここにリッケルトはカント認識論のもつ不十分さを探りあてたといえよう。⁽¹⁴⁰⁾

歴史認識が可能であるとすれば一般的法則に従う限りの自然は直ちに現実界ではなくむしろ方法論的所産であり、普遍的な法則性は方法論的範疇でなければならぬとみるのである。⁽¹⁴¹⁾ここで構成的範疇と方法的範疇の区別が実益あるものとして働くこととなるわけである。

つまり、カントやウィンデルバントのように直観の雑多が直ちに自然界にまで構成されるのではなくて、その中間に未だ普遍的法則にまで概念化されぬ個別的因果の支配する現実界を挿入し、個別的な因果性は構成的な現実形式、⁽¹⁴²⁾ 普遍的法則性は方法的認識形式に関わるとするのである。

リッケルトにとって構成的範疇によって組織された現実界は彼がいう異質的連続を呈する。人は同一の木の葉を二つ見出し得ないと同時に一枚の木の葉が内に無限の多様を蔵しているのである。若しも現実の我々が直ちに意識一般であるならば我々は無限なる異質的連続としての現実をそのままに捉え得るであらう。併し、我々は有限なる個別的主観なのである。我々はその異質的連続を法則概念によって同質な方向へ普遍化することによってのみ把握し得るであらう。

ここに、自然科学が成立するのである。従って、普遍的な法則概念はもとより、普遍的な實在の模写ではなくて、異質的連続よりの抽象であり、個別的な類例つまり *Gattungsexemplar* への妥当のゆえに真理性をもつのである。そこにまた自然科学的概念構成の限界が存するのである。個別的なものはそこでは普遍的概念の類例としてのみ認識されるのであって、その個別性は無視されることとなるのである。⁽¹⁴³⁾ ここに文化科学形式の契機があるのである。

文化科学は個別的・一回的なものをその個別性において理解せんとするものだからである。⁽¹⁴⁴⁾

だが、個別的なものを個別的なものとして、無差別に、またその内面的無限性に関して模写的に認識することは無意味である。⁽¹⁴⁵⁾ 文化科学は個別的なものの選択抽象の原理として普遍妥当な価値を掲げるものである。もとよりこれによって実践的価値の有無が批判されるのではなくて、単に理論的な価値関係性が試みられるのであって、かくして無限なる異質的連続の内から、特定の個別性存在に関する個別化的概念構成がなされるに至るのである。⁽¹⁴⁶⁾

こうして、普遍化的概念構成による自然科学に対して個別概念構成という学的概念構成を行なってゆく文化科学がその独自領域をもつことになるわけである。⁽¹⁴⁷⁾

だが、これはあくまでも形式であって、内容的な規定によるものではなかった。⁽¹⁴⁸⁾ リッケルトはここで更にも一歩ふみ込んだ説明に入ることになるのである。

さて、個別的なものが、その個別性に関して我々の理論的関心を喚起することになるのは個別的なものが、価値に対して有する特殊の關係に基づくのである。自然科学は価値を抽象し、文化科学は価値に関連させるものである。文化科学は価値を荷う個別的なものの学であって単に個別化的のみにとどまらず価値關係的な概念構成を行なうものなのである。ここに没価値的な自然科学に対して文化科学が区別される所以のものがあることになろう。⁽¹⁴⁹⁾ 我々は価値を宿せる個別的現実を理論的に価値に関わらしめることによって個別化的概念構成の下に齎らすことを得るのである。従して若しかかる個別的現実の内に単に歴史家によって理論的に価値に関係せしめられるだけでなく、己れ自らが価値に対して態度をとり、価値実現の核心を構成するものがあるならば、それは当然歴史的なる個別化的概念構成の中心を構成するであろう。或る時、或る社会はかかる中心をもつことによって自ら特色ある統一に結合し、以て個別化的概念構成の対象として浮き立つのである。価値は歴史家が個別的現実に投げ入れるのみではなく、個別的現実から自ら価値に対して態度をとるのであって、かかる中心をリッケルトは歴史的⁽¹⁵¹⁾中心とよんだのである。またかかる価値に対して態度をとり得るのは精神と称される心理的・個別的現実なので、文化科学的⁽¹⁵²⁾概念構成は形式的に言えば価値關係的個別化的であり、内容的には精神的なものとして文化価値に関わるものとなるので文化科学と言うべきなのである。だから、こういった文化科学が自然科学と区別さるべきものと考えるのは至極当然なことといえるのである。

こういった科学論が原子模型的な物理学の手法に模しつつ、個内構造式をアナロジ的に構成しようとし、またそこに「新」カント派的な意図を重ね合わせていたオルテガの前にあったものであった。特にドイツ新カント派の著者ともしうべきハインリッヒ・リッケルト⁽¹⁵³⁾によって、かかる、人間科学への自然科学的認識方法適用に関する限界論⁽¹⁵⁴⁾ともいべき科学論が提起されたいたのである。

これが、九八年危機への対応として、こういった個内構造式定着に思考の生産性との関数関係を確認し、量子力学による物理学的な原子模型に擬しつつ、その構成と定着化を自らに課して検討を重ねていた一九〇二年小論への道程にあったオルテガが自分なりの答えを出すべき第二の設問だったといえよう。

では、彼はこういった自然科学的手法の人間科学への適用についてどういった解決を施すに至ったのであろうか。全くの推測の域を出ないが、恐らく次のようなものであったと考えられるのである。

ところで、これまで縷述してきたように、実存の中に構造性をよみ取ってゆこうとしたオルテガにとって本来的にみるならば、自然のいわゆる無性物的存在であれ、はたまた生命を有するものであれば、等しく構造作動性を考えるわけであって、その限りでいわば見られるものとしては、そこに何等の区別はないことになる⁽¹⁵⁵⁾。

科学とはこういった構造性所と作動に論理的な構図を与え、被規定的にはこの所与に限りなく近接した図式を構成するものであるから、そういった手続的な手法においては自然科学も人間科学も同じ科学として何らその間には径庭は存せぬのであって、自然科学的方法の人間科学への適用利用は毫も差し支えのあるものではないといえよう。否、こういった意味は二つの科学が相互依存の關係にたつことは望ましいとさえ考え得るのである。

だから、自然科学に対しての人間科学独自領域性をあまり主張し過ぎるとこういった相互の方法における融通性を

塞ぐ結果となつて、却つて、人間科学の進展を阻み、後進的ならしめる原由ともなりかねぬのであつて、特に意を払ふ必要があるのである。人間科学はもつと大胆に自然科学の成果をこういつた方法展開の局面にあつて取り入れてゆくべきであり、オルテガまたこのような発想をもつことによって量子力学的な原子模型形成に擬しつつ、個内構造型の構成とその定着化をめざすこととなつたはこれまで触れた通りである。

だが、既にこれまた、リッケルトの科学論に望見されるように、自然科学と人間科学とはその構造作動の構図化において差はなくともどこことなく、ハインリッヒ・リッケルトやマックス・ウェーバーが指摘する如く、異つた図式展開をみせていることも確かであつて、その方法象面で軌を一にするとは強ち主張できぬものもち、だからこそ自然科学認識の限界を説くところから文化科学論も主張されたのだとみなければならぬのである。従つて、こういった差異についても一応は筋の通つた解答を用意する必要があるであつたわけである。

ところで、これまでの科学論にはオルテガが捉えていたような科学に共通の構造性図式化に対する明確な把握は欠落していたと言ひ得るであらう。このために個と対象との経験的な出会いにあつて、Kurt Lewin 的な $E \downarrow P \downarrow R$ パラダイムがただ経過的に見られ、構図性の作動をふまえた場合当然に考えられねばならぬ $E \downarrow P$ と $P \downarrow R$ の二つの回路が順列ではなく、逆転されて一つのベクトルの流れではなく、真に二つの回路であることを見落して、このパラダイムそのものを畸型化してしまつていのである。というのは、所与との出会いは $E \downarrow P$ 象面であるが、ここで作動している図式の論理化が行われるところは $P \downarrow R$ の次元だからである。つまり、ここでリッケルトのいうところを経験論風にリアレンジして籍りるならば心理と論理の継起順序が逆になるのである。経験の終つたところから論理は始まるともいえよう。P は実存的静態的にみる場合には同一と仮構されても、かかる図式作動という動態性に着目す

る時には異質な重層性をもつのである。要するに、ここで次元逆転が行われることとなるのである。出会いという経験次元にあって一次であったものは論理的には二次更に高次なものであって、出会いと論理的次元ではこのように逆となるわけである。出会いの次元での次元数をそのままに論理的次元に移して、その次元数を定めていたところに、これまでの経験論の限界があったのである。単純と目される経験が論理的次元では既に単純なものであるとは言えないのであって、高次なものであり、論理的次元にあっては単純なものではないのである。出会いの象面ではミゲル・デ・ウナムーノのいうように *sum ergo cogito* であるが論理的象面にあってはまさしく *cogito ergo sum* なのであって、この二命題が *ergo* で連接できぬところにルネ・デカルト定言の古典的な意味がまた潜むといえよう。こうして論理化象面でみる限りはこの *cogito* を収束極とした構造性が既にそこで作動していると考えねばならぬのであって、そこに、同じ科学として構造式構図化を共通項としてもしながら、自然科学は $E \downarrow P$ 回路に、人間科学は $P \downarrow R$ 回路に立脚することによって、かかる構図指定の態様に科学としての差異を胚胎させるのであって、俗な表現によれば自然科学は見られるものを見るのに対して、人間科学はこの見るものを見られるものとして更に見るといった手続をとらざるを得ないと言えよう。つまり、自然科学はこの論理的な次元で行われる構造性の図式化にあって、*cogito* を収束極とした一次構造式を思惟経済の面から省略することができるのであり、また常に省略した形で作動させるのである。

だが、その作動において、この *cogito* 式を自らの内に含む、どこまでも見るものである個を予想せざるを得る人間科学は、その省略を許さぬものなのであって、そういったいわば論理一次構造式の論理化を避けては通れぬことになるのである。人間科学にあっては、こういった一次式論理化の手続を行なっている人間そのものを直接的に対象化

せねばならぬので、かかる構造式の構図化過程を先ず再現する必要に迫られるのである。これに対して自然科学は構造式そのものの指定よりはその後の手続である構造式の二肢嵌合による構成作業に主軸をおくものであって、こういった人間の行なう構図化過程のいわば屈折した間接対象化に立脚するのであり、そこにいわゆる哲学と人間を直接対象とした自然科学である生理学や医学などとの差が生れてくるのである。人間科学にとってはこの構図化過程はどうしても省略し得ないのであって、オルテガが人間にとってあること自体が問題であると述べる時その意味するところはまさにこれであつたと言ひ得るであらう。自然科学と人間科学はかかる所与能作を行なっている構造性の論理図式化である点で科学として同じであるが、その構図手続において人間科学はどうしても一次性を省略し得ないという点で自然科学に許された思惟経済を行ない得ぬという特性をもっていると考えてよいであらう。

實在を海に擬することを好んだオルテガは所与経験次元と論理経験次元との、また後者の重層性を正鵠にとらえていた。彼は今述べたところとはば同一の手続を構想することによって個内構造式の論理的定着化が自然科学的手続を利用して進められ得ると同時にこういった定着化自体がかかる一次性構図化と関わるものであることを看破し、その人間科学性を立証するに至ったといえよう。彼は cogito というのは論理一次構造式の構図化であると考え Wilhelm Dilthey のいう内観の、⁽⁵⁶⁾ もっと深い意味を救済し、見られる個の内を観るものとの関連で図式化し、こういった論理構図の完全式を個の中に指定することによって省略の許されるものとは異った機序に人間科学が依拠しているとの断を下すのである。

かくて、オルテガは量子力学的原子模型形成をモデルとしながらも個内構造式の論理化という課題をまさしく人間科学として果して行き得る道を拓くことになったといえよう。つまり、思考生産性を保証する人間科学的な個内構造

式の構成と定着化を原子模型構成といった自然科学的成果を十二分に活用して行なっても何ら差し支えはないとの自信を深め、一九〇二年論文への道を進むこととなったと思われるのである。

だが、も一つ自分なりに納得のゆく答えを用意しておかねばならぬことがあった。それは存在に一般的な構造性をどうして特殊限定的な個の中に求め得るのかといった、これまで多くの秀れた思想家たちす鼻面をひきまわし、こつてきたアポリア⁽¹⁵⁷⁾をなすものの処理であった。

ところで、こういった一般と特殊との関わり合いについては José Luis Abellán がその大著 *Historia crítica del pensamiento español*⁽¹⁵⁸⁾ 第一巻で論じているので、先ずこれに拠って、この問題地平をみておくことにしよう。

Abellán 教授はスペイン思想又はスペイン哲学⁽¹⁵⁹⁾といった“国民”的レヴェルでの思想乃至は哲学の歴史叙述が果して可能なのかといった問いを自らに課し、これから本論の叙述を始めているのである。

というのは、哲学そのものが普遍的な問題を取り扱うことになるから、そこに哲学史といった限定、しかも現実に哲学の国民史⁽¹⁶¹⁾といったものも存しているだけに一般と特殊の問題がそこに絡らんで来て、この結果、このような哲学の国民的レヴェル⁽¹⁶²⁾にあったの歴史叙述に関して三つの異った対応が生れてくるとした上で、それぞれの姿勢一つ一つをとりあげて説明を加えるのである。

ところで、その第一はいうまでもなく哲学の国民史⁽¹⁶³⁾といった分化した実在をきっぱりと否定するものである。抑々哲学は普遍的なすべての人にかかわる存在、実体、偶有といったものを扱う科学的所為⁽¹⁶⁴⁾なのであり、従って既にそれだけで超国民的⁽¹⁶⁵⁾なものたるべきであるので、哲学の国民性⁽¹⁶⁶⁾といった主張自体が不合理なものであって、数学に国民的数学がないのと同じであると主張する考え方である。

かかる発想は言うまでもなく哲学の普遍史を構想するものであって、スペイン哲学の存在を否定し、⁽¹⁶⁷⁾スペインに見られる哲学的活動つまりスペイン思想を普遍的哲学史に同化吸収せんとするものだと言ってよいであろう。

これに対して、哲学の国民史が現実⁽¹⁶⁸⁾に叙述され、綴られているという事実を直視することによって哲学のかかる史的作業に対応した独自の特殊性を信ずる人々⁽¹⁶⁹⁾がいることもまた確かである。

彼らは国民主義的な前提にたつて、具体的な一国の哲学についての特定の歴史を主張するのである。⁽¹⁷⁰⁾

こうして、スペイン哲学史はとりわけ黄金の世紀とその内在的な文化価値の帝国主義的称揚と結びついて、他国民の哲学に対置されることになるのであって、⁽¹⁷¹⁾Menéndez Pelayo, Carreras Artau, Marcial Solana がみせた歴史的哲学的な試みはこうした傾向を代表しているとみてよいであろう。⁽¹⁷²⁾

だが、かかる対蹠的な哲学史をめぐって生れた二つの姿勢はその取り組みにおいて当為と現実一方のみの切り捨て的な態度を窺わせるものである。つまり、哲学は普遍性を基底にはしているが、それはあくまでも極限値なみにあくまでも無限にそれへの接近をはかるべき理想値とも言うべきものであって、現実には国民的レヴェルでこれへの接近が実現されている限りでは哲学の国民的実現もまた否定されぬが、またさりとてこれを既定値なみに取り扱い、理想値の存在をみとめぬのも独断の誤りを犯しているといえよう。要はこの共在こそが考えられるべきであり、これがまたすぐれて「現実的」であるとの見方が生れざるを得ぬのである。

こうして、哲学が国民的共同体によってつくられるという事実を肯定し、次にそういった特殊な結果を国際的イデオロギー更に世界哲学共同体と結びつけ、その昇華をはかるべきであるとする中間的な姿勢が第三の立場として取りあげられてくるのである。⁽¹⁷³⁾

ところで、この第三の立場によつた哲学の国民史は国民史を構想する点で第二の姿勢とも交点を有するものではあるが、決して単なる閉鎖的な国民精神の強調には終つてはならぬのであつて、ここにこのような第三の姿勢によつた哲学の国民史を綴る正当性も存するであらう。

では、何がこゝにいた正当性を保証するのか。これについて極めて興味ある点は Abellán 教授自身ホセ・オルテガ・イ・ガセーの発想にたち、そこにこの根拠を求めているという事実なのである。⁽¹⁷⁵⁾

オルテガは周知のように私は私と私の環境であるとの命題を提示したのでありこれについては既にふれるところがあつたし、これによつて彼は個内構造式を論理化したともいえるのである。⁽¹⁷⁶⁾

ところで、この命題こそが、一般と特殊についてのオルテガ発想の結果なのであり、環境を救わずして私の救済はあり得ぬといつた考えが哲学の国民的構想に構造化構図による一般と特殊の共在を通じて新しい息吹きを導き入れる手懸りを秘めた⁽¹⁷⁸⁾「開け胡麻」⁽¹⁷⁹⁾だったのであるといえよう。だから、Abellán 教授はこの第三の姿勢の「哲学」としてこれによつたのである。

それは、オルテガが一九〇二年への道を模索しつつ、自己の前に立ちはだかる二つの荊棘を切り開いて個内構造式の論理構成とその定着化構想をレティロの瑠璃館宛らにその視野の中にとらえた時、また解決を迫る課題として立ち現れることになつたこの構造式の一般性とその特殊次元における実現といったものに関わる問いを解き、その後彫琢を加えた所産が他ならぬこの命題であつたわけなのである。

一般と特殊とは Abellán 教授が言われる第三の姿勢に窺われる如く本来共在すべきものであり、これがまたオルテガがこゝで出した一応の結論でもあつたのである。

では、オルテガがこの問いに与えた解はいかなるものだったのであろうか。それはこの命題の流れを遡航した時どういった形を呈するものであったのであろうか。

彼はかかる二肢共在構造式に望見される操作肢による一般と被規定肢に立脚した特殊とを最小限三次元化した振れ交叉による関連づけをねらわなかったことによって正しくつかむことはできなかったが、その間接的投影としてこれに近似した解決をつけることができたと推定はし得るのである。つまり、かかる個内構造式を被規定的にのみ捉え、このような構図が人間という *Gattung* によって一般であり、また人間という *Gattung* にのみ一般であることによって、人間に特殊な作動構図であるとして、このスフィックスの謎にも比すべき難問を切り抜けたのだと考えてよいであらう。

だから、個は一般を含んだ特殊定立としてまさに一般と特殊との共在態となったのであり、これとともにこういった構造式は人へのみ特有なものとされたのである。

ところで、オルテガが一九〇二年への道にあって解決を迫られたこれら三つの問いにそれぞれ自分で一応納得のゆく答えを書いて、個内構造式の論理的構成とその定着化といった構想を具体的に固め、その言語表現による客観化を一九〇二年論文によって果したのだと推定してはば誤りはないと考えられるのである。だが、これらの三つの設問ともいうべきもので、科学論及び一般と特殊に関するものは既に示唆したように、それ自体発想の一大転換を迫るものであり、その取り組み方の如何によつては一九〇二年小論とは異なったプログラミングをもたらず可能性は十分に存したのであり、それはまたオルテガを単なる *otopodista*⁽¹⁸⁰⁾ 以上のものたらしめ得たかも知れなかったのである。

さて、個内構造式は極めて抽象的に表現するならば分離推定さるべき二肢とその関連づけ⁽¹⁸²⁾によって論理構図化され

るものであり、特に関連づけに構成の要があったといえよう。だからそこにあつては、René Descartes の命題が極めて重要な示唆を与えているのである。というのは、*cogito ergo sum* に要約される彼の定言はかかる個内構造式論理構図化の上でまさに古典的な意義を有していると思得るからなのである。

ところで、この *cogito* はいうまでもなく一人称である「私」の中にあつての *cogitare* 即ち操作肢を示すものであり、また *sum* はこの「私」の中での *essere* であり、私の中での被規定肢に対応するものであることは明らかであつて、ここに既に個内構造式で作動している二肢が意識象面で論理化され、提示されているとみることができるのである。つまり、言葉を換えて言うならば、いかなる二肢を構成すべきかという問いに対して既に答えを出していたものと解し得るわけである。だから、二肢構成にあたつては文字通り *ortopedista* として、この定言に含まれているところを利用さえすれば十分であるとさえ言つてよいのである。だが、ここでの *ergo* は極めて重大な接続詞である。*ergo* を用いなければならなかった、意味の検討そこにこの命題がもつ、いわば第二の古典的意義が存していると考えられるのである。

ところで、ラテン語の小辞 *ergo* ⁽¹⁸³⁾ は、これまででもルネ・デカルトの解釈にあつて、いろいろと取り沙汰されてきたものであるが、この言葉の含意にこそまさに注目せねばならぬといえよう。というのは、これには二つの意味が潜んでいると見られるからだからである。

それは *ergo* なる小辞がもつ転移的な意味と結果的な意味の二つの複合に対応したものといつてよいのである。つまり、その前者的な含意はまさに過程的な力動性を示すのであり、後者はこの二肢の関連位相に關すると考えられるのである。語を換えて言うならば、転移性は二肢のシュンクロノス的な関連づけを、結果性は操作と被規定とにそれ

ぞれ収斂せしめられた構造式のダイアクロノ的な排列を示唆しているとみることが出来るわけなのである。

抑々個内構造式をこのような二肢で論理構成するに際して、その関連づけこそがまさしく問題であり、それに天動の地動への転換といった同一空間内での力点移動以上の変革を必要とすることがここに含まれているとみななければならぬのである。それはこれまでに二千年を優にこえる長期間に互って人智を束縛してきたユークリッド空間⁽¹⁸⁷⁾を一つの空間として相対化するいくつもの拡がりをもった多くの空間を予想した関連づけを考えねばならぬことを意味したのである。つまり、こういった関連づけにあって導入されねばならぬのはガウスの曲面についての一般的研究を曲空間についての一般的研究に転換し、⁽¹⁸⁸⁾ n 個の広がりをもった多様体の理論を三次元空間の理論より自然に拡張したものと⁽¹⁸⁹⁾してつくり上げ、これによってユークリッド空間もロバチェフスキーによって見出された双曲線空間も更にこの他いろいろの空間を包摂した⁽¹⁹⁰⁾ n 次元超空間の構想を仕立てあげること成功し、⁽¹⁹¹⁾ 視覚的に思い描くことができぬゆえに非現実的な絵空事といった視覚先入主のためにわずらわされて視覚の狭い領域に踞せざるを得ず、だからまたユークリッド空間という特殊にそのままで一般として振舞うことを許していた、これまでの眼の壁を見事にぶち破ることを可能にしたベルンハルト・リーマンの着想⁽¹⁹²⁾なのである。

このリーマンの卓見なくしてはアルベルト・アインシュタインの相対性理論もその完成がもっと遅れたであろうと⁽¹⁹³⁾さえ言われるのである。

前にも述べたように、DNAのワトソン・クリック模型にも見られる如く、実存における二肢は平行ではなく捩れ交叉さなしているものであり、そこに関連づけに際してのモデルが有していると考えてよいであろう。これが、こういった⁽¹⁹⁴⁾ n 次元超空間での関連づけのみせた特殊な現象形態なのである。だから、それはユークリッド的空間にあっての

直線に基づいた関連であってよい筈はないのである。個の構造式内にもかかる数学や物理学の成果を十分に活用し、リーマン的な n 次元超空間に対応した多項とその関連が考えられるべきは当然な事であり、こういった構造式構成多様性の所与最小限が二肢なのである。

従って、二肢自体恰も海面に姿をみせた魚なのであって、その底にかかる多様体的一般項と連なるものをもって見るとみななければならぬであろう。一般項又一般肢の表出としての二肢を関連づけるにもまたこういった一般を含み得るものが用いられねばならぬのは当り前のことである。周知のように René Descartes は解析幾何学⁽¹⁹⁴⁾の祖といわれている。彼がこういった着想によって戦いを挑んだのは直観による補助線発見というまさに神技秘伝に凭れかかり、学というよりは宗教に近いとも考えられるユークリッド幾何学⁽¹⁹⁵⁾であった。まさにその幾何学化を意図したのである。図形を末知数を含んだ一般数式化し、これによる論理的証明を行なわんとするのがデカルト幾何学の目指したものであって、その底流にはかかる一般項化への衝迫が働いていたと見得るものである。だから、René Descartes がその命題に ergo なる小辞を挿し挟んだ時まさに構造式二肢のシンクロニクな関連づけに際して、まさしく、今述べたようなリーマン的な構想に連なる新しい関連づけを志向したものであり、かかる意味がそこに籠められていたと考えねばならぬであろう。こういった意図においてまた René Descartes はヨーロッパ近代思想の祖だったのである。だが、かかる要請に応えるリーマンの構想が誕生するまでには尚お二百年の歳月を必要としたのであった。⁽¹⁹⁶⁾

このため、René Descartes の中で胎動していた近代という新しさに対応する文字通り漸新な発想はまだ発芽をみる条件にはなく、そのままいわば氷温保存されねばならなかったといえよう。彼デカルトの思ひは思のままに終らざるを得なかったといえよう。だが、こういった着想を凝結形とはいえ残したのであって、そこに René Descartes 命題

の *ergo* にこめられていたシュンクロニークな継起による新しい関連づけを志向する第一の意味があるわけである。それはその展開つまり解凍を訴える石の化の声にも似たものであって、これこそこの命題がその中を含む第二の古典的な意味だったのである。二肢構成ではなく関連づけに個内構造式構成に際しての問題が存することを示唆したこの命題の第一の古典的な意味を承けて、ここでは多項の所与最小限である操作肢と被規定肢の二つをこれまた少くともこれまでのユークリッド的空間呪縛を脱却し、邯鄲の夢よりさめて n 次元超空間のこれまた所与最小限的な関連を化体している Möbius⁽¹⁹⁷⁾ の帯を用いて、振れ三次元⁽¹⁹⁷⁾ の形で実現すべきこと、これが *ergo* を通じて訴えられてくる René Desartes 命題の第二ともいえるべき古典的な意味なのである。

染色体や DNA によって、自然所与として既に実現されている振れ交叉をモデルとすることによって個内構造式の二肢共在構図が始めて論理化されるに至るのである。かかる意味において二つに一つは誤りではなく、二つを一つにする関連づけを構想することでアポリアではもはやなくなるのである。

ところで、こういったリーマンの n 次元超空間に対応した関連づけによって個内構造式を構成した時に立ち現われる操作肢と被規定肢は実のところシュンクロニークな二肢ではなく、それ自体既に *ergo* の第一の古典的な意味によって示唆されたシュンクロニークな振れ交叉で論理化された構図式のディアクロニークな組み合わせであることを *ergo* の第二の意味が我々にまた教えているのである。つまり、そこでの操作肢はシュンクロニークな関連づけによって構成された一次式ともいえるべき構図にあっての被規定肢に対応するものであり、また被規定肢はいわば一次式に基づいて定立されてくる二次式ともいえるべきものの中にあっての操作肢に対応したものであって、かかる構図の作出が実のところ一次、二次のディアクロニークな機序によってなされるのである。 *ergo* を特に introducing

a resultant event に関わるものとみる時に、この ergo が我々に語るのはまさしくこういった構図構成の手続だったのである。

だが、現在のところ残念なことに René Descartes 命題の ergo が示唆している第一の意味に応える作業は構造式論理化の日程表にさえ上ってはいないのである。

このために、ergo の教える第二の意味つまり René Descartes 命題の第三の古典的な意味は救済されるには程遠いこととなるのである。

本来は操作肢と被規定肢との構造関連式構図にあって被規定肢を被動化して見るものに収束することになる一次構造式とその逆な構成をとって見られるものに収束してしまう二次構造式とが現象として立ち現れている操作肢・被規定肢両肢共在関連式の底面にあって作動しているのであって、かかる現象的な両肢は実のところ、こういったそれぞれの構造式がまた振れによって組み合わせられた収束構造式複合の端末なのであって、同時に動きつつ既に異時的に構成された一次、二次式の組み合わせなのであって、ergo はまさにそういった複合の凝結点なのであり、これが ergo のもつ第二の意味に他ならないわけなのである。

こうして、René Descartes 命題は同時次元での一次構造式と二次構造式それぞれの胎生手続についての示唆を含むとともに現象的二肢関連構造式が実はこの二つの図式の異時的な複合の結果にすぎぬものであることを指摘しているのであり、ergo という小辞はその凝結し収束した術語ながら、かかる含みを我々に語りかけているのであると考えられるのである。

だが、この命題はその cogito, sum が示すように René Descartes 自身、視覚の呪縛を化体したユークリッド空間

そのものからは外に出ることができなかったために、かかる真の近代化への、まさしく n 次元超空間への対応を志向しながらも、この命題そのものの含むヨーロッパ近代に与つての本当に古典的な意味を論理化することを得ず、こういった *cogito ergo sum* なる表出によって、いわば硝子臺のディアボロ宛らに収束するしかなかったことをまた意味していたのである。この自らの筆でヨーロッパ近代にとつての墓碑銘を綴らざるを得なかったとの告白にその命題の第四の、*ergo* のもつ二つの意味を一つと数えれば第三の古典的な意味が存するのである。⁽¹⁹⁸⁾

ところで、オルテガが個内構造型の論理的構成と定着化を意図した時、彼はまさしく、こういった René Descartes 命題の含む古典的な意味の救済をはかり、デカルト自身がかけた呪術より解放し、その凝結を解凍せんとする課題を自らのものとしたとみることができよう。

だが、遺憾乍ら一九〇二年の小論から逆に推論してみた限りでは、こういった René Descartes 命題のもつ古典的な意味を正しくふまえることはなかったと言わねばなるまい。恐らくはこれまでに縷述したような処までその模索を手を伸ばしたとは考えられよう。だが、オルテガは数学者、物理学者である前にあまりにも哲学者であり、また人間科学者⁽¹⁹⁹⁾でありすぎた。彼は Herbert Riemann の名を知り得た筈である。併し彼にとつてのこの時点においての最大の関心事はカントを超えることであったのではなからうか。既に示唆したようにカントを超えるにはカントと同一のニュートン・ユークリッド空間で呼吸する、*ortopedisia* では不可能なのであって、この空間そのものを出てこそ始めてカント超克への道が開かれてくるのだと言えるのである。

一九〇二年論文の梗概でも明白なようにオルテガはここで既に示唆したように二肢構成の道をカントと同一の伝統的空間にあるままに扱ふこととなつた。⁽²⁰⁰⁾ この限りにおいて René Descartes 命題が内に秘め石の花の詩としていた古

典型的な意味を志向とは裏腹に正しくとらえることはできなかった。つまり関連づけでのまさに斬新な発想を模索するのではなく、これを常数とおき、特殊ならざる、より一般的な、やがて非有・有として明らかになってくる存在論肢を包摂し得る二肢の構成に個内構造式の論理構成とその定着化をはかる作業を賭けることになったといえよう。これこそ、オルテガ思想形成にあつてのプログラムともいふべきものであり、一九〇二年論文でその姿をみせたものだったのである。

かかる検討を先行させたと推定される一九〇二年の小論は短かいものとはいえ、よい意味、悪い意味を含めて文字通りすべての面においてオルテガ思想体系の出発点をなすものと評価できるのであつて、これこそ、この小論のもつオルテガ思想に対する意義であるといひ得るのである。

こうして、オルテガは彼にとつての課題であり、また九八年の危機を克服するために何としても必要不可欠であるとみた、思惟生産性の担保条件である、個内構造式の論理構図化とその定着といった課題を一九〇二年論文によって明示のプログラムとするとともに、この方向に沿つての具体化と取り組むこととなるのである。つまり、彼は彼にとつてのこの構造式を一般化し、理想極限値に向つてのもっと大きな近接を可能ならしめる共在二肢をいかに構成してゆくのかをここでの、一九〇二年論文によるプログラムの具体化作業として捉え、これが一九〇三年以降のオルテガにとつての問題となつたのである。一九〇四年一月六日ミゲル・デ・ウナムーノに宛てた書簡によつて破られるに至るまで続くことになった、差し当つて文献空白期と看做し得るも一つの空白期をなす一九〇三年は、こういった問いをめぐる模索に明けくれたものであつたと推定してほば間違ひはないと考えられるのである。

こうして、存在論の一肢として、ドイツ的有・非有の回路に対して、レコンキスタを承けて否定、放浪といったス

ペイン伝統実存と離れ難く結びついていた非有・有といった回路をいかに前述のドイツのものに接合し、ヨーロッパ一般的な *Ontologia* の回路を構成し得るかがこの一年の作業課題をなすものであったとみてよいであろう。まだ、十分な成算を得るまでには至っていないが、かかる回路構成のヒントを過渡期に求め、*misticismo* の側からそれにアプローチしてゆく手懸りらしきものを探ろうとするのが、これから脱け出して一日九時間から一〇時間をかけた読書の結果を活用しようとした一九〇四年の二月、三月、七月においてそれぞれ綴られる諸論稿になるのであり、その歩みはやがて一九一三年のキホーテの考察にその結晶化をみせることになると言ってよいのである。そしてこの空白の一九〇三年をこのような形で我々に再構成させる素材提供の場がミゲル・デ・ウナムーノに宛てた一九〇四年一月六日付けの書簡であったと考えられるのである。

こうして、一九〇二年二月一日 *Vida Nueva* 紙上で発表された小論はオルテガにとって他国の思考図式摂取に際しての思惟生産性担保の必須条件としての個内構造式の論理的構成とその定着化を彼の思想形成の日程表に書き込ませることになったのを承けて、彼がその作業遂行のため荊棘として立ちはだかった問題の検討を終え、真にカントを超え得る道を示唆していた *René Descartes* の *cogis ergo sum* 命題のもつ古典的意味の救済に触れ乍らも結局のところどのようなアプローチを目指したかの一つの証言をなすものと受けとれるのである。この小論はそういった意味において、一九〇二年以前の文献空白期にあって、オルテガがいかなる検索を試みながら、個内構造式の論理構築とその定着化を自らの課題とするに至ったかを我々に推測させるとともに、これをどういったプログラミングによって遂行しようとしたかを示す場をなすものと言ってよいであろう。オルテガはその作業が本来向けらるべき関連づけではなく、二肢構成をとりあげることになったのである。

また、この小論とミゲル・デ・ウナムーノ宛の例の書簡との間にあるオルテガにとっての「沈黙」の一年間はこの二つの素材、就中後者によって、小論の設定したプログラムに従って、具体的により一般的な二肢をいかに構成するかが課題となっていたとの推測を我々に許すであろう。それはまたここで前にふれたようにスペイン伝統的な非有・有をいかなる技術構成をとることによって、とりわけドイツ的な有・非有といった *Ontologia* 肢と接合し、一般的な、*Ontologia* 回路をつくり出してゆくかといった課題にもっと具体的に翻訳され、特に過渡期をモデルに擬しつつ、カントやキェルケゴールによる可能性⁽²⁰¹⁾といった発想を利用することによって、非有と有、有と非有とを構造化図式の中に嵌合する道を探ることによって、事象批判のための一般的な尺度を先ず手にすることに努力を傾けるのである。

こうして、小論並びに書簡とはいえ、この二著作はオルテガ思想体系形成の、かかる意味にあつてのプログラミン^グを示す素材として極めて重要な意義をもっていると考えらるべきものであるといえよう。一九〇四年以後のオルテガはこのプログラムによつた、かかるプログラム具体化の作業と取り組むこととなつたのである。

かくて、オルテガは René Descartes 命題の新しい関連づけ要請の叫びである、その古典的な意味の訴えから耳を塞ぎ、カントの関連づけ方法がおかれていたユークリッド空間を特殊なものとして包み得る、より一般的な n 次元超空間に対応した関連づけに関心を向けることにはならなかつたのである。これがカントを超えようとして遂に超えることを得ず、一般を志向しながらも、現実にはいまだ特殊な思想体系をつくりあげ、スペイン民衆にとつて *uno de varios hombres ceñudos*⁽²⁰²⁾ たるに止まることのないようにと心がけながら、結果的にはモーゼたり得なかつた理由をなすものであると考えられよう。何はともあれ、オルテガは一九〇二年小論によって設定された二肢のより一般的な構成というあらぬ方向にそれ、こういった課題との取り組みに従事するに至るのであり、こういった状況についての証

言がまた一九〇四年一月六日付のミゲル・デ・ウナムーノに宛てた書簡によって行われているといえよう。次に、また稿を改めて、一九〇四年での諸論稿をとりあげ、ここで示したところの論証を行いたいと思うのである。

注

一 はじめに

(1) 例えば横越英一「政治学体系を見よ」。

(2) 一九八三年 José Ortega y Gasset 生誕百年祭を記念して海外銀行財団の援助によって十二巻に亘る Obras completas の公刊を見た。この第一巻の扉に ésta edición, en doce volúmenes, de las Obras Completas de José Ortega y Gasset, publicada al conmemorarse el centenario del nacimiento del autor, se imprime con la colaboración de la Fundación Banco Exterior の primera edición en Alianza Editorial: 1983 と註やつづき⁹⁾ として El País 紙 martes 23 de agosto de 1983 との página 27 や el Consejo de Administración de Promotora de Informaciones, Sociedad Anónima (PRISA) は el centenario del nacimiento de José Ortega y Gasset (原文は de su nacimiento) を記念して el Premio de Periodismo José Ortega y Gasset を設けることを一九八三・五・一〇の総会で決定し一九八四年度に關して入選者に百万ペセタを贈るなど六項目に及ぶ応募要綱を發表し、その他記念講演も行われる旨報している。全集公刊もその一環であった。なお José Ortega y Gasset は 1883.5.9 Madrid で生れている。

(3) 拙著大衆と独裁—ニココロ・マキアヴェッリ思想の原画分析参照 特に結章第四節第五節(二二—二四頁、一五頁、二三—二四頁、二五—二六頁、二七—二八頁、二九—三〇頁)を見よ。とりわけヨーロッパ近世ルネ・デカルトに始まる構造学的志向の二十世紀的表出たる一般理論発想については数多くのものを挙げ得るが、中では J. M. Keynes The general theory of employment, interest and money, David Easton A framework for political analysis (The university of Chicago Press Phoenix Edition 1979) p. 1, l. 4 での the construction of general political theory としての参照 José Ortega y Gasset もまたこうだった全般的風潮をうけて構造学的志向の

一般理論的実現をめざすのであって、これはやがて行文で明らかにせられよう。オルテガの yo は yo と circunstancia であるという基礎命題は René Descartes の人口に膾炙してゐる Cogito ergo sum のオルテガ風のフレンジであつて、これを駆使して、彼のその後の思想体系が形づくられてゐた。その際見落してならぬのは Martin Heidegger の *Ontologie* とは対蹠的に *wohnen* をめづつて、つまりは住み得る空間をもたぬ宇宙遊星的な遍在性をめぐるであつて、これこそオルテガ *ontologia* の特色をなすものじやないか。この点は例えば *Pasado y porvenir para el hombre actual* 所収論稿参照。

(4) *Obras Completas de José Ortega y Gasset* tomo I (コト O. C. t. 1 に略記する) p. 311ff.

(5) この点については José Luis Abellán, *El Erazmismo español* (colección Austral 版 n.º 1642 Espasa-Calpe 1982) p. 11 に引く序文を草した José Luis Gómez Martínez と Ortega y Gasset : conciencia de la circunstancia なる章節で *Yo soy yo y mi circunstancia*, y si no la salvo a ella no me salvo yo, を引用してゐる (O. C. T. 1 p. 322 L. 22~23, なる Martínez の *Meditaciones del Quijote* Ideas sobre la novela, Madrid, Espasa-Calpe 1964 p. 30 に引く) 前掲書 p. 11 nota 3)

(6) 詳細は O. C. t. 1 p. 577~p. 578 Índice に掲げられつゝの Artículos (1902~1913) の内容参照のこと。

(7) O. C. t. 1 p. 578 Índice 参照。

(8) 書簡については la colección *El Arquero* Nota preliminar で編者の Paulino Garagorri が始めて載せたと記している通り、O. C. には収録されてはいない。従つて差し当りて抄録でしかない上記コレクションの四三 *Epistolario* による以外にはない。これに基づいて本稿では一九〇四・一・六の carta のみをとりあげるわけである。

(9) José Ortega y Gasset は 1883. 5. 9 Madrid におつて著名な新聞記者ホセ・オルテガ・ムニョーリヤを父、*El Imparcial* 紙創刊者の娘ドロレス・ガセー・イ・チンチーリヤを母として生れた。彼が衆目を集めたのはキホーテの省察であり、その *“lector”* に草したのは一九一四・七満三十一歳の時である。(中央公論 世界の名著 マンハイム・オルテガ年譜 五五一ページ)

また、ニコロ・マキアヴェッリは一四六九・五・三法曹家ベルナルド・ディ・ニコロ・マキアヴェッリを父、バルトロメアを母にしてフイレンツェに生れ(西村貞二 マキアヴェッリ その思想と人間像 一七ページ、一〇一―一行)一四九八・六・二九歳の時ピエロ・ソデリーニ治下のフイレンツェ共和国政府に入った。(西村 前掲書 一二二ページ 拙著 大

衆と独裁(三ページ)従って、正確にいうとニコロ・マキアヴェッリの著述活動はこの時から始まり、その追放後主著ともいうべきものを草したのであり、その点三〇歳で主要著作を世に出したオルテガと似たものがあると見られるのでかく断じたのである。

- (10) 中公 年譜 p. 551 Francisco Navarro Ledesma 宛て第一書翰の日付が, Leipzig 7. Marzo, 1905 となっているのに着目のこと。

- (11) この根拠については、もっと後の論文で明らかにされるであろう。従って今のところは全くの仮説といつてよいであろう。

- (12) O. C. t. 1 p. 18 Vida Nueva 1 de diciembre de 1902

—

- (1) O. C. t. 1 p. 18 前掲一注(12)

- (2) O. C. t. 1 p. 13~p. 18 文節の分け方はどこまでを一文とみるかによって差がある。だが、私の数え方では一三二である。また大きく三つの段落に * * * で分けられていて、その第一が p. 13~p. 15 (par. 1~par. 63) 第二が p. 15~p. 17 (par. 64~par. 104) 第三が p. 17~p. 18 (par. 105~par. 132) である。

- (3) *la caza de la verdad* の原文中に用いられている *caza* という語はオルテガの好むところであり、多用されているものの一つである。例えば *La caza y toros* といった著作もある程である。ここには動くものへ動いて迫るといった実存交渉の動態的共在性との関わり合いがあるように思われ、多分に示唆的である。

- (4) O. C. t. 1 par. 1 ただ、ここにある *un pobre hombre* は注目すべき表現であろう。つまり、*metafísica* に興味をもち、そういった *certeza* を追求めてゆくことは五感で触知し得る(と信じて)も、その所与的被動的使用といった方がより正確であろう(形而下学的領域を超え、認識の範囲を拡大して、実存のより具体的な論理化をはかることに他ならない)であって、文字通り一部しか姿をみせぬ氷山に挑むのと同然だからである。

だが、そういった作業を等閑視することはできず、どうしても取り組まざるを得ぬところに主観的な悲壮性と客観的に見ての力量不足がついてまわり、オルテガのいう *tragi-comico* 的な志向にあっての *pobreza*、そして結果的には小児病的な萎縮を呈するところに見られる *pobreza* が生れ、この拡大をめざす上での志向の *pobreza* が働くのであって *la caza de*

la verdad じまりは la obra metafísica に従事する者はうういした pobreza を帶有せざるを得ぬのである。そこはただ独りて、車をまわす ratén 宛らの姿があるのであって、こういした表現は同じ業に励む友への共感、更には萎縮した友の哀れさ、またその克服を意図する自分の姿に対する自嘲を籠めたものとなっていると見得るからである。彼には(例えば naufrago といつた)彼が好んで用いる海洋との関連をもつた、言葉に窺えるように一語が海の深さにも似た立体共在性をもち、実に多層的な意味賦与を行なっているのであって、これもその一つであると考えられよう。

(5) 既にはじめにでも用いたが、煩を避けるため、不正確ではあるが、このように単にオルテガとよぶことにしたい。

(6) O. C. t. 1 par. 2

(7) O. C. t. 1 par. 7

(8) ①G delicioso ② Maria Moliner Diccionario del uso del español A-G p. 882 ③uyas ④muy agradable ⑤se aplica a personas, particularmente a mujeres con el significado de encantador ⑥gracioso o regocijante とないつじや。うじは①に従つて極めて楽しいこと。

(9) O. C. t. 1 par. 8 la imparcialidad de la critica? par. 10 su creencia en la imparcialidad じ明白である。

(10) O. C. t. 1 par. 8, 11 Es un hombre que se alimenta de carnes indudables 行文では若干変えた。そしてこれはまた René Descartes の Discours de la méthode の発想と同じで本来はこういつた、深く深く疑えぬものを無限接近の形で求めるべきだといつた考えが底に潜んでいるといえよう。

(11) O. C. t. 1 par. 12

(12) O. C. t. 1 par. 15, 14 ¿Qué es la imparcialidad? と自問しつゝ、その特長をここに見出すことになる。(par. 15) これは対象の客観化・論理化的方法が具有すべき条件である。こはまたオルテガが一九〇五年政府給費生として留学したドイツの状況と照応する。そこでは自然科学と社会科学についての科学論がとりあげられていた。これは後述4の行文で扱うことになろう。

(13) O. C. t. 1 par. 17 clavaren la frente de las cosas y de los hechos un punzón blanco o un punzón negro; arrastrarlos al lado de lo malo o al lado de lo bueno にあふうじ、主体じまり criticar する人の行為であるとの指摘を行なつて、これより par. 19 が導出されるのである。

- (14) O. C. t. 1 par. 20, 21, 22, 23 こういった関連についての一般的図式提示に触れている。
- (15) だから、後掲の注(17)とも関連をもつことになるが、未知の領域を残したままの *imparcialidad* は絵空事であり、あくまでもそれに無限に近接し、出来得る限り近視的な独断による酔い、つまりクロロホルムをかいた状況の脱却を図るべきなのである。
- (16) 鈴木真彦、釜江常好 素粒子の世界(岩波新書)一ページ。
- (17) この共在関連をたち切って不具畸型化してしまつて(だからオルテガはこういった共在関連の復元を試みる。このために自らを *ortopedista* とよぶのであるが、またそれだけであつたところに後述するように彼の限界もみられることになるのである)対象のみに限局し、それと *pareja* をなす他肢たる観る主体を捉えず、放置してしまうのも対象が関わりの中にあつて *pareja* をなすことを全く忘却して観る己れのみにかかずらわつて観られるもののあることを念頭におかぬ独り芝居に似た視野狭窄も、共に *perspectiva* を欠くものとして偏見をつくり出すことになるのである。偏見とは文字通り、こういった共在構図の一項のみに偏ることから生れるものであり、共在での他項を放置する知的怠慢、小児病的萎縮の所産なのである。また、後述することくオルテガは海になぞらえ、真珠とりの潜水夫の例を引くが、これは既に注(4)で触れたように共在を立体共在として三次元的にとらえようとする意図を物語るものであるが、このn次元化までには進まないものであつて、そこに彼の限界も有したのである。
- (18) この共在を生そのものが有ち、その相互の関わり合いを生る *lucha* を解する点については O. C. t. 1 par. 33 *¿creen ustedes que la vida se deja taladrar y arrastrar sin lucha?* の裏が示しており、これがオルテガの *la razón vital* 構想の基底にあるものである。
- (19) O. C. t. 1 par. 26
- (20) O. C. t. 1 par. 29 の「しか、ないという表現は par. 30 nada más と対応するものである」。
- (21) O. C. t. 1 par. 24 現代版としたのは O. par. 25 *¿Quién se ocupa hoy de los Troyanos fuertes y de los Griegos bien armados?* の「hoy」によるのである。なおユニーについてはフランス文学案内、西川長夫フランスの近代とボナパルティスム参照。
- (22) O. C. t. 1 par. 33 をうけつゝの *crítica viva* なる O. par. 34, par. 35 にある *lucha* の所産なのである。それは

既に注(1)~(3)でも触れたように Martin Heidegger とは異なつて *essere* そのものが有らしめぬのに対して生はこれ有らしめるための *luchar* といったオルテガの考えを産むに至らしめるのである。

- (23) O. C. t. 1 par. 32 la crítica que discierne entre cosas que *viven* 主客共在構図にあつての一項切り捨て乃至放置はこういった生の構造的作動をフレイバート化してしまい、いわば無機物と関わる *crítica muerta* であるところなのであつて、これが par. 31なのである。

- (24) O. C. t. 1 par. 34, 35

- (25) O. C. t. 1 par. 36, 37での反問がここで欠落したものは何であるかの問いとなつている。こうして *imparcialidad* の名の下で実際に実現されてゐるのは *impersonalidad* (par. 38)であり、それは明らかに自分自身の外に出ること、つまりは *si misma* の切り捨て、消去であつて *hacer una escapada de la vida*, Erich Fromm の *an escape from freedom* と対応した生よりの逃走に他ならぬのである。

- (26) 遠山 啓 数学入門 下(岩波新書)参照。

- (27) O. C. t. 1 par. 43 cada individuo es la suma de elementos comunes y elementos diferenciadores によつて二種類の系列項の共在性、そういった主・客の共在を主体内に平行移動させることによる構造性の示唆、*mar*への比喻でも明らかにように立体的な、三次元排列を考えるのである。(1904.1.6 Miguel de Unamuno宛て書翰にある *ideas* の *pezes*への譬え参照、これは3、でも言及する)だが、後述するように関連づけでの曲面、*n*次元空間への対応を欠いたために結局は平面化してしまうのである。

- (28) O. C. t. 1 par. 45 *no alejar de sí mismo esos elementos diferenciadores que son la personalidad y* 明白に i) 脱個性化が行われ (ii) 非人称化の見られることと言及してゐる。なぜなら par. 44にいう通り、これらの *elementos diferenciadores alejados* *no hacen de un individuo tal individuo* だからである。では何を名として、こういった手続がとられるのか。そこで不偏性その支持価値としての *ser justo, justicia* (par. 40, 41, 42)が登場してくるのである。つまり、これらを名として二項共在の非構造化がはかられるに至るとみるのである。確かに不偏であり、また *justo* であることは論理にとって不可欠であり、それが *dióla* 性を脱却させるものであるといえよう。だが、それはかかる二項共在所与に忠実であり、これに近似したものでなければならぬのである。しかしながら、今の不偏性、正義は生きたものではない旨を

par. 47 y un gran cuento chino 比 par. 48 y Abandone el hombre lo que hace de él tal hombre y pasata instantáneamente a ser el homo と述べてその抽象性を帯び事実上 la cosa muerta であることを示唆するのである。つまり正義とは par. 49 y un pájaro sombrío de Santo Tomás また Lemuiano distinguido である vida を salirse de la vida (par. 53) に見えたる un error de perspectiva (par. 52) に他ならず、動物園の園によって軽くあしらわれるにすぎぬものである (par. 51) とするのである。

とはいえ、par. 43 が示すように elementos には comunes と diferenciadores とがあり、para ser justo には前者に傾斜するのがまた当然といえるのであって、構造的の理論化は、ここで両立共在と牽連して一般と特殊をどう扱うかといったアポリアとの対決を予想せねばならぬ。これは、従来の立場にある先入主を克服してゆくという、まさに革命的な転換を要請する並々ならぬ課題であることに注意せねばならぬ。

(29) 周知のようにオルテガはスペインの la generación del Noventa y Ocho に属する一人である。彼の思想展開の重要な契機はいわゆる九八年の危機なのである。

そして、彼はここにその答えを見出したわけである。後述するようにスペインはこの年米西戦争によってキューバとフィリピンを失った。領土がイベリア半島とその周縁に局限されるに至ったのである。

この疆域的萎縮の因は何なのか、これが九八年世代共通の課題であった。オルテガはこの自己内回路のスペイン的な二重閉鎖にその答えを見出した。カルロス三世以後の外国思想の摂取がなぜ生産的ではないのか、オルテガは領土的縮小と思维の生産性との関数的に捉えたのである。経済的生産性は単なる技術といったものに矮小化さるべきではなく、まさにその思考図式のもつ生産性と深く関わっているのである。この点をオルテガは看破した。彼は思维にみられる非生産性こそが、今当面しているような一連の危機を祖国スペインに生ぜしめたとみるのである。そして思维の生産性は二項共在構造的の論理化、これによるまさしく人をとっての所与であるものをできるだけ忠実に近似値構成を行なう時保証されてくるとみるのである。哲学史はこれも教えていると考えたのである。

ヨーロッパの先進国と雖も未だにこういった構成には成功していない。例えばフランスのテーヌ、更にはイギリス経験批判論も主体定立で被動的であるのが、その端的な証拠である。これがまた、人の課題がこの共在構図論理化を哲学史という海の底にある真珠たらしめるに至った要因の一つであることになる。問題はこの点の救済である。ヨーロッパ先進国の思

考図式を撰取せんとする時の主体性とはこれなのである。ヨーロッパが果さんとして果せないでいるこの課題をとりあげ、この補充に挑戦することであり、この創造的撰取こそが望ましいものであった。ところがスペインはこうした問題と取り組まないで、ただ徒らに不完全なものを祖型と奉ってその模倣に終始したのである。だから、ここでスペインは真の思想課題に対して二重の背反を行ったと言えよう。私が二重といったのは、まさにこの意味であり、オルテガまたかかる機序を正確に捉えていたと考えてよからう。つまり、既に不十分であることで、かかる課題に対して背反を犯しているイギリスやフランスのものを祖型として status quo のままに撰受し、これに自分を合わせたのである。このプロクルステスのベッドと同じ手法、これがスペイン思维の自己内回路の二重閉鎖ともいうべき状況をもたらし、萎縮させたのである。スペインの思维が生産性をもち得なかったのも当然だったといえよう。

より具体的な人間把握例えば par. 48 で述べられているような el homo より el hombre への転換はこの萎縮克服の第一歩でもあった。それは主体内への着目であり、かかる意味における自己内回路の開鑿であった。そしてここで明らかにかかる主客の主回復を図る点で構造性を見据えているのである。そこでこの論理化が不十分のままに放置されていた理由に注目するに至り、こういった el homo より el hombre への転換を九八年世代の先蹤たる Miguel de Unamuno より学びながら (Miguel de Unamuno : Del sentimiento trágico de la vida Selección Austral I p. 25 L. 1-10 El hombre de carne y hueso ……以下にある homo, el hombre の用語参照) オルテガがこの世代の第二段階と定位されるように、これを継承発展させたのである。これまでの人々はこの構造性に気づいてはいるが、その現像定着に必ずしも成功していないところに批判を施し、この構造性の自己内論理定着化と取り組むことになり、特にイマヌエル・カントより更に一步をこういった作業で踏み出さんとするのである。そこには全く新しい脱伝統をねらう意欲が有しているのであって、この志向が後述するように関連づけの面でこういった「伝統」を脱却し得なかったため、曲折を辿りつつ、既に引用した(前掲注(5)参照) yo は yo y mi circunstancia とのテーゼを定立することとなるのである。

- (30) O. C. t. I par. 54 において、これまでオルテガによって展開されてきた正当性に関する結論つまりその極限値は tal vez no se logre ser justo として認めないわけにゆかぬことになる。だが、crítica の中に批評者自身の肯定や否定、嫌悪とか共感といった論理化されぬ非論理的なものをもち込むのは避けねばならぬといった一応は尤もな主張によって par. 55 で impersonal たれといった要請に結局のところは帰着するに至るであろうと見るのである。これは par. 54 diría mi amigo

いつ muy を示す grado superlativo absoluto だが、⁶⁷ bonísimo 形は後者に属するものなのである。

- (39) O. C. t. 1 par. 60 だが、⁶⁸ ⁶⁹ ⁷⁰ ⁷¹ ⁷² ⁷³ ⁷⁴ ⁷⁵ ⁷⁶ ⁷⁷ ⁷⁸ ⁷⁹ ⁸⁰ ⁸¹ ⁸² ⁸³ ⁸⁴ ⁸⁵ ⁸⁶ ⁸⁷ ⁸⁸ ⁸⁹ ⁹⁰ ⁹¹ ⁹² ⁹³ ⁹⁴ ⁹⁵ ⁹⁶ ⁹⁷ ⁹⁸ ⁹⁹ ¹⁰⁰ ¹⁰¹ ¹⁰² ¹⁰³ ¹⁰⁴ ¹⁰⁵ ¹⁰⁶ ¹⁰⁷ ¹⁰⁸ ¹⁰⁹ ¹¹⁰ ¹¹¹ ¹¹² ¹¹³ ¹¹⁴ ¹¹⁵ ¹¹⁶ ¹¹⁷ ¹¹⁸ ¹¹⁹ ¹²⁰ ¹²¹ ¹²² ¹²³ ¹²⁴ ¹²⁵ ¹²⁶ ¹²⁷ ¹²⁸ ¹²⁹ ¹³⁰ ¹³¹ ¹³² ¹³³ ¹³⁴ ¹³⁵ ¹³⁶ ¹³⁷ ¹³⁸ ¹³⁹ ¹⁴⁰ ¹⁴¹ ¹⁴² ¹⁴³ ¹⁴⁴ ¹⁴⁵ ¹⁴⁶ ¹⁴⁷ ¹⁴⁸ ¹⁴⁹ ¹⁵⁰ ¹⁵¹ ¹⁵² ¹⁵³ ¹⁵⁴ ¹⁵⁵ ¹⁵⁶ ¹⁵⁷ ¹⁵⁸ ¹⁵⁹ ¹⁶⁰ ¹⁶¹ ¹⁶² ¹⁶³ ¹⁶⁴ ¹⁶⁵ ¹⁶⁶ ¹⁶⁷ ¹⁶⁸ ¹⁶⁹ ¹⁷⁰ ¹⁷¹ ¹⁷² ¹⁷³ ¹⁷⁴ ¹⁷⁵ ¹⁷⁶ ¹⁷⁷ ¹⁷⁸ ¹⁷⁹ ¹⁸⁰ ¹⁸¹ ¹⁸² ¹⁸³ ¹⁸⁴ ¹⁸⁵ ¹⁸⁶ ¹⁸⁷ ¹⁸⁸ ¹⁸⁹ ¹⁹⁰ ¹⁹¹ ¹⁹² ¹⁹³ ¹⁹⁴ ¹⁹⁵ ¹⁹⁶ ¹⁹⁷ ¹⁹⁸ ¹⁹⁹ ²⁰⁰ ²⁰¹ ²⁰² ²⁰³ ²⁰⁴ ²⁰⁵ ²⁰⁶ ²⁰⁷ ²⁰⁸ ²⁰⁹ ²¹⁰ ²¹¹ ²¹² ²¹³ ²¹⁴ ²¹⁵ ²¹⁶ ²¹⁷ ²¹⁸ ²¹⁹ ²²⁰ ²²¹ ²²² ²²³ ²²⁴ ²²⁵ ²²⁶ ²²⁷ ²²⁸ ²²⁹ ²³⁰ ²³¹ ²³² ²³³ ²³⁴ ²³⁵ ²³⁶ ²³⁷ ²³⁸ ²³⁹ ²⁴⁰ ²⁴¹ ²⁴² ²⁴³ ²⁴⁴ ²⁴⁵ ²⁴⁶ ²⁴⁷ ²⁴⁸ ²⁴⁹ ²⁵⁰ ²⁵¹ ²⁵² ²⁵³ ²⁵⁴ ²⁵⁵ ²⁵⁶ ²⁵⁷ ²⁵⁸ ²⁵⁹ ²⁶⁰ ²⁶¹ ²⁶² ²⁶³ ²⁶⁴ ²⁶⁵ ²⁶⁶ ²⁶⁷ ²⁶⁸ ²⁶⁹ ²⁷⁰ ²⁷¹ ²⁷² ²⁷³ ²⁷⁴ ²⁷⁵ ²⁷⁶ ²⁷⁷ ²⁷⁸ ²⁷⁹ ²⁸⁰ ²⁸¹ ²⁸² ²⁸³ ²⁸⁴ ²⁸⁵ ²⁸⁶ ²⁸⁷ ²⁸⁸ ²⁸⁹ ²⁹⁰ ²⁹¹ ²⁹² ²⁹³ ²⁹⁴ ²⁹⁵ ²⁹⁶ ²⁹⁷ ²⁹⁸ ²⁹⁹ ³⁰⁰ ³⁰¹ ³⁰² ³⁰³ ³⁰⁴ ³⁰⁵ ³⁰⁶ ³⁰⁷ ³⁰⁸ ³⁰⁹ ³¹⁰ ³¹¹ ³¹² ³¹³ ³¹⁴ ³¹⁵ ³¹⁶ ³¹⁷ ³¹⁸ ³¹⁹ ³²⁰ ³²¹ ³²² ³²³ ³²⁴ ³²⁵ ³²⁶ ³²⁷ ³²⁸ ³²⁹ ³³⁰ ³³¹ ³³² ³³³ ³³⁴ ³³⁵ ³³⁶ ³³⁷ ³³⁸ ³³⁹ ³⁴⁰ ³⁴¹ ³⁴² ³⁴³ ³⁴⁴ ³⁴⁵ ³⁴⁶ ³⁴⁷ ³⁴⁸ ³⁴⁹ ³⁵⁰ ³⁵¹ ³⁵² ³⁵³ ³⁵⁴ ³⁵⁵ ³⁵⁶ ³⁵⁷ ³⁵⁸ ³⁵⁹ ³⁶⁰ ³⁶¹ ³⁶² ³⁶³ ³⁶⁴ ³⁶⁵ ³⁶⁶ ³⁶⁷ ³⁶⁸ ³⁶⁹ ³⁷⁰ ³⁷¹ ³⁷² ³⁷³ ³⁷⁴ ³⁷⁵ ³⁷⁶ ³⁷⁷ ³⁷⁸ ³⁷⁹ ³⁸⁰ ³⁸¹ ³⁸² ³⁸³ ³⁸⁴ ³⁸⁵ ³⁸⁶ ³⁸⁷ ³⁸⁸ ³⁸⁹ ³⁹⁰ ³⁹¹ ³⁹² ³⁹³ ³⁹⁴ ³⁹⁵ ³⁹⁶ ³⁹⁷ ³⁹⁸ ³⁹⁹ ⁴⁰⁰ ⁴⁰¹ ⁴⁰² ⁴⁰³ ⁴⁰⁴ ⁴⁰⁵ ⁴⁰⁶ ⁴⁰⁷ ⁴⁰⁸ ⁴⁰⁹ ⁴¹⁰ ⁴¹¹ ⁴¹² ⁴¹³ ⁴¹⁴ ⁴¹⁵ ⁴¹⁶ ⁴¹⁷ ⁴¹⁸ ⁴¹⁹ ⁴²⁰ ⁴²¹ ⁴²² ⁴²³ ⁴²⁴ ⁴²⁵ ⁴²⁶ ⁴²⁷ ⁴²⁸ ⁴²⁹ ⁴³⁰ ⁴³¹ ⁴³² ⁴³³ ⁴³⁴ ⁴³⁵ ⁴³⁶ ⁴³⁷ ⁴³⁸ ⁴³⁹ ⁴⁴⁰ ⁴⁴¹ ⁴⁴² ⁴⁴³ ⁴⁴⁴ ⁴⁴⁵ ⁴⁴⁶ ⁴⁴⁷ ⁴⁴⁸ ⁴⁴⁹ ⁴⁵⁰ ⁴⁵¹ ⁴⁵² ⁴⁵³ ⁴⁵⁴ ⁴⁵⁵ ⁴⁵⁶ ⁴⁵⁷ ⁴⁵⁸ ⁴⁵⁹ ⁴⁶⁰ ⁴⁶¹ ⁴⁶² ⁴⁶³ ⁴⁶⁴ ⁴⁶⁵ ⁴⁶⁶ ⁴⁶⁷ ⁴⁶⁸ ⁴⁶⁹ ⁴⁷⁰ ⁴⁷¹ ⁴⁷² ⁴⁷³ ⁴⁷⁴ ⁴⁷⁵ ⁴⁷⁶ ⁴⁷⁷ ⁴⁷⁸ ⁴⁷⁹ ⁴⁸⁰ ⁴⁸¹ ⁴⁸² ⁴⁸³ ⁴⁸⁴ ⁴⁸⁵ ⁴⁸⁶ ⁴⁸⁷ ⁴⁸⁸ ⁴⁸⁹ ⁴⁹⁰ ⁴⁹¹ ⁴⁹² ⁴⁹³ ⁴⁹⁴ ⁴⁹⁵ ⁴⁹⁶ ⁴⁹⁷ ⁴⁹⁸ ⁴⁹⁹ ⁵⁰⁰ ⁵⁰¹ ⁵⁰² ⁵⁰³ ⁵⁰⁴ ⁵⁰⁵ ⁵⁰⁶ ⁵⁰⁷ ⁵⁰⁸ ⁵⁰⁹ ⁵¹⁰ ⁵¹¹ ⁵¹² ⁵¹³ ⁵¹⁴ ⁵¹⁵ ⁵¹⁶ ⁵¹⁷ ⁵¹⁸ ⁵¹⁹ ⁵²⁰ ⁵²¹ ⁵²² ⁵²³ ⁵²⁴ ⁵²⁵ ⁵²⁶ ⁵²⁷ ⁵²⁸ ⁵²⁹ ⁵³⁰ ⁵³¹ ⁵³² ⁵³³ ⁵³⁴ ⁵³⁵ ⁵³⁶ ⁵³⁷ ⁵³⁸ ⁵³⁹ ⁵⁴⁰ ⁵⁴¹ ⁵⁴² ⁵⁴³ ⁵⁴⁴ ⁵⁴⁵ ⁵⁴⁶ ⁵⁴⁷ ⁵⁴⁸ ⁵⁴⁹ ⁵⁵⁰ ⁵⁵¹ ⁵⁵² ⁵⁵³ ⁵⁵⁴ ⁵⁵⁵ ⁵⁵⁶ ⁵⁵⁷ ⁵⁵⁸ ⁵⁵⁹ ⁵⁶⁰ ⁵⁶¹ ⁵⁶² ⁵⁶³ ⁵⁶⁴ ⁵⁶⁵ ⁵⁶⁶ ⁵⁶⁷ ⁵⁶⁸ ⁵⁶⁹ ⁵⁷⁰ ⁵⁷¹ ⁵⁷² ⁵⁷³ ⁵⁷⁴ ⁵⁷⁵ ⁵⁷⁶ ⁵⁷⁷ ⁵⁷⁸ ⁵⁷⁹ ⁵⁸⁰ ⁵⁸¹ ⁵⁸² ⁵⁸³ ⁵⁸⁴ ⁵⁸⁵ ⁵⁸⁶ ⁵⁸⁷ ⁵⁸⁸ ⁵⁸⁹ ⁵⁹⁰ ⁵⁹¹ ⁵⁹² ⁵⁹³ ⁵⁹⁴ ⁵⁹⁵ ⁵⁹⁶ ⁵⁹⁷ ⁵⁹⁸ ⁵⁹⁹ ⁶⁰⁰ ⁶⁰¹ ⁶⁰² ⁶⁰³ ⁶⁰⁴ ⁶⁰⁵ ⁶⁰⁶ ⁶⁰⁷ ⁶⁰⁸ ⁶⁰⁹ ⁶¹⁰ ⁶¹¹ ⁶¹² ⁶¹³ ⁶¹⁴ ⁶¹⁵ ⁶¹⁶ ⁶¹⁷ ⁶¹⁸ ⁶¹⁹ ⁶²⁰ ⁶²¹ ⁶²² ⁶²³ ⁶²⁴ ⁶²⁵ ⁶²⁶ ⁶²⁷ ⁶²⁸ ⁶²⁹ ⁶³⁰ ⁶³¹ ⁶³² ⁶³³ ⁶³⁴ ⁶³⁵ ⁶³⁶ ⁶³⁷ ⁶³⁸ ⁶³⁹ ⁶⁴⁰ ⁶⁴¹ ⁶⁴² ⁶⁴³ ⁶⁴⁴ ⁶⁴⁵ ⁶⁴⁶ ⁶⁴⁷ ⁶⁴⁸ ⁶⁴⁹ ⁶⁵⁰ ⁶⁵¹ ⁶⁵² ⁶⁵³ ⁶⁵⁴ ⁶⁵⁵ ⁶⁵⁶ ⁶⁵⁷ ⁶⁵⁸ ⁶⁵⁹ ⁶⁶⁰ ⁶⁶¹ ⁶⁶² ⁶⁶³ ⁶⁶⁴ ⁶⁶⁵ ⁶⁶⁶ ⁶⁶⁷ ⁶⁶⁸ ⁶⁶⁹ ⁶⁷⁰ ⁶⁷¹ ⁶⁷² ⁶⁷³ ⁶⁷⁴ ⁶⁷⁵ ⁶⁷⁶ ⁶⁷⁷ ⁶⁷⁸ ⁶⁷⁹ ⁶⁸⁰ ⁶⁸¹ ⁶⁸² ⁶⁸³ ⁶⁸⁴ ⁶⁸⁵ ⁶⁸⁶ ⁶⁸⁷ ⁶⁸⁸ ⁶⁸⁹ ⁶⁹⁰ ⁶⁹¹ ⁶⁹² ⁶⁹³ ⁶⁹⁴ ⁶⁹⁵ ⁶⁹⁶ ⁶⁹⁷ ⁶⁹⁸ ⁶⁹⁹ ⁷⁰⁰ ⁷⁰¹ ⁷⁰² ⁷⁰³ ⁷⁰⁴ ⁷⁰⁵ ⁷⁰⁶ ⁷⁰⁷ ⁷⁰⁸ ⁷⁰⁹ ⁷¹⁰ ⁷¹¹ ⁷¹² ⁷¹³ ⁷¹⁴ ⁷¹⁵ ⁷¹⁶ ⁷¹⁷ ⁷¹⁸ ⁷¹⁹ ⁷²⁰ ⁷²¹ ⁷²² ⁷²³ ⁷²⁴ ⁷²⁵ ⁷²⁶ ⁷²⁷ ⁷²⁸ ⁷²⁹ ⁷³⁰ ⁷³¹ ⁷³² ⁷³³ ⁷³⁴ ⁷³⁵ ⁷³⁶ ⁷³⁷ ⁷³⁸ ⁷³⁹ ⁷⁴⁰ ⁷⁴¹ ⁷⁴² ⁷⁴³ ⁷⁴⁴ ⁷⁴⁵ ⁷⁴⁶ ⁷⁴⁷ ⁷⁴⁸ ⁷⁴⁹ ⁷⁵⁰ ⁷⁵¹ ⁷⁵² ⁷⁵³ ⁷⁵⁴ ⁷⁵⁵ ⁷⁵⁶ ⁷⁵⁷ ⁷⁵⁸ ⁷⁵⁹ ⁷⁶⁰ ⁷⁶¹ ⁷⁶² ⁷⁶³ ⁷⁶⁴ ⁷⁶⁵ ⁷⁶⁶ ⁷⁶⁷ ⁷⁶⁸ ⁷⁶⁹ ⁷⁷⁰ ⁷⁷¹ ⁷⁷² ⁷⁷³ ⁷⁷⁴ ⁷⁷⁵ ⁷⁷⁶ ⁷⁷⁷ ⁷⁷⁸ ⁷⁷⁹ ⁷⁸⁰ ⁷⁸¹ ⁷⁸² ⁷⁸³ ⁷⁸⁴ ⁷⁸⁵ ⁷⁸⁶ ⁷⁸⁷ ⁷⁸⁸ ⁷⁸⁹ ⁷⁹⁰ ⁷⁹¹ ⁷⁹² ⁷⁹³ ⁷⁹⁴ ⁷⁹⁵ ⁷⁹⁶ ⁷⁹⁷ ⁷⁹⁸ ⁷⁹⁹ ⁸⁰⁰ ⁸⁰¹ ⁸⁰² ⁸⁰³ ⁸⁰⁴ ⁸⁰⁵ ⁸⁰⁶ ⁸⁰⁷ ⁸⁰⁸ ⁸⁰⁹ ⁸¹⁰ ⁸¹¹ ⁸¹² ⁸¹³ ⁸¹⁴ ⁸¹⁵ ⁸¹⁶ ⁸¹⁷ ⁸¹⁸ ⁸¹⁹ ⁸²⁰ ⁸²¹ ⁸²² ⁸²³ ⁸²⁴ ⁸²⁵ ⁸²⁶ ⁸²⁷ ⁸²⁸ ⁸²⁹ ⁸³⁰ ⁸³¹ ⁸³² ⁸³³ ⁸³⁴ ⁸³⁵ ⁸³⁶ ⁸³⁷ ⁸³⁸ ⁸³⁹ ⁸⁴⁰ ⁸⁴¹ ⁸⁴² ⁸⁴³ ⁸⁴⁴ ⁸⁴⁵ ⁸⁴⁶ ⁸⁴⁷ ⁸⁴⁸ ⁸⁴⁹ ⁸⁵⁰ ⁸⁵¹ ⁸⁵² ⁸⁵³ ⁸⁵⁴ ⁸⁵⁵ ⁸⁵⁶ ⁸⁵⁷ ⁸⁵⁸ ⁸⁵⁹ ⁸⁶⁰ ⁸⁶¹ ⁸⁶² ⁸⁶³ ⁸⁶⁴ ⁸⁶⁵ ⁸⁶⁶ ⁸⁶⁷ ⁸⁶⁸ ⁸⁶⁹ ⁸⁷⁰ ⁸⁷¹ ⁸⁷² ⁸⁷³ ⁸⁷⁴ ⁸⁷⁵ ⁸⁷⁶ ⁸⁷⁷ ⁸⁷⁸ ⁸⁷⁹ ⁸⁸⁰ ⁸⁸¹ ⁸⁸² ⁸⁸³ ⁸⁸⁴ ⁸⁸⁵ ⁸⁸⁶ ⁸⁸⁷ ⁸⁸⁸ ⁸⁸⁹ ⁸⁹⁰ ⁸⁹¹ ⁸⁹² ⁸⁹³ ⁸⁹⁴ ⁸⁹⁵ ⁸⁹⁶ ⁸⁹⁷ ⁸⁹⁸ ⁸⁹⁹ ⁹⁰⁰ ⁹⁰¹ ⁹⁰² ⁹⁰³ ⁹⁰⁴ ⁹⁰⁵ ⁹⁰⁶ ⁹⁰⁷ ⁹⁰⁸ ⁹⁰⁹ ⁹¹⁰ ⁹¹¹ ⁹¹² ⁹¹³ ⁹¹⁴ ⁹¹⁵ ⁹¹⁶ ⁹¹⁷ ⁹¹⁸ ⁹¹⁹ ⁹²⁰ ⁹²¹ ⁹²² ⁹²³ ⁹²⁴ ⁹²⁵ ⁹²⁶ ⁹²⁷ ⁹²⁸ ⁹²⁹ ⁹³⁰ ⁹³¹ ⁹³² ⁹³³ ⁹³⁴ ⁹³⁵ ⁹³⁶ ⁹³⁷ ⁹³⁸ ⁹³⁹ ⁹⁴⁰ ⁹⁴¹ ⁹⁴² ⁹⁴³ ⁹⁴⁴ ⁹⁴⁵ ⁹⁴⁶ ⁹⁴⁷ ⁹⁴⁸ ⁹⁴⁹ ⁹⁵⁰ ⁹⁵¹ ⁹⁵² ⁹⁵³ ⁹⁵⁴ ⁹⁵⁵ ⁹⁵⁶ ⁹⁵⁷ ⁹⁵⁸ ⁹⁵⁹ ⁹⁶⁰ ⁹⁶¹ ⁹⁶² ⁹⁶³ ⁹⁶⁴ ⁹⁶⁵ ⁹⁶⁶ ⁹⁶⁷ ⁹⁶⁸ ⁹⁶⁹ ⁹⁷⁰ ⁹⁷¹ ⁹⁷² ⁹⁷³ ⁹⁷⁴ ⁹⁷⁵ ⁹⁷⁶ ⁹⁷⁷ ⁹⁷⁸ ⁹⁷⁹ ⁹⁸⁰ ⁹⁸¹ ⁹⁸² ⁹⁸³ ⁹⁸⁴ ⁹⁸⁵ ⁹⁸⁶ ⁹⁸⁷ ⁹⁸⁸ ⁹⁸⁹ ⁹⁹⁰ ⁹⁹¹ ⁹⁹² ⁹⁹³ ⁹⁹⁴ ⁹⁹⁵ ⁹⁹⁶ ⁹⁹⁷ ⁹⁹⁸ ⁹⁹⁹ ¹⁰⁰⁰ ¹⁰⁰¹ ¹⁰⁰² ¹⁰⁰³ ¹⁰⁰⁴ ¹⁰⁰⁵ ¹⁰⁰⁶ ¹⁰⁰⁷ ¹⁰⁰⁸ ¹⁰⁰⁹ ¹⁰¹⁰ ¹⁰¹¹ ¹⁰¹² ¹⁰¹³ ¹⁰¹⁴ ¹⁰¹⁵ ¹⁰¹⁶ ¹⁰¹⁷ ¹⁰¹⁸ ¹⁰¹⁹ ¹⁰²⁰ ¹⁰²¹ ¹⁰²² ¹⁰²³ ¹⁰²⁴ ¹⁰²⁵ ¹⁰²⁶ ¹⁰²⁷ ¹⁰²⁸ ¹⁰²⁹ ¹⁰³⁰ ¹⁰³¹ ¹⁰³² ¹⁰³³ ¹⁰³⁴ ¹⁰³⁵ ¹⁰³⁶ ¹⁰³⁷ ¹⁰³⁸ ¹⁰³⁹ ¹⁰⁴⁰ ¹⁰⁴¹ ¹⁰⁴² ¹⁰⁴³ ¹⁰⁴⁴ ¹⁰⁴⁵ ¹⁰⁴⁶ ¹⁰⁴⁷ ¹⁰⁴⁸ ¹⁰⁴⁹ ¹⁰⁵⁰ ¹⁰⁵¹ ¹⁰⁵² ¹⁰⁵³ ¹⁰⁵⁴ ¹⁰⁵⁵ ¹⁰⁵⁶ ¹⁰⁵⁷ ¹⁰⁵⁸ ¹⁰⁵⁹ ¹⁰⁶⁰ ¹⁰⁶¹ ¹⁰⁶² ¹⁰⁶³ ¹⁰⁶⁴ ¹⁰⁶⁵ ¹⁰⁶⁶ ¹⁰⁶⁷ ¹⁰⁶⁸ ¹⁰⁶⁹ ¹⁰⁷⁰ ¹⁰⁷¹ ¹⁰⁷² ¹⁰⁷³ ¹⁰⁷⁴ ¹⁰⁷⁵ ¹⁰⁷⁶ ¹⁰⁷⁷ ¹⁰⁷⁸ ¹⁰⁷⁹ ¹⁰⁸⁰ ¹⁰⁸¹ ¹⁰⁸² ¹⁰⁸³ ¹⁰⁸⁴ ¹⁰⁸⁵ ¹⁰⁸⁶ ¹⁰⁸⁷ ¹⁰⁸⁸ ¹⁰⁸⁹ ¹⁰⁹⁰ ¹⁰⁹¹ ¹⁰⁹² ¹⁰⁹³ ¹⁰⁹⁴ ¹⁰⁹⁵ ¹⁰⁹⁶ ¹⁰⁹⁷ ¹⁰⁹⁸ ¹⁰⁹⁹ ¹¹⁰⁰ ¹¹⁰¹ ¹¹⁰² ¹¹⁰³ ¹¹⁰⁴ ¹¹⁰⁵ ¹¹⁰⁶ ¹¹⁰⁷ ¹¹⁰⁸ ¹¹⁰⁹ ¹¹¹⁰ ¹¹¹¹ ¹¹¹² ¹¹¹³ ¹¹¹⁴ ¹¹¹⁵ ¹¹¹⁶ ¹¹¹⁷ ¹¹¹⁸ ¹¹¹⁹ ¹¹²⁰ ¹¹²¹ ¹¹²² ¹¹²³ ¹¹²⁴ ¹¹²⁵ ¹¹²⁶ ¹¹²⁷ ¹¹²⁸ ¹¹²⁹ ¹¹³⁰ ¹¹³¹ ¹¹³² ¹¹³³ ¹¹³⁴ ¹¹³⁵ ¹¹³⁶ ¹¹³⁷ ¹¹³⁸ ¹¹³⁹ ¹¹⁴⁰ ¹¹⁴¹ ¹¹⁴² ¹¹⁴³ ¹¹⁴⁴ ¹¹⁴⁵ ¹¹⁴⁶ ¹¹⁴⁷ ¹¹⁴⁸ ¹¹⁴⁹ ¹¹⁵⁰ ¹¹⁵¹ ¹¹⁵² ¹¹⁵³ ¹¹⁵⁴ ¹¹⁵⁵ ¹¹⁵⁶ ¹¹⁵⁷ ¹¹⁵⁸ ¹¹⁵⁹ ¹¹⁶⁰ ¹¹⁶¹ ¹¹⁶² ¹¹⁶³ ¹¹⁶⁴ ¹¹⁶⁵ ¹¹⁶⁶ ¹¹⁶⁷ ¹¹⁶⁸ ¹¹⁶⁹ ¹¹⁷⁰ ¹¹⁷¹ ¹¹⁷² ¹¹⁷³ ¹¹⁷⁴ ¹¹⁷⁵ ¹¹⁷⁶ ¹¹⁷⁷ ¹¹⁷⁸ ¹¹⁷⁹ ¹¹⁸⁰ ¹¹⁸¹ ¹¹⁸² ¹¹⁸³ ¹¹⁸⁴ ¹¹⁸⁵ ¹¹⁸⁶ ¹¹⁸⁷ ¹¹⁸⁸ ¹¹⁸⁹ ¹¹⁹⁰ ¹¹⁹¹ ¹¹⁹² ¹¹⁹³ ¹¹⁹⁴ ¹¹⁹⁵ ¹¹⁹⁶ ¹¹⁹⁷ ¹¹⁹⁸ ¹¹⁹⁹ ¹²⁰⁰ ¹²⁰¹ ¹²⁰² ¹²⁰³ ¹²⁰⁴ ¹²⁰⁵ ¹²⁰⁶ ¹²⁰⁷ ¹²⁰⁸ ¹²⁰⁹ ¹²¹⁰ ¹²¹¹ ¹²¹² ¹²¹³ ¹²¹⁴ ¹²¹⁵ ¹²¹⁶ ¹²¹⁷ ¹²¹⁸ ¹²¹⁹ ¹²²⁰ ¹²²¹ ¹²²² ¹²²³ ¹²²⁴ ¹²²⁵ ¹²²⁶ ¹²²⁷ ¹²²⁸ ¹²²⁹ ¹²³⁰ ¹²³¹ ¹²³² ¹²³³ ¹²³⁴ ¹²³⁵ ¹²³⁶ ¹²³⁷ ¹²³⁸ ¹²³⁹ ¹²⁴⁰ ¹²⁴¹ ¹²⁴² ¹²⁴³ ¹²⁴⁴ ¹²⁴⁵ ¹²⁴⁶ ¹²⁴⁷ ¹²⁴⁸ ¹²⁴⁹ ¹²⁵⁰ ¹²⁵¹ ¹²⁵² ¹²⁵³ ¹²⁵⁴ ¹²⁵⁵ ¹²⁵⁶ ¹²⁵⁷ ¹²⁵⁸ ¹²⁵⁹ ¹²⁶⁰ ¹²⁶¹ ¹²⁶² ¹²⁶³ ¹²⁶⁴ ¹²⁶⁵ ¹²⁶⁶ ¹²⁶⁷ ¹²⁶⁸ ¹²⁶⁹ ¹²⁷⁰ ¹²⁷¹ ¹²⁷² ¹²⁷³ ¹²⁷⁴ ¹²⁷⁵ ¹²⁷⁶ ¹²⁷⁷ ¹²⁷⁸ ¹²⁷⁹ ¹²⁸⁰ ¹²⁸¹ ¹²⁸² ¹²⁸³ ¹²⁸⁴ ¹²⁸⁵ ¹²⁸⁶ ¹²⁸⁷ ¹²⁸⁸ ¹²⁸⁹ ¹²⁹⁰ ¹²⁹¹ ¹²⁹² ¹²⁹³ ¹²⁹⁴ ¹²⁹⁵ ¹²⁹⁶ ¹²⁹⁷ ¹²⁹⁸ ¹²⁹⁹ ¹³⁰⁰ ¹³⁰¹ ¹³⁰² ¹³⁰³ ¹³⁰⁴ ¹³⁰⁵ ¹³⁰⁶ ¹³⁰⁷ ¹³⁰⁸ ¹³⁰⁹ ¹³¹⁰ ¹³¹¹ ¹³¹² ¹³¹³ ¹³¹⁴ ¹³¹⁵ ¹³¹⁶ ¹³¹⁷ ¹³¹⁸ ¹³¹⁹ ¹³²⁰ ¹³²¹ ¹³²² ¹³²³ ¹³²⁴ ¹³²⁵ ¹³²⁶ ¹³²⁷ ¹³²⁸ ¹³²⁹ ¹³³⁰ ¹³³¹ ¹³³² ¹³³³ ¹³³⁴ ¹³³⁵ ¹³³⁶ ¹³³⁷ ¹³³⁸ ¹³³⁹ ¹³⁴⁰ ¹³⁴¹ ¹³⁴² ¹³⁴³ ¹³⁴⁴ ¹³⁴⁵ ¹³⁴⁶ ¹³⁴⁷ ¹³⁴⁸ ¹³⁴⁹ ¹³⁵⁰ ¹³⁵¹ ¹³⁵² ¹³⁵³ ¹³⁵⁴ ¹³⁵⁵ ¹³⁵⁶ ¹³⁵⁷ ¹³⁵⁸ ¹³⁵⁹ ¹³⁶⁰ ¹³⁶¹ ¹³⁶² ¹³⁶³ ¹³⁶⁴ ¹³⁶⁵ ¹³⁶⁶ ¹³⁶⁷ ¹³⁶⁸ ¹³⁶⁹ ¹³⁷⁰ ¹³⁷¹ ¹³⁷² ¹³⁷³ ¹³⁷⁴ ¹³⁷⁵ ¹³⁷⁶ ¹³⁷⁷ ¹³⁷⁸ ¹³⁷⁹ ¹³⁸⁰ ¹³⁸¹ ¹³⁸² ¹³⁸³ ¹³⁸⁴ ¹³⁸⁵ ¹³⁸⁶ ¹³⁸⁷ ¹³⁸⁸ ¹³⁸⁹ ¹³⁹⁰

シで四つの *idolae* をあげ四四ページで *idola theatri* について説明を加える体裁をとっている。本来は原文で指摘すべきであるが、ここでは傍論なので訳にふった。

(60) O. C. t. 1 par. 79

(91) O. C. t. 1 par. 79 y aun 以下 par. 78

(62) O. C. t. 1 par. 81, 80

(63) O. C. t. 1 par. 83

(64) O. C. t. 1 par. 86 *El creador del juicio ha desaprecido misteriosamente* の *misteriosamente* と *termino* は示唆的である。とうのは一九〇四年一月六日付の Miguel de Unamuno宛の carta 以後一九〇四年にかいた *El poeta del misterio*, *El rostro maravillado* や *misticismo* をふらあげ、この *misticismo* に消極積極の両面での構造的作動との関わり合ひを見出しつづめていかなるからである。

(65) O. C. t. 1 par. 84

(66) O. C. t. 1 par. 103 以下 *El héroe el hombre a quien siguen otros hombres, fue siempre sincero, primera condición de su ser* 参照。

なぜ、この *ser* が動的なものとして、こういった構造的展開作動とみるのである。

(67) O. C. t. 1 par. 89 の *la personalidad, la voluntad de potencia* 以下注目の 以下。

(68) O. C. t. 1 par. 87 以下 *después de gran matanza de misterios* という表現によつて *misterios* を直視し、物理学の進歩と対応して人間科学の分野でも既知領域の拡大に資するような新しい *misticismo* の主張と既知のものによる不可知の切り捨てを行ないそのいわは大量虐殺で安住しようとする安易な科学主義とを対比しているようにえよう。

(69) O. C. t. 1 par. 88 以下 *par. 87* の *¿qué valor tiene una acción, cuyo autor no se presenta?* に続くのである。て、かかる通念なるものの主体に擬せられるものが、*la gente* なのである。

(70) O. C. t. 1 par. 92 以下 *Aurora* 紙より、*el hombre, homo* を引用し、par. 88 の *la gente* 以下 *にイタリック体で示している*。これはオルテガの主要著作である *El hombre y la gente* を連想させられるのである。この着想が既にこのようにところに潜んでいたことは注目してよいであらう。そしてこの *el hombre* 以下 *Miguel de Unamuno* (前掲注(29))

参照)にならって個的な、具体的なもの、しかも内にあるものをもったものを考え、ここで真に客観化するべきものは、この未知領域であり、これまで曖昧にされ、ぼかされてもきたこの個の内を *con bravura, sinceramente* にとりあげて巨視構造化し、地理上の発見にふみ出したヨーロッパ近世以後の冒険者的「伝統」を継承してゆくか、それとも未知の領域への恐怖から再び暗黒時代へ後戻りするかの二つと照応して、また *el hombre* と *la gente* の二つの人間類型が成りたちしかも前者こそ人への進化過程をそのまま踏襲するもの、後者はこの進化過程を逆にして原生動物への道を辿るものとみるのであって、さればこそ Aurora 紙の言うところをそのままに *el hombre, homo* といった *terminos* の *uso* をみせるのである。つまり *el hombre* は *homo* 化への道程であり、*la gente* は *animal primitivo* への後退と考えているのであって、このために Miguel de Unamuno が抽象とみた *homo* を取って *el hombre* と同格同義なものとして扱ったのである。

- (71) O. C. t. 1 par. 93 及び par. 88 で示した *la gente* がその存立の *razón* を求めるに至ったことが *un hecho* であると言明する。そしてここでオルテガは *Erich Fromm* との接点を有していると推定して差しつかえないであろう。というのは *Erich Fromm* は一九四一年 *the Escape from Freedom* を公刊しているからである。時機的にみればオルテガがこの論稿の筆をとった時よりおよそ四〇年も遅いが、着想の上からみると多くの類似点が見出される。*Fromm* は明らかに近代人が無力感と孤独感という耐え難い状態から逃れるには積極的自由へ進む自由への「回路」(ここでいう個内空洞の構造化による充填と対応する方向である)と後退して自由を棄てて、このいわば「から」への反転によって個人と世界の間を生じた分裂、その非構造化状況の消滅をはかる岐路にたたせられ、この後者の回路をとることにファシズムへの道があったと述べているからである。(中公世界の名著 ユング・フロム 解説 六五ページ)

オルテガはここで個内への回路閉鎖に努める構造化志向上に *el hombre* を、その回路閉鎖による反転、これによる非構造的表現現実の虐殺方向に *la gente* を位置づけるのであって、*Erich Fromm* との奇妙な暗合がそこにみられるのである。オルテガの独裁への嫌悪もここに胚胎していたといえよう。しかも *la gente* が恰も *célula cancerosa* が増殖してゆくように、自らの展開メカニズムを求め、自己存立を正当化せんとするところ、自由からの逃走がファシズムにその出路を求め、これを形成させてゆくところにこそ現代社会の倒錯したヒステリー症状暴発状況を垣間見るのである。

- (72) O. C. t. 1 par. 88 *la gente necesita* という表現特にこの *necesita* にその強迫性がよく示されているともみることができよう。(中公前掲六五ページ)この逃避の方法は強迫的な性格を帯びてくるとの叙述(参照)因みにこの *necesitar* は *Maria*

Moliner H-Z. p. 497 Obligar a alguien a ejecutar una cosa と説明されており、何が何でもそうせざるを得ぬといった自己の中で apuro に即応した Zwang と考え得るものを指している。

- (73) ① agarrarse による表現をオルテカ自身筆にしてはいないが、O. C. t. 1 par. 90 La serie innumera de ceros que forma la masa sigue... ② “sigue” に盲従といった含意があると考えられるので、こう表出したのである。

- (74) O. C. t. 1 par. 103 ここで人たる道と原生動物への後退の二つについては前掲注(70)参照。

この二つの道に対応して、近世の未完(中公 前掲五四六ページ年譜に中世的拘束からは自由になった現代人が新しい意義ある生活を築きあげるまでの自由はもっていないという叙述参照。これは① 現代の自由にみられる未完の状況 ② この自由「から」の逃走が意味する by-pass へのそのもたらすものについての指摘となっている)この仕上げをはかる héroe con bravura とそれより逃避して合法的横領に血道をあげる生の贗造者たる怯懦な似而非英雄との二類型が現われてくるのである。そしてまた一種の悪循環で、こういった構造性の未定着、この不透明膜の下にある構造性を自らの課題としてもとり出せぬも一つ前の段階すらはつきりせぬことが手伝って真贋の判別さえつかぬ状況を呈するのである。まさしく el tema de nuestro tiempo がこういった二つの意味で曖昧模糊としてくる (Generación nuestra) ための混迷がもたらされていくとみるのである。

- (75) O. C. t. 1 par. 88 成り上り者というよりは物神とった方がよいであろう。しかし、それ自体として単なる imagen として神龕の中に収めらるべき偶像であるにすぎぬものである。これが、① una razón ② social ③ garantizada de ④ capital fuerte なのである。⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖 㿗 㿘 㿙 㿚 㿛 㿜 㿝 㿞 㿟 㿠 㿡 㿢 㿣 㿤 㿥 㿦 㿧 㿨 㿩 㿪 㿫 㿬 㿭 㿮 㿯 㿰 㿱

数百倍にも上る通用力を与えている。高額の手形はその最たるものであろう。第二はその所有権またこれに対応して全く空洞化されていることである。川島武宜氏が夙に指摘されているようにこと貨幣所有権に関しては所有権者と所持占有者との区別は空文化しているのである。だから窃盗もいわゆる足のつかぬよう現金だけをねらうのである。(川島 所有権法の理論参照)この点で個実存的にみると実質的価値が名目価値に比してゼロに等しいものが現われるに至っている事実注目し「la serie innumera de ceros (par. 90)と述べ、かかる実質価値を空洞化してしまっている状況に合わせて「la personalidad, la voluntad de potencial (par. 89)とその仮称性をとりあげ、また sus elementos redondas y vueltos」でその中空外殻性を指摘するのである。(par. 91)

- (78) O. C. t. 1 par. 92「これはかかる一連の機序を Aurora 紙所説引用によって明確にしているところである。先ず ① esa cosa abstracta がこの fetiche の抽象性についてあれ、このために ② これを御神体とした santuario が建てられてそこに第一の跪拝が生れ、③ その santuario を管理する los individuos poderosos たる祭司団が ④ かつてのメンフィスのアメン神官団宛に、この fetiche の強制的従属を要請するようになる。これが el hombre, por los juicios de individualidades poderosos, produce un efecto extraordinario e insensato sobre el gran númeroであり、祭司長による篡奪的独裁が齎らされるに至るのである。この Aurora 紙の所論はそのまま自分の考えと合っているとしてここで引用されているとみるべきであらう。まさに主体的摂受である。

- (79) プロバガンダによる人心操作にも、かかる人としての道と原生動物への後退といった二局面があることと対応した真贋があるわけであって、浅いとはいえ、主体のこういって内なる構造作動である personality に立脚しつつ、真贋二つのもの存在に分析のメスを入れたのが Harold J. Lasswell であると考えられる。彼は例えば Propaganda Technique in the World War 1927, 共同研究 Language of Politics: Studies in Quantitative Semantics 1949 にみられるように政治的段階の武器としての政治的主語(スローガン、シンボル、神話など)を数量的に分析して政治的宣伝の動態をとらえようとしているのであり、これが、その一つの関心領域であった(世界思想教養全集一五 現代アメリカの思想三九八、四〇二ページ参照)

- (80) O. C. t. 1 par. 94 para comprender las cosas といった表出によって、こう考え得るであらう。
- (81) 例えば、牧康夫 フロイトの方法(岩波新書)七ページ、ここに、無意識的な心的過程と意識的な心的過程といった叙述がある。

- (82) O. C. t. 1 par. 94
- (83) O. C. t. 1 par. 95 Salir a su encuentro y chocar con las cosas など。
- (84) O. C. t. 1 par. 99 など 既引用の par. 34, par. 35 より crítica が una lucha よりなることが明らかであり、これにより
より par. 96 el que entre en lid con las cosas よりなることは corrido de toros への連動より par. 97 の bien pica より
なる表現更に裸への対決よりなる直接性を強調していることが par. 98 にも関わる。
- (85) O. C. t. 1 par. 100 crítica viva よりなる表現は用いているが、よりへの en el tiempo y en el espacio よりなる具
体相 ③よりへの los grandes amores y los grandes odios よりなることは、apasionamiento の作動によりより hacer la
crítica vivienda よりなるよりなるべきではない。
- (86) O. C. t. 1 par. 100 Así, las parabras son creídas 参照。
- (87) 周知のより Socrates (470～399 B.C.) よりなるより、論稿の草やむだ一九〇二・一二・十七より二一三〇〇年強の年月が経
過したよりなる。
- (88) O. C. t. 1 par. 125 よりより par. 105 より par. 124 まで Aquí termina la parábola より par. 125 より終結よりなる。
- (89) O. C. t. 1 par. 104 よりへの la justicia es una divinidad tan aburrida de un culto tampoco ameno……など、より
より par. 40 よりより par. 41 より par. 51 まで展開され、par. 52 より un error de perspectiva より結論する。所与の正義
について、その生観色的特徴を指摘した行文と関わるものとなっており、
- (90) 拙稿「デモクラシー論理のフナトピア（国士館大学政経論叢 昭和五十六年第三・四合併号所収）一三三ページ参照。
- (91) この点については後述四参照。ここに個内での物質主義と観念又は精神主義に断面を見せる二元論と一元論の相剋が胚胎
する。
- (92) O. C. t. 1 par. 103, 104
- (93) O. C. t. 1 par. 105, 106, 107 よりより、の古くからの持続的教訓性を par. 108 より la conseja antigua y pedurable
よりなる。
- (94) O. C. t. 1 par. 114, 115 よりより他の誰れかと与えり貰ふよりなる姿勢より par. 116 の ¿Quien nos dirá qué cosa somos
nosotros? よりなるより。また par. 121 参照。

- [illegible]

あり、また今のところ ignoran que las pasiones son dolores inmensos, purificantes とした如く内容的にまさしく未知領域である (par. 131) だけにそれだけ、その掘り下げも必要となるとみているのである。

- (104) このナルシズムは Sigmund Freud: Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse 第二六講リビド論とナルシズムで説かれているものであるが、ここでは、その自己陶醉と同一の機序に着目して用いているのである。

- (105) 社会人格のヒステリーの異常心理によって、ヨーロッパ近代以来の自由が放棄され、特にドイツ中産階級によってとられる、こういった一連の病理的機序によって一九三九年より第二次世界大戦による顕在化をみる E. H. Carr も危機の二〇年とする時代が醸成されるにいたるのである。

- (106) この点は後述四でもっと詳細に触れる予定である。ここでは差し当って竹内 均 物理学の歴史二一五ページによって一八〇〇年代の終り頃には電子がすべての原子に含まれることが明らかにされ、原子はもうこれ以上分割できないものであるという考えの一角が崩れはじめたという事実を指摘しておく。

- (107) この論稿のタイトル De la critica personal で明らかでないが 1936 Kurt Lewin の Principles of Topological Psychology と示した E→P→R (Environment of the political actor, Predispositions of the political actor, Political responses) Paradigm の、この中間項をその空虚化(空洞化)より救済してその実数化を図ろうとする意欲がそこにはみられるのである。

三

- (1) O. C. t. 1 は一九二一ページより La «sonata de estío» de Don Ramón del Valle-Inclán を、また一部の書簡を収めつつ El Arguero 版 Epistolario の目次上は Madrid, 6 Enero, 1904 の Miguel de Unamuno 宛のもの(一番早べ) O.C. 収録論稿の日付は La Lectura, febrero 1904 となっているのである。従って一九〇三年に帰すべき文献はなっていないであろう。

- (2) El Arguero 版での注によると、この一九〇四年の二書翰は一九〇四―五マドリッドで刊行された雑誌 Nuestro Tiempo に Unamuno がのせた「若者の心」と題するエッセーで紹介されたとされている。なお、Epistolario (El Arguero 以下 Ep. として引用する) 六一ページと六五ページにこの一九〇四・一・六付書簡が収録されている。全部で三十五文節より成る短かいものである。

- (3) Ep. par. 1 A pesar de lo cariñosa que era su carta, no la he contestado cuándo y cómo debiera; ¿verdad?

った形で返事が書けるか見込もたっていない旨明らかにしているのである。

- (4) Ep. Par. 2, 3 より *más sereno, el espíritu me entrara en ritmo sociable, el compás no acaba de ganarme la cabeza, tranquilamente* と *うづた表現を綯え合わせる* と *うづ言えよう*。

- (5) Ep. par. 1 *me perdonaré usted* 参照。

- (6) この点は四でもっと立つ入った叙述を加えることになろうが、差し当って既述の一で明らかにしたように、オルテガは個内二枝変数構造式構成の試みが個一般理論としてニコロ・マキアヴェッリ（これについては拙著 大衆と独裁 結章参照）ルネ・デカルト、イギリス経験批判論、イマヌエル・カントらによって遂行されてきた事実には省察を加えながら、その論理的未定着に問題が存することを抽出するのである。ここにみられる西欧図式の未定状況、これこそが西欧思考模型のもつ生産性（これが生産力を規定し、阿片戦争によって東洋の驚きの因ともなるのである。豊かさとは思考図式の豊かさなのであって、この点は見誤ってはならぬ。西欧図式の核心は René Descartes の *Cogito*, Blaise Pascal の *le roseau pensant* に示されるように考える力に生産性をもたせたところにあるのである）を自らも得んとする後発国の西欧図式撰受に当たっての混乱をもたらす因とみるのである。特にその未定着とそれぞれの伝統作動との絡み合いが、思考の *particularismo* を産み、それがまた *De la crítica personal* でもとりあげられたような分派（O. C. t. 1 par. 123）を形成させ、その間に割拠的分立（O. C. t. 1 par. 124 表現の裏にあるもの参照）を招来させる基因をなすものである。だから、この論理的定着化という文字通り *ortopedia* を行なって、これまでで果されなかった課題と取り組むこととなるのである。ところで、これまで、かかる定着化が果されなかったのはこれも四でふれる如く二枝構成、というよりはその関連の論理化が中途半端であったためなのである。というのは関連については、これまでのところ直観といった所与作動の確認に委ねられていて、その論理的な再構成又は組み立てがなされていないからである。そこにまた後述するように René Descartes の *Cogito ergo sum* 命題の古典的な意味があったといえるのである。

だが、一九〇二年一月の時点でオルテガはこういった関連のトポロジ的論理化への道は選ばなかった。既に O. C. t. 1 par. 127, 128 の *asociación, diociación* と *うづ* terminos を用いているうづでも明白なように、二枝構成もっと正確に言えば共在可能な二枝の構成と取り組むことになり、大枠としては Martin Heidegger の *Sein und Zeit* と同じ方向を追うことになった。このために、定着化の本道を外れ、率直にいうならば詭弁的なものに陥らざるを得なくなり、またそれだ

けに迷いと苦悶とは倍加した形で彼に迫ったのだといえよう。

- (7) ここで、イマヌエル・カント思想についての正確な知識が必要となる。だが、ここではカントに関する精密な検討は差し控えねばなるまい。詳細はカント研究書に譲って、知・意・情に対応した三批判書 純粹理性の二律背反との逢着とその実践理性による超克といった周知のものの指摘にとどめることにしたい。ここで、オルテガはかかる知意情の三分野を *razón vital* といったもつと包括的なものの二肢変数共在構造作動でとらえ、その構築を図ることで純粹理性の二律背反をそれ自体で背反たらしめぬ道を探ろうとしているのであると考えられよう。

- (8) Ep. par. 4 *la consabida sopa de letras, hiriendo; unas me suben, otras me bajan, en sarras o en pezados; julete, su molde que活写されている。うういっただ un verdadero lío que en la cabeza se vive* unas dudas, unas afirmaciones の連続交錯の中に立たせられることになっているのである。

- (9) Ep. par. 6 *yo soy lo instintivo, lo espontáneo* とみるが、*yo* が *haya o haya de haber en mi personalidad* とした自己実存内で作動している *yo* はつまりはその個性性について明確に指摘しているのである。

- (10) Ep. par. 4, 6 *yo soy lo elemental o básico* への志向をまず、*yo* が自分の中での *lo instintivo, lo espontáneo* とした所与の作動展開である *yo* は *yo* の問題 *yo* の *ideas* への転化転成にある *yo* を *bajo la conciencia me andan ideas desconocidas haciendo sus menesteres* とした表現 *yo* は *yo* に注意せねばならぬ。そして、更にこの場合において、従来までの二肢を平面的に捉えているのに対して Sigmund Freud がその psicoanálisis で示した、二つの心的過程とその潜在的把握を利用して *yo* la conciencia *yo* desconocidas と対応している *yo* la inconsciencia *yo* の二つの範疇を指定し (par. 4) オデュッセイア的地中海の伝統による海の牧民性そのままに、これを海に譬え(なおオルテガには *náutico* といった海と連動した術語用例が多いことに注意せねばなるまい) その表層と深層による立体的な二肢の排列を意図するのである。だから、ここでの desconocer は平面的二次元的ではなくて、かかる三次元性を与えられ、うういっただ次元増幅に従来ものの超克を志向するのである。これは正しい方向だといえよう。この par. 5 での *de cuando en cuando, una idea acciende como un pez a tomar aire, y la veo; pero como ne veo el resto de su familia* *yo* は叙述はかかる意味を帯有している *yo* と見得るのである。だが、Claude Lévi-Strauss 風にその familia *yo* familia *yo* といった構造的性、全体との関わり *yo* へえしかもそれを意識に ascender *yo* せ、定着化を果さぬ限りは確かに *no me sirve de nada* (par. 5) なのである。

Учись с азбуки! Не то могли да сяди, поджавши хвост! y! であれは更に *fy!* даже жарко стало! (par. 43) と続くのである。これは Потугин の言葉である。ロシアとスペインはとりわけナポレオンⅠの没落で周知のように奇妙に暗合した役割を演じていたし、また西欧思考図式摂取に際して、伝統主義者と西欧主義者の分立を生じている点でも重なり合ったものを有している。

ところで、スペイン語訳とロシア語原文をここで対比してみると *семь пядей* を *una hectárea* と訳出し、*поджавши хвост* を訳していないといった差はあるが、概して原文に忠実な訳である。なお *семь пядей во рту* (口語) 賢明であるとの意である(井桁貞敏 コンサイス露和辞典 八四九ページ参照)そして、五里霧中とここで引用しているツルゲーネフの小説 *Дым* に合わせて、すべて煙霧に包まれていったメタフォールとなっている。ここにオルテガによる術語の重層用法象徴があろう。

(20) Ep. par. 6

(21) Ep. par. 18 es desterrar, poder del *alma colectiva* la esperanza en el *genis*.....

(22) Ep. par. 18 España, Rusiaそして一九〇二・一二・一の論稿でも既にとりあげられているイベリア半島からみてビレネーの東にあつて、フランクに端を発するゲルマンの三者が、ここで一応掲げられているとみられよう。

これらに極めて大雑把ながら、東ローマ的ビザンチン、ローマンカトリック、ヨーロッパ近世プロテスタンティズムといったキリスト教ドグマがそれぞれ対応しているといつてよいであろう。なお、増田四郎、ヨーロッパとは何か(岩波新書) 平野義太郎、民法におけるローマ思想とゲルマン思想などでのローマに対するゲルマンの特徴に関する叙述参照。

(23) Ep. par. 13 hicieron una irrupción de barbares en estos campos de las ideas. par. 14 más vale, es cierto, algo que nada. 参照。

(24) オルテガはスペインがビレネーの彼方にみられる思惟図式をその先進性のゆえに摂取したが、生産性を継承し得なかったのは後述四でまたとりあげるように思考の構図図式性とその生産性との関数性をふまえて、その構図性欠如の摂取にあるとみるのである。

(25) Ep. par. 14及びpar. 15 〇 el paper de bárbaro

(26) Ep. par. 28 スペインの出路なき閉鎖状況描出 par. 21 personalismo corto de mirásで短絡近視眼的な、構造収束性に

立脚するものは、その構造作動の作為性を欠くために似而非人格主義でしかなく、結局は *estetic* であるとみるのであって、我々が求めているのは正反対である。だが、これも *personalismo* であるところに真贋判別式をもたぬ現状での、問題もまた生じてくるとみるのである。だから、どうしても判別式をもつことが緊要とならざるを得ない。そして、こういったものの *fatia* がスペインに *todo ciniento* を欠落させ、徒らに *el genio* への待望といった偶然の輪贏に賭け、自己の内なるものを空洞化し、ただ外の偶有性のみによりかかる *esphritu de la loteria* (par. 18) の横行を許すのである。

- (27) この現象的に主・客といった二肢によって作動している関係式を個内次元に平行移動して形成指定したのがオルテガの周知の図式である *yo* は *yo* と *mi circunstancia* であるとの命題なのである。だが、この場合決して見落してはならぬのはルネ・デカルトの *Cogito ergo sum* に含まれる *ergo* の意味に則した一次、二次の立体的な構成をオルテガが思い描いていること、このためにオルテガが命題を平面化することは避けねばならぬとともに、また Martin Heidegger の存在論への批判として、人を、その個実存をハイデッガーのように住み得るものとはとらず、元来住み得ぬものと考えるに至っている点(例えば *Pasado y porvenir para el hombre actual* 所収第二論文四〇一八で人は *unbewohnbar* とする叙述参照)で *yo* とその *circunstancia* は肯定的に関連せず、否定的モメントを媒介として、ことに注意せねばならぬのである。ゲルマン的な有への拘着による、その特殊化を有と共在できる非有を考えることで掘げ、これで同時にスペイン的な特殊な非有執着をも打破することによって、より一般的な *ontologia* を樹立せんとしたのである。つまり、かかる意味での二肢構成による個の一般理論化の道をここで、模索し、迷っていたのだといえるのである。

- (28) これはオルテガ自身も述べているところであるが、ここでは、有本紀明 スペイン聖と俗 二五五ページ七行以下 三三ページ一四一二五ページ六行 佐々木 孝 ドン・キホーテの哲学 一一六ページを参照するだけにしておこう。

- (29) これはフランスをゲルマン族の一つであるフランク帝国の中心地とみて論じているものである。(増田四郎 ヨーロッパとは何かフランク分国首都所在地パリ、ソアツソン、オルレアン、ランス一四〇ページとフランク王国発展地図一三四ページ一三五ページ参照)ゲルマンが、たとえ柔かい統一にせよ、ローマ帝国理念を継承し得た、ローマに対するその進歩性の一つは土地に対する重層的所有、否寧ろ保有権構成という技術性によった集合指定にあったと私は考えたい。全土は *Deus* のもの、王がその *partie* の占有を許され、諸侯またその一部の占有を認められるといった具合である。そこには緩いものとはいえ構造性が作動しており、ローマの *dominus* の具体的絶対性がこの限りで抽象化されて、自・他構造を容れる

ような弾力性の賦与が見られるのである。だから、ローマが解決し得なかったところに別の活路を開き得たのであった。

ローマ的発想とゲルマン的発想はここにその差異が存するのであり、イベリア半島はその Reconquista のによって地中海伝統たる海の牧民的放浪性を持続せざるを得ず、否定の思想に傾かざるを得なかったために、いわばこの両者の中間的位相を占めているといえようか。だから、オルテガは España invertibrata でゲルマンに比して弱い封建制という表現で封建的構造化の浅さ、その musgo で蔽われている状況を語り、その中間性を示唆しているのである。

- (30) Ep. par. 19, 20, 21, 22 について注意せねばならぬのはスペインの personalismo (par. 21) が、各自の個の中への方向をもたず、個の外なる、個へのマナ待望たるにすぎぬとの指摘である。前者をこそ必要なものとみるわけである (par. 21)。このため、これを un genio, un héroe とは見る訳にはゆかず、スペインは擬似ナポレオンしか生めぬことになる。だから、Pío Baroja の表現を借用して Dictador とよびたいとするのである (par. 20)。なお Dictador には Maria Moliner A-G p. 992 にある ① Entre los antiguos romanos magistrado supremo que nombraban los cónsules en momentos de peligro, el cual asumía todo el poder ② Gobernante que asume todo el poder, sin ser él mismo responsable ante nadie となっている。そして、こうだった un genio を持つ、自分が un genio となる、つまり自分のもっているものを、より完成に導くことを怠るとこの genio が人なので muerto o roto した場合、また別の者を待望し、どうにもならぬ不安の中で二・三世紀を過す羽目になってしまい、いつまでも自らの力で道を拓こうとせぬための悪循環に陥るに至るのである。それはモーゼに律法を与えよと乞うたヘブライの tribus (O.C. t. I par. 105 以下) にみられる judaismo であり、常にモーゼを待望してねまぬ faquirismo に他ならぬのである。(なお、これはアラビア語 *فقر* に由来するものである。この語義については現代アラビア語小辞典三四一ページ参照) また、これは par. 22 である。

また、ナポレオン・ボナパルトは大革命によって制憲権力の保有者となった各個人象面での voluntad general (volonté générale) 作動の構造賦与の意味合いをもつとも言い得るのである。この点については杉原泰雄氏、西川長夫氏の著作ならびにナポレオン言行録(岩波文庫)参照。

- (31) Ep. par. 10 como musgo 参照。

- (32) Ep. par. 10 No me convence を特に注目のこと。

- (33) 本論二結論部参照。

(34) O. C. t. 1 24 1902.12. 1 ⑥ De la crítica personal ⑦ 続々 1904. 2 La sonata de estío de Don Ramón del Valle-Inclán 1903.3.14 El poeta del misterio 1904. 7.25 El rostro maravilloso ⑧ 特々後二者は Maeterlinck¹ la condesa Mathieu de Noailles をタイトルから分るような misticismo の観点よりとりあげてゐるのである。

(35) このゲルマン思考に見られる肯定拘着にオルテガはその躰きの石を発見するのである。彼がカントの *razón pura* を *razón vital* に拔げ得たのも、こういった構想と深い関わり合いをもっているのである。なお、前注(27)でも示したが、Martin Heidegger の *Sein und Zeit* との関連は順列的であり、主著 *Sein und Zeit* と *In-der-Welt-Sein* überhaupt と *Sein* の *Grundverfassung* といったものとの現われである。従つて *Das Sein des Daseins als Sorge* といった *Sorge* の概念に言及する時、それは、こういった *Seiendes* が *Nicht-Seiendes* を前にして *Nicht-Seiendes* に対しての *Sorge* なのである。

(36) この論証には可成り長い叙述を必要とするので、ここでは仮構的にその主要のみの提示にとどめることとしよう。

スペインにみられる前注(28)にあげた *muerte* への傾斜はヨーロッパ的構造的性の *vagabundo* 的実現を歴史的に強制せられるに至ったことと深く関わっているのである。つまり、二股共在で、ビレネーの東は客主志向、西では主否定による客主志向が卓越する形で、潜在的構造作動が見られるからである。

レコンキスタの重荷を背負わされたスペインは外への志向をやむなくされたが、これは個の内なるものの *pobreza* を招来し、これがまた *suelo* の *pobreza* と相俟つて *un hidalgo de la Mancha* に *ir a buscarse el pan a luengas tierras* をせねばならぬ。(Miguel de Unamuno *Vida de Don Quijote y Sancho* Colección Austral 版 117 ページ) の *“ahora”* の抛棄こそ *El Dorado de mañana* に賭ける放浪性をうみ、メセタで行われる *trashumación* とならんで、外への志向による内なる *pobreza* を媒介とした内なるものの空虚化と常に対決させることになるのであり、*muerte* への傾斜をつくり出すことになるのである。自己の *Dasein* 否定と自己とは他なるものによる永生への願いがスペインにおけるヨーロッパ構造的性の作動因なのである。こういった特殊イペリア的作動条件によって構造的性の自己内平行移動は、こういった条件をもたぬものに比して遙かに困難なものとなることは容易に想像できよう。

(37) こういった *el momento presente* のこの二つを両立させた姿をオルテガは過渡期に顕在的に示されると考えた。そして、この論理化のための苦闘がこうで見られたものといえよう。だから、オルテガが Martin Heidegger の *Sorge* を pre-

occupation とスペイン語の同義語で移し変えた時、Sorge は有の非有化に対するものであったが、preocupacion は逆に非有をいかに有にするかといった積極性に対応するものであり、非有―有―非有といった連環を具えることと、Sorge の有―非有―有といった消極的なものとは異なるわけであり、それだけに有と昵む非有はいかなるものか、その構成に腐心せざるを得ぬという新しい問題を抱え込むことになるのである。

- (38) Ep. par. 23 発表・公表すべしといった勧めに対して par. 24 でいうような考えを述べるのである。そして、la falta de madurez, el cachorismo, las experiencias y candideces である状態ではこの仕上げをうす優先すべきであり (par. 24) だからこそ今は沈黙の道を採るのだ (par. 25) とするわけである。

- (39) Ep. par. 32 公表はしないとは言いがらも今再読してみていささか立ち入り過ぎた観も免れぬし、また、例えば par. 10 での no se indigne という挿入句にも見られるように失礼な言辞も散見され、algunos vicios なしとは断言できぬ。だが、元来私信は confesión の性格をもち、これは論文ではないので、この程度はよいのではないかとするのである。

- (40) Ep. par. 26

- (41) Ep. par. 26 pero yo le aseguro que es respeto a las ideas……

- (42) Ep. par. 26 cierto asco de entrar a formar parte, casi a sabiendas, del coro de ocas 参照。

- (43) Ep. par. 27 これは周囲の人々がひどくこともあつてであることを示唆し、これでは pesimista たるを知るを得ぬとするのである。

- (44) Ep. par. 29, 30 じつは que temen resultar anónimos y desvaídos sino hablan en primera persona とぶう叙述はこれまた par. 21 の personalismo とも関わる。形だけで、内実的には空洞化され、またこれを充実しようとする意図もなく、何がこの内容を構成するののかについても定見をもたぬ、似而非なるものの並存がある実情にふれるのである。

- (45) 青木靖三 ガリレオ・ガリレイ (岩波新書) 一〇節～二五節参照。

- (46) 青木靖三 前掲書 七六ページ、四行

- (47) 青木靖三 前掲書 七四ページ～七六ページにその一例が挙げられている。

- (48) 青木靖三 前掲書 七六ページを発端とし一九〇ページ以下の判決文によって七〇歳のガリレオ・ガリレイの所説は異端と宣せられるのである。

(49) Ep. par. 33 しかし手探りでは検討が進められている旨が示される。だから、今日自分としては par. 21 で示されたような個の内的構造化を意図して par. 20 la labor de cien hombres de mediano talento, pero honrados y tenaces を積み重ねている最中なので、下手発表などとするところの par. 24 の示すような tontería, como si nada 陥るようになってい

(50) Rp. par. 34 no teniendo cosa mejor que hacer, trabaje sobre los libros de nueve a diez horas diarias

(51) Ep. par. 34

(52) 前注(34)参照。

(53) ここに構造化と二肢の構図内への組み込みの意図が出ている。というのは一九〇四年の第二論文は el escritor *béga* である Maerlinck 第三論文は la escritora *francesa* を扱ったものにも *misticismo*、しかもビレネーの東のものに目をやっているからである。なお、一九〇四年二月の第一論文はルネサンスといった過渡期の構造化とその収束についてとりあげ、二肢の分離あるいは分離指定さるべき二肢が明白に有るの同義性によって構成されぬところに収斂の生ずることに目を遣ったものとなっている。

四

(1) 中央公論 世界の名著 マンハイム・オルテガ 年譜 五五一ページ。

(2) 山川 世界現代史 二三 スペイン・ポルトガル現代史 五二ページと五四ページ そこで注目すべきことはカルロス III (一七五九〜一七八八) による啓蒙的専制政治の展開は王家がブルボンであったことも関わって、没落したスペインと対蹠的であったフランスを模倣して国家のたて直しを目指したものであった。だが、スペインにはブルジョワジーがまだ存在していないためスペインは精神的にも社会的にも古い構造の中に眠っていたし、啓蒙主義者たちがモンテスキュー、アダム・スミスなどの外国思想に依存しすぎていたところに問題があったとしたため、成功しなかったとみている点である。若しも、ブルジョワジーの存在と先進性とは深く関わっているとすると、ブルジョワジーをこれから創出せざるを得ぬ後発国はどうすればよいのであろうか。これは後発国にとっての一種のアポリアであり、また悪循環の論理をなすものであろう。ブルジョワジーを作出するための先進国思想の摂受が、自らの中にブルジョワジーが存しないと生産的にならぬとすると、いわば無よりの出発を余儀されている後発国にとって、それこそ大きな問題をなすからである。この限りで亀は遂に亀であ

るしかないからである。

これが、私に文化摂取に関心を抱かせた動機の一つである。文化摂取はただ先進国の思想がもたらした結果をとり入れることではなく、かかる所産を産まされたその思考生産性の秘密がどこにあるかを探り、しかもそれをこれまた *quid facit* としてとりあげるのではなくこれを仕上げる、いわば *quid iuris* の問題としてとらえることでなければならぬと思われるのである。それは私が日本においては洋学摂取パターンで垣間見たように佐久間象山よりは福沢諭吉そして更にこの福沢諭吉を超えた真の自主的な態度こそ必要なのである。それは摂取側の伝統をいかに保つかではなく、それをも超えることが必要となるものである。これが、また不明確であるところから摂取者にあつてのトレードオフが生じ、混乱が生じてくるともにまた摂取自体が非生産的となるのである。

(3) 一例として Georg Brandes Hovedstrømninger i det Nittende Aarhundredes Literaturforlasninger holdt ved Kjöbenhavns Universitet i efteraarhalvvaaret 1871 I Emigrantlitteraturen Indledning I をあげよう。

この par. 37 Vor Literatur er som et lille Kapel i en stor Kirke, den har sit Alter, men Hovedalteret findes ikke her. par. 34 Men dernæst har det været vort lille og afsidesliggende Fædrelands Skæbne, at det ikke paa første Hand har frembragt nogen stor europæisk Aandbevægelse par. 35 Vi har ikke givet Stødet til de store Forandringer, Vi har undergaaet dem, naar vi ellers har undergaaet dem. par. 36 Vi faar f. Eks. Reformations Idee fra Tyskland, Revolutionens fra Frankrig をあげるとする。これらは、先進国の Idee の影響をうけたことの証言をなすものである。テキストはデンマーク語原文によつたが、日本でデンマーク語を解する者があつて多くないことを考えてアンダーラインを施したところの邦訳を掲げておこう。

a 大教会の中の小礼拝堂、b 小きくて辺境にある祖国、c 何か大きなヨーロッパの精神運動の先頭をきつて進むとはなかつた、d 我々はそれらの影響を蒙つた、e 例えば宗教改革の理念をドイツから、革命の理念をフランスから我々は得ている。

(4) これはヘーゲル・カントの Vorläufige Schriften における批判の著作である Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels oder Versuch von der Verfassung und dem mechanischen Ursprung des ganzen Welgebäudes, nach Newtonischen Grundsätzen abgehandelt に既に自分の眼で物を観るという態度が現われ、これがや

がて David Hume に代表される主体内の被動的な消極的提示であるイギリス経験批判論にも向けられてゆくのである。

(5) 金子武蔵 実存思想の成立と系譜 一五四ページ～一五五ページ。なお、Søren Kierkegaard 思想については後でもふれるが、特に Sygdommen til Døden (1849) にはその証言がみられよう。(Samlede Verker Anden Udgave XI 所収)

(6) 佐々木 孝 ドン・キホーテの哲学 特に九五ページ、九一ページ～九四ページ参照。

(7) 中公 年譜 五五一ページ、佐々木 孝 ドン・キホーテの哲学 八九ページ～九一ページ、二つの新しい世界に一八九七年の体験によって入ることとなったウナムーノとの出会いと考えてよいであろう。

(8) イベリア半島はその形成の歴史からいってもオルテガ自身指摘するように、フェニキア、ギリシャ、ケルト、ローマ、ゲルマン、アラブ、ユダヤといった民族従ってその思想の坩堝であった。だから、ここでのキリスト教徒ゲルマンによる Reconquista の成功は、その思想構図のもつ生産性をその一因としていることだけは確実と考えられるのである。またもっと全般的にいつてヨーロッパの思考図式が、その生産性のゆえに東洋人にショックともいえるべき驚きを与えたのは佐久間象山に徴しても明らかである(拙稿 日本における洋学摂取の一パターン (一)(二) 国士館大学政経論叢 五〇、五一号参照)

既に示唆したように、ヨーロッパ思考図式は個々の構造化において他の思想類型に比して一歩進んではいても、未だ十分なものとはいえず、この未完こそが問題であり、そこに摂取した側の自己主張の余地が生ずるのである。ただ、その場合であって、かかる未完をより仕上った完全なものに近ずける作業が問題なのであって、決して東道西器であってはならぬことである。完成に近ずけてゆくものは、個の内に投影された所与構造に近似した、その論理図式の構成といった一般的なものでなければならぬのであって、個が歴史的におかれていた伝統の強調ではないからである。これが結局いつまで経っても亀が兎になれぬ基因をなすものであって西欧図式を摂取するもののまさに銘記すべきことなのである。西欧図式を通じて、これを超える前人未到の困難な道しか、思考図式摂取での生産性を保証するものはないのである。

(9) 例えば、増田四郎 ヨーロッパとは何か(岩波新書 以下増田として引用する) 四四ページ～五〇ページ参照。

(10) 既に示唆したように、個の内で作動している所与の構造化を論理的に構成し、この所与極限値に限りなく近いものをつくりあげると所与たる自然による人への被規定性は相対的にこれまた限りなく小さくなってゆくものである。こういった関数性にたつとヘーゲルの弁証法もまたその整形を施したと称するマルクスのそれもその基底において、かかる可変性をとらえていないといえよう。図式の論理化と自然による規定、人からみでの被規定性はこういった可変関数関係にあるのであ

る。だから、この論理化が不十分であればあるほど、論理の彼方にある自然条件によって人の行動従ってその一象面である
思惟の態様も規定されることになるのである。ここに現在での「風土」的状況が位置するのであるが、こういった変化をも
たらすためには先ず論理化具体化のための一般式を構成せねばならぬことになる。

- (11) 太田秀通 ギリシャ世界の黎明 一四五ページ（以下 太田 世界として引用する）高瀬 学 ヘシオドス労働と日々の
一断面（国士館大学政経論叢 第三九号 以下労働として引用する）その他ヘシオドスについては広川洋一氏の労作がある
が、この行論にあってヘシオドスはどこまでも一つの素材であるから、煩をさけてその引用は一切省略した。

- (12) 労働 二〇ページ六、三六～六四〇行、太田 世界 三ページ。

- (13) Oxford Classical Texts Herodoti Historiae 1-193 ἡ δὲ γῆ τῶν Ἀσσυρίων ὕετα……松平千秋訳 ヘロドトス 歴史上
（岩波文庫）一四四ページ、太田秀通 スパルタとアテネ（岩波新書）四七ページ～四八ページ（以下太田新書として引用
する）

- (14) 太田 世界 九ページ。

- (15) 労働 一四ページ四〇五～四〇六行、太田 世界 一五七ページ。

- (16) 和辻哲郎 風土（岩波文庫）七八、七六ページ。七一、七三、一〇三ページ（以下 和辻として引用する）労働 五ペー
ジ一一～一二行。

- (17) 労働 二四ページ、八二四～八二五行。

- (18) 太田 世界 三、一〇四、一一二ページなど参照。

- (19) 労働 一七～一八ページ、五〇四～五六三行。

- (20) 本多勝一氏のカナダ・エスキモー、アラビア遊牧民、ニューギニア高地人（いずれも朝日新聞社文庫所収）の一連のルポ
ルタージュはこういった意味で興味深いものである。採集に対して農業は土地を人が能作的に傷つけることによって、自然
からのすでに先行している毀傷を痛みを伴うものとして意識させるものなのである。

- (21) 労働 一四ページ四〇九～四一〇行、一七ページ五〇三行。

- (22) 中井久夫 分裂病と人類 2、狩猟民的な認知特性 3、農耕社会の強迫症親和性の各項参照、UP選書一三ページ以
下、一九ページ以下、特に二〇～二二ページで農耕民はこの母（大地）を傷つけとあるのに注目すること。これは自然よりの

人への毀傷先行があるが、今度は人が枠形成に立脚しながら、自然への毀傷を能作的に行なうことによって、毀傷をこういつた↑↓の二方向で意識下におくことを意味するのである。採集民の場合はこういった人から能作的に毀傷行為を行わぬために、自然毀傷による瘢痕瘡蓋に基づいて形成されてくる主体枠をその能作的行動を欠くことで、特に主体を意識に上せることはしないのである。だが、農業にあつて、この主体枠による主体を能作させるので意識せざるを得なくなっているわけである。この主・客二分肢での毀傷の相互性更にこの主体内への平行移動によつてすでに分裂症への親和性が生れてくるわけである。だから、この意識による論理的構造化で重要なのはルネ・デカルト命題の古典的な意味との牽連によつて明らかのように関連づけであり、この前論理的な所と関連と真の論理的な関連づけの間に顕在的な分裂症が前論理的な、論理的関連づけが未完であるため生れている潜在的分裂症から立ち現われてくるのだといえよう。

(23) ヘレディウムについては大塚久雄 共同体の基礎理論（大塚久雄著作集 旧版第七巻）三三ページ参照。

(24) ハムラビ法典の土地配分規定を特に参照のこと。

(25) 大塚久雄 共同体の基礎理論 四三～五五ページ、アジアの形態に関する叙述参照。

(26) 太田 世界五六～五七ページ 太田秀通 テセウス伝説の謎 二九ページ以下（太田 テセウスとして引用する）

(27) 増田 八四～八五ページ。

(28) 増田 六八ページ。

(29) 増田 六八ページ。

(30) テセウス 一八四ページ、だが、五七ページではミケーネ中期紀元前一三世紀に属する伝説上のアテネ王であるとしている。

(31) テセウス 六〇ページ。

(32) テセウス 一九五ページ。

(33) テセウス 六〇、八七、二〇〇ページ。

(34) テセウス 一八七ページ、九一～一六行、二〇〇～二〇一ページ。

(35) テセウス 二四三ページ。

(36) テセウス 二四九～二五〇ページ。

- (37) テセウス 二四八、二〇三、三九、四〇ページ。
- (38) テセウス 四五ページ。
- (39) テセウス 三九、四七、一〇ページ。
- (40) テセウス 四八、四九、二一ページ。
- (41) テセウス 四九、二一、一〇ページ。
- (42) テセウス 一八九ページ。
- (43) テセウス 一九〇—一九一、一九二、一九四ページ。
- (44) テセウス 四六ページ。
- (45) テセウス 二四八、二一三、二五四ページ。
- (46) テセウス 二二四ページ。
- (47) この折れ軸という表現については拙稿デモクラシー論理のアナトミア(国士館大学政経論叢 三七・三八合併号)参照。
- (48) この主体内トボスでの二肢共在構造式はこれまで行文でも縷述してきたように、二肢共在を可能にする関連づけが未だ行われていないという未完状況、換言すれば個内トボスで垂直—水平を同時に関連してゆく最小限三次元的関連づけが構想もされていないことと関わって論理的には依然未構成のままに放置されているのである。このために、二元論と一元論、唯物論と観念論、政治支配におけるジャン・ジャック・ルソーにみられる契約擬制などが生れ、いずれもアボリアを今のところ形成しているのである。
- (49) 増田 八四—八五ページ、太田 新書 一八ページ。
- (50) これは、さして意味のない一種の語呂合わせともいえるべきものであるが、日本語での個はまた発音上は己と通するので、中に主体的トボスのあることを示唆していると考えられよう。
- (51) 例えばスペイン・ハンドブック二九七ページ、主としてみずから創刊した雑誌『西洋評論』によってヨーロッパの思想潮流をスペインに導入し、普及することに努めたとの叙述参照。だが、それはかかる意味でのまさに主体的な *Receptio* であったのである。
- (52) ここで掲げた三者についてはそれ自体大著を必要とするのであって、注でしかもこんな雑な形でとりあぐべきでないこと

は十分に承知している。しかし、この行文に関するものに限っていうならば、カントの David Hume 批判、特に、その感覺の束論（桂 寿一 西洋近世哲学史（一）二一九ページ三行）に対して周知のように認識構成説を唱えて、主体内構造についての批判を展開したこと、キエルケゴールは例えば絶望について、これを自己における病であると語り、絶望して自己をもっていることを意識していない場合（非本来的な絶望）絶望して自己自身であらうと欲しない場合、絶望して自己自身であらうと欲する場合を分け、そこで自己を前面に出し、自己という主体内の分析に目を向けているのである。Sygdommen til Døden er Fortvivlelse とした上で A ~ A 2 Fortvivlelse er en Sygdom i Aanden, i Selver, og kan saaledes være et Tredobbelt : fortvivlet ikke at være sig bevidst at have et Selv ; fortvivlet ikke at ville være sig selv ; fortvivlet at ville være sig selv とし、Denne Sygdoms (Fortvivlelsens) Skikkelser er A a' b' B a' b' として明らかに陳述しているのである。（なお、デンマーク語テキストは前掲注(5)の Samlede Værker Anden Udgave XI によった）

こういった、キエルケゴール思考の主体性について小川圭治氏は主体性が真理であるとのテーゼがキエルケゴールの思想の中心であると考えられている……と述べている箇所などを参照してもらいたい。（講談社 人類の知的遺産 四八 キエルケゴール 四〇二ページ）また、かかる主体性確立に伴なうデンマーク思考の生産性についての証言は内村鑑三にみられる。彼は次のように述べているのである。一八六四年ドイツ・オーストリア二国と戦った結果敗北しもつとも憐れな国であった。欧州北部にある北海道の半分、九州の一島にも当らぬこの小邦が世界の中で今や最も富んだ民と化し、これがドヴァルセンを出して世界の彫刻術に一新紀元を劃し、アンデルセンを出して近世お伽話の元祖たらしめ、キエルケゴールを出して無教会主義のキリスト教を唱えしめ、またユトランドの荒漠の地を沃饒の土地たらしめた Enrico Mylius Dalgas を産んだとするのである。（内村鑑三 デンマーク国の話 岩波文庫 七四、七六、七五、七七、七八ページなど参照）これこそ、デンマーク思惟生産性の所産だったともいえよう。ここに N. F. S. Grundtvig による Højskole 制の発想更には協同組合主義の着想も生れるのであって、思惟の生産性とかかる豊かさとの関数関係の恰好の例証といつてよいであらう。

ミゲル・デ・ウナムーノはこのキエルケゴールの実存を継承しつつその思想を形成していった。彼が一種の実存主義に移ったのは、一八九六年冬から一八九七年にかけてのことであり、また一九〇二年三月五日タリン宛ての書簡でも明白であるように、主著生の悲劇的感情の構想をすでにこの頃から懐くに至っているのである。（ウナムーノ著作集 3 解説三七七、三八〇ページ）従つてその公刊は、ここできちんとあげられている一九〇二—一九〇三—一九〇四の時期より遙かに遅れるが、

その主著よりの引用をするのも強ち無理とはいえないので、生の悲劇的感情の Conclusión についてその主張をみることにしたい。

i) el fin de la Historia y de la Humanidad somos los sendos hombres, cada hombre, cada individuo. Homo sum, ergo cogito : cogito ut sim Michael de Unamuno. El individuo es el fin del Universo... ¿no dijo Martín A. J. Hume (the spanish people) aquello de la *individualidad introspectiva* del español...? (p. 259)

ii) Para Windelband, como para los kantianos y neokantianos en general, no hay sino tres categorías normativas, tres normas universales... (p. 262)

iii) Siéntome con un alma medieval, y se me antoja que es medieval el alma de mi patria : que ha arrastrado ésta, a la fuerza, por el Renacimiento, la Reforma y la Revolución, aprendiendo, si, de ellas, pero sin dejarse tocar el alma, conservando la herencia espiritual de aquellos tiempos que llaman caliginosos. Y el quijotismo es sino lo más desesperado de la lucha de la Edad media contra el Renacimiento, que salió de ella. (p. 265~266) 以上引用した三つの部分を彼此綜合すると、i) でスペインでの個の内面への着目の深さをこの内観的個人主義で示し、そこで個の内なるものの提示を行ない、次にヨーロッパ近代理性のもたらした成果の狭窄性と不十分さをii) でとりあげ、その拡張を意図し、そこにスペインの問題が存するとみるのである。こういった一連の発想を一九〇四年の別の書簡でオルテカは Me querido amigo, muchas gracias por los alientos que me da (Ep. p. 65 par. 1) と述べているようにウナムーノより継承しているわけなのである。だが、ウナムーノはヨーロッパ近代の現状における思想構図の不十分さ、未熟さを補正するに際してiii)の志向をとるのであり、そこにこの近代図式の中に曲りなりにも具現されている構造性をもつと図式化し、論理的に定着させる道を採ぶのではなく、この近代をまさにスペイン伝統的な非有と有にたつてビレネーの東の有と非有と同次元に身をおき、非有―有―非有といったビレネーの東と西を接合する一般式志向をもつことなく、ここから、拡張のヴェクトルを示してただけにまた大きく反転してしまうのである。だからこそ佐々木孝・ドン・キホーテの哲学 九五ページで言及しているごとく罪と苦しみ(dolor)とを同一視するといった折角の構造性の収束も行われるのである。だが、オルテカはここで反転せず、今まで立ち入りを拒んできた皮膜内に入り、構造性の定着作業と取り組むことになるのであって、その場合彼にとつての導きの糸はビレネーの東の思惟図式が西に比して比較的鮮明にしている二肢共在構造とそれにまつわる

思考生産性についての洞察であったといえよう。そして、ここにまたウナムーノの africanismo への傾斜とオルテガの *europeista* の道との分岐点が存するわけである。

- (53) この反転によって生ずるスペクトルの様々の色調を決定するのは非論理性をもったそれぞれの土着伝統の主色である。私は日本における洋学摂取の一パターン (一) でこういった機序について言及した。先進文化を摂取することで、その修正克服が図られた筈の土着伝統はその核心においてかかる反転メカニズムによってほとんど無疵のままに再生され、また自動的に被摂取文化と結合するのである。このために、伝統は蜥蜴の尾のように断尾状となり、そこに他のものが接ぎ足される結果となるのである。これが矢野 暢氏が南北問題の政治学(中公新書一八六ページ)で指摘されている価値のトレード・オフ現象なのである。だが、こういった自主性の発揮はいわば一種のマスターベーションに他ならず、これでは龜は遂に兎への変身はできぬこととなるのである。真の自主性はヨーロッパ先進性とそれがもつ未完なるがゆえの限界を自らの眼で見定め、これを手懸りとして先進図式を通じて、これの上に出る人口に膾炙しているイェーリング的モットーによる道しかないのである。

オルテガは未完である構造定着化こそ自らの務めと読んでいた点でまさしく正鵠を得た形で後発国が先進国の思想を摂取する際の後発国の課題をつかんでいたといえよう。後発国はこういったオルテガの道を歩むしか、兎に転ずる可能性はもたないといつてよいであろう。我々はオルテガのこういった後発国文化摂取にあつての課題提起を承け、実際にオルテガにして、未だ書き得なかったところをいかに解いて答えを見出すかであり、これこそまさしく *“el tema de nuestro tiempo”* なのである。こういった意味でのまさしく理性的な自主性をもたぬ限り、ヨーロッパ的先進図式は野田正彰氏の狂気の起源を求めている著作が(中公新書)とりあげている通り、後発国にまだ知らぬ二項式であることによって分裂症をもちこむものではないことになる。そして、先進国側思想の未完による限界蓬着、後発国側のトレード・オフによる分裂症状、この二つがヒステリー的な国際社会を生み、世界を狂気の病棟に仕立てかねないのである。

- (54) オルテガがイマヌエル・カントに傾倒していたことはよく知られた事実である(スペインハンドブック二九七ページまた Kant, Hegel, Dilthey というタイトルの冊子が E. Arquerio 文庫に収められている)がこれはカント思想のかかる皮膜反転に際して、極めて原点に近い点を評価したものと考えてよいのであつて、ドイツの新カント派とはアプローチ志向をこういった意味で異にしていた新カント派だったのである。

- (55) スペインハンドブック 二九七ページ、中公 年譜 五五二ページ。
- (56) 武谷三男 量子力学の形成と論理 I 原子模型の形成 はしがき一ページ、なお第一巻は Rutherford の原子模型ができるまでの論述である(以下 武谷として引用) 竹内 均 物理学の歴史 二一六―二一七ページ(以下 竹内として引用する)
- (57) 竹内 二一七ページ、二行。
- (58) 武谷 はしがき二ページ、外国においても Rutherford 以前の原子模型形成の歴史はも早清算されてしまったというわけではほとんど詳しい著書を見ないのでありますという叙述参照。原子模型形成は Rutherford 以前からすでに始まっていた。
- (59) 武谷 六六ページ。
- (60) 武谷 六九―七〇ページ。
- (61) 武谷 七一―七七ページ。
- (62) 武谷 七二、六六ページ。
- (63) 武谷 一二四、一二五ページ、そしてこれについては一二五―一二三ページでの実証を重ねるのである。
- (64) 武谷 一三一―一三二ページ。
- (65) 武谷 一三四ページ。
- (66) 武谷 一三五ページ。
- (67) 武谷一二四ページ、四、無核原子模型 なお、Hertz, Thompson の研究は陰極線がエーテル現象か負電気を帯びた物質粒子かといった捉え方と結びついたものである。この点について武谷氏は八九―九四ページで原子のエーテル模型をとりあげ、エーテル一元論は結局エーテルの力学的性質を例えば Kelvin にみられるように一貫して論じ得なかったと断じ、九五―一二三ページにおいて特に Lorenz の電子論を紹介してエーテル一元論の呈する矛盾は帯電粒子を考えることで説明される旨述べられるのである。この延長線上に Thompson の実験があったのである。

(68) 例えは Ferdinand Tönnies Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie (1887) をあげ得よう。こういったいわば巨視的レベルでの構造論がここで意図されていたといえよう。だが、素粒子物理学が宇宙の誕生ドラマと関わるように徹視的なレベルでの個内構造論もまた可能であり、かかる原子模型論はそういった方向にあるとい

えよう。

(69) この点で示唆的なのは西田幾多郎の働くものから見るものへといった視点であろう。なお、西田哲学に関する作業は私に
とつての今後の課題を成すものである。

(70) こういった意味で社会科学方法論は極めて重要であり、政治権力論といった政治科学分野でも在来の壁を破った創造的な
議論を展開するにはどうしても社会科学方法論についてふれなくてはならない。

この点で例えば George Burdeau *Traité de science politique* 伊手健一 政治権力論はかかる方法について言及してい
るのである。

なお Handbuch Philosophie 叢書 22 の Karl Acham *Philosophie der Sozialwissenschaften* 1983 があることを付言
しておこう。

(71) 講談社 人類の知的遺産 六二 マックス・ウェーバー 六〇—六一ページ。

(72) 高坂正顕 カント学派(一九四四年) 八ページ(以下 高坂として引用する)

(73) 前掲 マックス・ウェーバー 六一ページ。

(74) 高坂 ハー九ページ、三—四行。

(75) 高坂 ハー九ページ。

(76) 高坂 ハー九ページ。

(77) 高坂 一五、二七ページ、以下 Heinrich Rickert の科学論ともいうべき大著 *Grenzen der naturwissenschaftlichen
Begriffsbildung* が成ったのが一八九六—一九〇二年であるので、ほぼこの時期と平行している。なお、リッケルトのこ
の著は *Windelband* の *Geschichte und Naturwissenschaft* (1894) を承けて、その詳細に立ち入ったものである。ここで
は今手許にテキストがないこと、また主著作も岩波文庫で邦訳され刊行をみたが、今では入手も困難であるので高坂博士の
叙述を可成り詳しく紹介して、リッケルト体系における、その科学論にふれたいと考えている。

(78) 高坂 二八ページ。

(79) 高坂 三—三二、三〇、三三—三四ページ。

(80) 高坂 四〇ページ。

- (81) 行文において明らかであるようにハインリッヒ・リッケルトは二肢の構成つまり二肢一般項にいかなる数値を与えて表出するかに腐心するという従来までの構造化式構成の軌跡にたつものである。といえよう。そして、二肢による展開式そのものを明確に構造化とは意識せず、das Form-Inhalt-Gefügeでも高坂三七ページの訳語にみられるように、この Gefüge が「構造」と訳されている。とがあることで論理の発端は二つではなく三つであるとの説明が加えられ、ここでの「と」は die Zusammengehörigkeit von Form und Inhalt に対応するので、この das Form-Inhalt-Gefüge といっているこのでの構造は実質的にはこの「と」に収束してしまっているわけで、これがリッケルトによる構造把握の実態なのである。

- (82) 高坂 三六―三七ページ。
(83) 高坂 三八ページ。
(84) 高坂 三九ページ。
(85) 高坂 三九―四〇ページ。
(86) 高坂 四三ページ。
(87) 高坂 四三ページ。
(88) 高坂 四三ページ、一一―一二行。
(89) 高坂 四三ページ。
(90) 高坂 四四ページ。
(91) 高坂 四五ページ、一一―二行。
(92) 高坂 四五ページ、二―七行。
(93) 高坂 四五ページ、七―一二行。
(94) 高坂 四五ページ、一二行。
(95) 高坂 四六ページ。
(96) 高坂 四六ページ、九―一〇行。
(97) 高坂 四六ページ、一〇―一三行。
(98) 高坂 五〇ページ。

- (99) 高坂 五―五二ページ。
- (100) 高坂 五二―五六ページ。
- (101) 高坂 五六ページ。
- (102) 高坂 六一ページ。
- (103) 高坂 六一ページ、一二―一三行。
- (104) 高坂 六三ページ、三四行。
- (105) 高坂 六三ページ、四―五行。
- (106) 高坂 六四ページ、二―三行。
- (107) 高坂 六四ページ、三―四行。
- (108) 高坂 六八ページ。
- (109) 高坂 六九ページ。
- (110) 高坂 七〇、六九ページ。
- (111) 高坂 七〇ページ。
- (112) 高坂 七〇―七一ページ。
- (113) 高坂 七一ページ、四―九行。
- (114) 高坂 七一ページ、一〇―一二行。
- (115) 高坂 七二ページ、二行。
- (116) 高坂 七二ページ、二―四行。
- (117) 高坂 七二ページ、五―六行。
- (118) 高坂 七二ページ、七行。
- (119) 高坂 七二ページ、八―一一行。
- (120) 高坂 七二ページ、一―一三行。
- (121) 高坂 七二ページ一四行―七三ページ、二行。

ホセ・オルテカ・イ・ガセー初期二手稿の意義分析(高瀬)

- (122) 高坂 七三ページ、四―五行。
(123) 高坂 七三ページ、五―六行。
(124) 高坂 七三―七五ページ。
(125) 高坂 七五ページ、一二―一四行。
(126) 高坂 七六ページ。
(127) 高坂 七六ページ、四―五行。
(128) 高坂 七六ページ、七―一行。
(129) 高坂 七六―七七ページ。
(130) 高坂 七七ページ。
(131) 高坂 七七ページ、七―八行。
(132) 高坂 七八ページ、五―七行。
(133) 高坂 七八―七九ページ。
(134) 高坂 七九ページ、八行、七―八行。
(135) 高坂 八〇ページ。
(136) 高坂 八〇ページ一行及びこの二、自然科学と文化科学というタイトル参照。
(137) 高坂 八六、八五ページ。
(138) 高坂 八七ページ。
(139) 高坂 八八ページ、五―八行。
(140) 高坂 八八ページ、三―五行。
(141) 高坂 八八ページ、八―一行。
(142) 高坂 八八ページ一行―八九ページ二行。
(143) 高坂 八九ページ四行―九〇ページ二行。
(144) 高坂 九〇ページ二―四行。

- (145) 高坂 九〇ページ四一六行。
- (146) 高坂 九〇ページ六一一行。
- (417) 高坂 九一ページ。
- (148) 高坂 九一ページ二二三行、六一八行。
- (149) 高坂 九一―九二ページ。
- (150) 高坂 九二ページ。
- (151) 高坂 九二ページ一一、一二、一一行。
- (152) 高坂九二―九三ページ、だからこそ文化科学とよんだのである。
- (153) Heinrich Rickert (1863~1936) は Windelband のハーデン学派又西南ドイツ学派に属する新カント派の一人であった。
- (154) 因みに主体と結びつきながらも形而上学に墮さず、客観的ではあっても自然科学とは峻別されるような精神科学の形成と取り組み、科学論をとりあげた Max Weber がその成果の一つである Die Objektivität sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis を公にしたのは、一九〇四年のことである。科学論で Max Weber をとりあげるのはどうかといった批判もあろうが、ここはあくまでもオルテカにおける一九〇二年への道での模索に焦点を合わせているので、省いたのである。
- (155) 例えば、よく話題となる金属疲労といったものも、こういった構造的な一般論理を特殊化して、疲労といった現象を特定存在に限定するところから生れるのである。従ってまだ被規定化されぬものを沢山抱え込み科学自体が未完であるところからさまざまな問題が生じてきているのであるといえよう。科学化そのものに今に見られる病弊を帰する発想は誤りである。科学そのものが問題を孕むのではなく、その未完にこそさまざまな弊害の原由がひそむのである。いわゆる公害といったものにしても構造化図式に立脚せず、自然の処理し得ぬものを、処理し得る限界をこえてつく出し、しかも自然に処理させようとする、まさしく狂気としか言いようのない、ひとりよがりの似而非科学化の所産なのであるといえよう。科学論理、技術の哲学の不備こそまさしくとりあげるべき問題であると考えられるのである。
- (156) この内観という termino の含むものはただ個の中を見ることではない。若しもそうだとすると個の内にあって働いている生理機能について成立してくる生物学、医学といった自然科学的考察と何ら捉ふところがなくなるからである。従って、

そういった *entretelas* にみられるものを「観」る操作肢の構図収束にあたるものがこの内観なのである。オルテガはこういった発想を Wilhelm Dilthey より得たものである(一九三三・一一・一九三三・一二・一九三四・一に *Revista de Occidente* 誌にのせた Dilthey y la idea de la vida、遺稿による *Prólogo a la Introducción a las ciencias del espíritu* de M. Dilthey にのせた論稿で窺われようである)。そして *El Arquero* の Kant, Hegel, Dilthey p.194 V~par. 67, 68 で *introspección* 更にその純化形である *Selbstbesinnung*, *autognosis* にのせた *terminos* をあげようのである。

(157) 例えば Heinrich Rickert が高坂七六ページで言及されているように判断作用の見出される個別的主観という特殊に対して判断意識一般を提起せざるを得なかったところにその現われが見られよう。この一般と特殊は構成される二肢が変数化されるので、このままではアポリアたるを免れない。構図中での二肢はすでにルネ・デカルトの古典命題が語るごとく *cogitare* の中で動いている操作肢と *essere* の中にこめられている被規定肢であって、この数値賦与をはかるのがオルテガなのである。しかし、この構図にあつての問題はこの二肢を共在的に結びつける関連づけにあるのである。実在はすでにその中に振れ曲率を実現しているのであつて例えば古くから遺伝子の実体とされてきた DNA の二重螺旋構造(篠遠喜人 柳沢嘉一郎 遺伝学 p. 24~25 Watson-Crick DNA モデル 三浦謹一郎 DNA と遺伝情報二一三ページ)はその適例であろう。だから構造式構図化にあつてもこの実存構造に忠実な模写・構成することによつて直線特殊(矢野健太郎 アインシュタイン 講談社 人類の知的遺産 一四一―一四二ページ、曲面の各点を含む微小領域を平面と見なし得るばかりでなく……われわれが以上に考えた時空は曲率をもつた四次元のリーマン空間で表わされる。平面、直線はこういったものの特殊微分小において成り立つものとなるわけである。)に立脚していたこれまでの関連づけをトポロジ的な発想によつて Möbius の帯を利用した(田村一郎 トポロジー三〇ページ)曲面一般に対応した振れ交叉的関連づけに転換し、関連自体を多次元化少くとも三次化することが最小限必要となつてくるのである。

こういった関連づけによる二肢共在構造式を論理的に作図するとそれだけに自然所与の例えば DNA やトポロジー空間に見られる実在構造性に近似のものを構成できたこととなつて、その操作肢に一般と永遠の今を、被規定肢にそれぞれ *Gattung*、個体、個体内といった特殊化と永久に近い極限値近接がそれぞれ定位され、構図内で共在性を得ることになるのである。こういった関連づけでとりわけ被規定肢から操作肢を分離せぬ限り、いつまでも見られるものに見るものを帰し、被規定収束のまま、二つに一つのアポリアの前にたたされることになろう。だから、オルテガの解決も、真の整形対象から

それであるので所詮彼なりの恣意的な図式的なものでしかなかったのである。

- (158) José Luis Abellán はマドリのコンプレハンセ大学スペイン哲学史講座の教授であり、その著作も多い。私は算間にし
て教授として日本でも紹介されていると考えるので、次にその主要著述を列挙しておく。

Ortega y Gasset en la filosofía española (1966)
Filosofía española en América 1936-1966 (1967)

La cultura en España-Ensayos para un diagnóstico (1971)

La idea de América (1972)

Sociología del 98 (1974)

Fernando de Castro y el problema religioso de la filosofía española actual-una situación escandalosa (1978)

Historia crítica del pensamiento español vol. 1 1979 vol. 2 1979 vol. 3 1981 vol. 4 1984 未完

El Erasmismo español (1982) の附録に Colección Austral 収録時より、一九七五年 Enayo “El Europeo” の
賞状がつけられている。

- (159) José Luis Abellán Historia crítica del pensamiento español (以下 HCPE とし引用する) Prólogo p. 13

「以下、この著述の内容からみるスペイン哲学史というタイトルが最も近いであろう (par. 7) が哲学という術語が統
一的語義をもたず、それどころか逆に極めて曖昧な意味に用いられて (par. 9) その結果この術語による時には論争の惹起
が懸念されるのでスペイン思想として述べ (par. 13) この二つの語哲学と思想について検討を加えたことを示唆した上
で本論タイトルを filosofía とする言葉を用いる。その語義不統一の状況について触れてゆくのである (二九ページ)。

- (160) HCPE primera parte 1-1-par. 1 la filosofía es un quehacer científico, que versa sobre problemas universales...

- (161) HCPE primera parte 1-1-par. 24 に関連してスペイン哲学史というたものも可能であると述べる。

- (162) HCPE primera parte 1-1-par. 1 que pueden estereotiparse en las tres siguientes : 参照。また HCPE primera parte
1-1-par. 1 以下 6 (c) 更に par. 5 (c) 以下 6 (c) par. 11 以下 6 (c) がそれぞれある。

- (163) HCPE primera parte 1-1-par. 1

- (164) HCPE primera parte 1-1-par. 1

ホセ・オルテガ・イ・ガセー初期二手稿の意義分析(高瀬)

- (165) HCPE primera parte 1-1-par. 2
- (166) HCPE primera parte 1-1-par. 2
- (167) HCPE primera parte 1-1-par. 3
- (168) HCPE primera parte 1-1-par. 4 ななつの脚注(一)に Antonio Aróstegu, Esquema para una Historia de la Filosofía occidental Cam. Granada 1963 を掲げ、その序文を紹介しながら、この Aróstegu のものをあげ、西欧哲学史にスペイン思想を“intercalar”するよりは intercorporar し、より同化し組み込むようにすると指摘するのである。
- (169) HCPE primera parte 1-1-par. 5
- (170) HCPE primera parte 1-1-par. 6
- (171) HCPE primera parte 1-1-par. 7, 8
- (172) HCPE primera parte 1-1-par. 9
- (173) HCPE primera parte 1-1-par. 11 と 12 par. 12 に Abellán の意図するものの、この第三の postura に近いものがある。
- (174) HCPE primera parte 1-1-par. 17 とこの第三の postura は国民的性格について扱わねばならぬと述べ、このために par. 18 よりさらに第二の postura の臨んでいる閉鎖的な息がまる雰囲気よりの解放が必要であり、これがこの第三の postura の必備条件であることであれ、特に par. 19 以下でかかる条件を充足するにはいかにすればよいかに関して詳しく述べるようになる。
- (175) HCPE primera parte 1-1-par. 74
- (176) HCPE primera parte 1-1-par. 75
- (177) この項とこの項に文が指しつけられ、参照のこと。
- (178) HCPE primera parte 1-1-par. 76, 77, 78
- (179) HCPE primera parte 1-1-par. 79 と 65 par. 65 より重なり、la justificación filosófica de las historias “nacionales”, de la filosofía se nos impone por sí misma となる。
- (180) この termino はホセ・オルテガ・イ・ガセーのよく用いたものであった。だが、彼は行文でも後述するように、デカル

of the subject under discussion) じつでは「*le*」の意味で解したのである。またこの命題のフランス語では donc と
なるが、これに *le* Littre-Beaujean p. 346 *le* ad-tunc ou de unquam より由来するところだが、Sert à
marquer la *conclusion* qu'on tire d'un raisonnement Je pense je suis. Exprime qu'une chose est ou doit être la
consequence d'une autre. Sert souvent de simple *transition* pour revenir au sujet après une digression. Sert à
marquer une sorte d'étonnement. Sert à rendre plus pressante une injonction, Ironique とあるこれを前の英語と校
比するとほぼ同義である。

- (184) 例えば、桂 寿一 西洋近世哲学史 (一) 九四ページ。この命題については古来いろいろの異論があつて……とある。ま
た、落合太郎訳 方法叙説(岩波文庫)一八九一―一九七ページ 訳註(7)はこの命題について詳細な解説を施している。

- (185) Oxford Latin Dictionary p. 616 5)

- (186) Oxford Latin Dictionary p. 616 1)

- (187) リフノフ(松野武・山崎昇訳)リーマンとアインシュタインの世界(以下松野として引用する)原著は Анна Ливанова :
Три судьбы постижение мира であるが記されているが原書を入手していない現況では遺憾ながら訳書によるしかない
三四―三五ページ。

- (188) 松野 三三、三七ページ。

- (189) 松野 三七ページ下段。

- (190) 松野 三七ページ上段。

- (191) 松野 三七ページ下段。

- (192) 松野 三七ページ。

- (193) 松野 序に代えて三三―三四―五頁。

- (194) Morris Kline Mathematics in Western Culture (a pelican book) p. 193 We can best understand what... by
following the reasoning of Descartes, 小松醇郎 ほんぷんの幾何学(岩波新書)五三三ページ。これは座標を用いるの
Co-ordinate geometry である。

- (195) Morris Kline p. 192~193.

- (196) 松野 一ページ、リーマンが生れたのは、一八二六年のことであった。
- (197) 田村一郎 トポロジー (岩波全書) 二九—三〇ページ。
- (198) 従って “*Cogito ergo Sum*” 命題がその中に秘めていたまさにヨーロッパ近代の扉を開かせしめるに至った開け胡麻の咒語的な古典的意味は次の四つになろう。 i 構造式二肢の確定値的提示 ii *ergo* の第一の意味として二肢構成よりは関連づけの一般化、ギリシャ的有限に対してカルヴァンの発想とも関連した近代における無限導入との対応化 iii *ergo* の第二の意味と関わる主体内構造式のダイアクロノスの重層措置、従って平面構想では不十分であってまさしくかかる意味においての n 次元超空間への対応性の示唆 iv 消極的に現状としては収束的命題による提示を通じて真に近代的な関連づけが未完であることの含意といった四つなのである。
- (199) こういったところに近世以後の科学分化の功罪中欠点に関わるものが存する。ルネサンス的な普遍人としての面もまたもち、あらゆる分野に通じた、まさに遠近構図をふまえた百科全書的な科学人であることがかかる分化と並んで必要なのである。これがないと科学的 *particularismo* に陥る虞れがでてくるといえよう。
- (200) O. C. t. 1 par. 128 参照。
- (201) 例えば イスマエル・カントがブロイセンアカデミー版著作集第八巻 *Zum ewigen Frieden* S. 350 以下の注で論及している *Möglichkeit*, セーレン・キェルケゴールによって *Sysammen iil Døden* についてあらわれている *Mulighed* に注目する必要がある。
- (202) O. C. t. 1 par. 120, 122, 124 参照。

